

6. 注口土器, 他

注口土器と思われるものが11点出土しており、9点を図示し得た(第45図8~16)。鉢形を呈する土器の口縁部に注口部を有するもの(同8, 9)と、口縁部がすぼまる器形の胴部上半に注口部を有するもの(同10~16)とに分類できる。

8は大形のもので、内傾した口縁部上半に太めの粘土紐による波状文が、胴部には斜位に雑な条線文が描かれており、内面には丁寧な研磨が施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈し、胎土には大きめ砂粒を含んでいる。器厚は12~15mmを測る。9は第Ⅷ類の浅鉢の口縁部に、長さ1cmほどの注口部を付けたものである。胴部下半には単節LRの縄文が施されており、上半から口縁部及び内面には横位の研磨が施されている。色調は外面が赤褐色・黒色、内面が赤褐色を呈し、胎土にはやや大きめの砂粒を含んでいる。器厚は6~8mmを測る。13は球状の胴部を呈するもので、口径は約8cm、胴径は27cmを測る。器面にはやや丸みを帯びた二本単位の細い隆起線文で渦巻文等が描かれている。胴部上半に注口部の接着痕があり、小さな吊手状の装飾が施されている。色調は内外面ともに暗褐色を呈し、何れにも丁寧な研磨が施されている。なお外面には赤色塗彩痕が認められる。器厚は6mm前後である。10~12は13同様口縁部がすぼまる器形の注口土器の破片である。10は細い隆起線文が施され、口縁部に沿ったその一部には細い孔が開けられている。口唇部は細くつまみあげるように整形されている。色調は内外面ともに淡褐色を呈し、外面には粗い研磨、内面には丁寧な横方向のなでが施されている。器厚は6~7mmを測る。11, 12は、丸みを帯びながら内傾する口縁部から口唇部が直立しその端部が丸く整形されているもので、文様に関しては小破片のため確認できない。色調は淡褐色・暗褐色を呈している。器厚は6mm前後である。16は13に類似する土器の胴部破片と思われる。断面が稜をなす隆起線文が付されている。色調は黒色を呈し内外面ともに丁寧な研磨が施されている。器厚は5~6mmを測る。14, 15は注口部のみの破片である。14には隆起線文が僅かに認められる。

その他の器種として、有孔罎付土器、小形の壙形土器、蓋、脚部の破片が出土している。

17は直立する口縁部と、やや膨らむ胴部との間に2cm程のたが状の罎を有する土器である。罎部に貫通孔を有することから、ここでは一応有孔罎付土器として扱った。胴部には復節のLRの縄文が施されている。内面には僅かに研磨痕が認められる。色調は黒褐色を呈し、器厚は11~15mmを測る。18は推定口径が6.5cm、胴部が円筒形を呈する壙形土器の破片である。口縁部が短く外反し、口唇部は丸みを帯びている。色調は褐色を呈し、器厚は7mmを測る。19は台付鉢形土器等の脚部の破片である。底径は5.7cm。三条の雑な沈線文

が描かれている。色調は暗褐色を呈し、内面には、なで、外面には削りが施されている。器厚は7～9mmを測る。20は蓋の破片である。内面にはたが状の膨らみを有し、外面には細い篋状の工具による刺突文と沈線文が施されている。色調は淡褐色を呈し、器厚は7mm前後である。

次にこれらの所属する時期であるが、8は中期後葉に属し、他は後期初頭に属すると思われる。

7. 底部破片

底部破片は総計612点出土した。そのうち図示し得るものは、僅かに49点にすぎない(第47図1～29, 第48図1～20)。

これらを底部から胴部への立ち上がりかたや、その断面形状の特徴等から分類すると、次の8類に分けることができる。

I類 底部から直立ぎみに胴部へと移行するもの(第47図1～5)。

胴部外面はいずれも削り調整がなされたあと、丁寧ななでが施されている。細い隆帯が縦位に貼付されたものもある(1, 2)。色調は暗褐色、赤褐色を呈し、何れの胎土にも大量の金雲母が含まれている。

II類 胴部がやや内弯ぎみに開くもので、底部との境が丸みを帯びているもの(同6～15)。

多くは胴部下半にまで縄文が施され、底部近くはなで調整されている(7～12)。沈線文が縦位に施文されているものもある(6, 9, 12)。色調は暗褐色、赤褐色を呈している。

III類 底部から胴部へかけての外面に段を有するものである(同16～21, 23)。

小破片のため詳細は不明であるが、大形の土器が多い。色調は暗褐色、赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含んでいる。

IV類 底部端近くがやや浮いた状態を呈し、胴部に移行するもの(同22)。

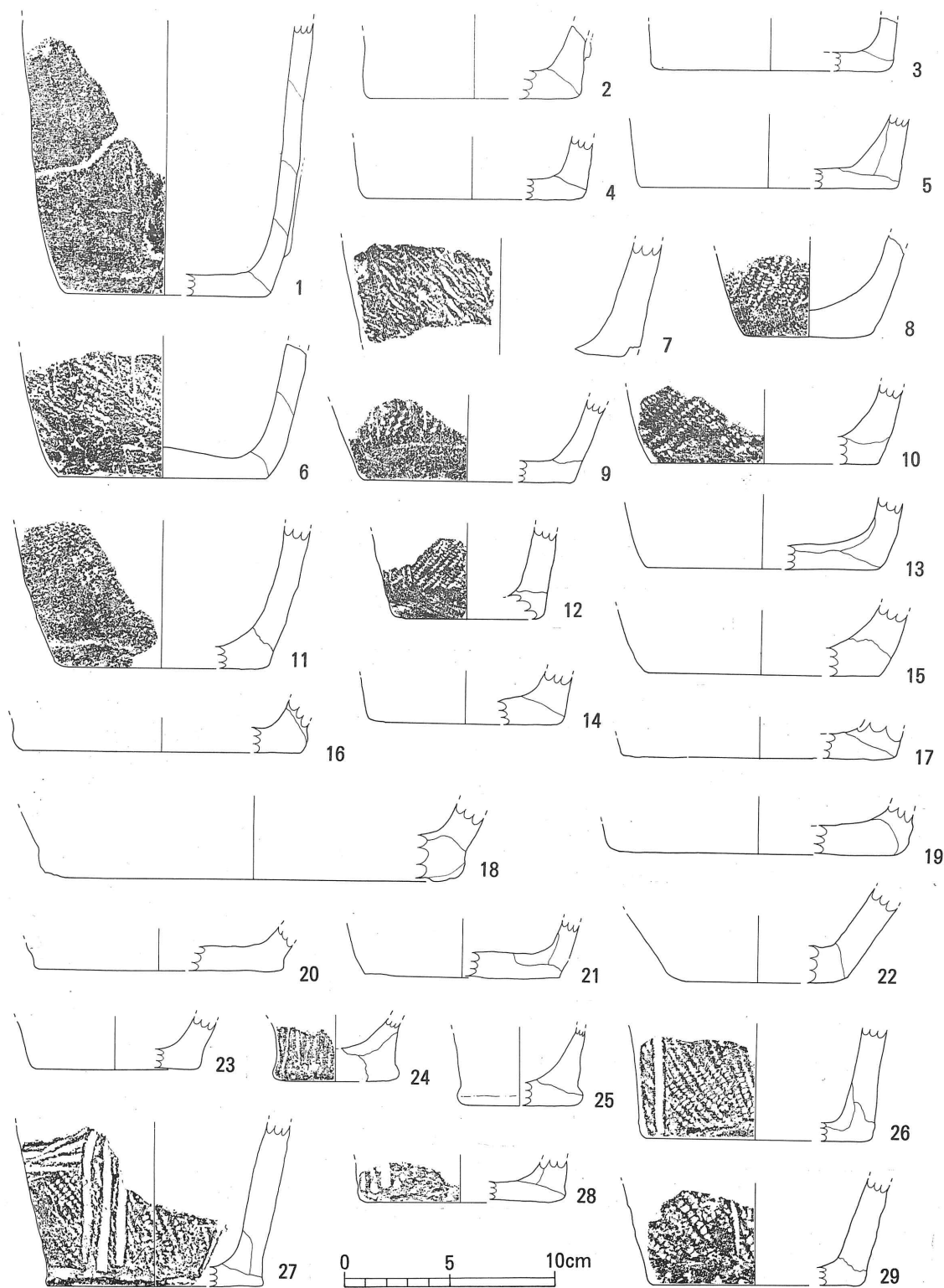
色調は淡褐色を呈し、胎土には多量の石英粒を含んでいる。

V類 胴部下半が細くつぼまり、底部端が突出するもの(同24, 25)。

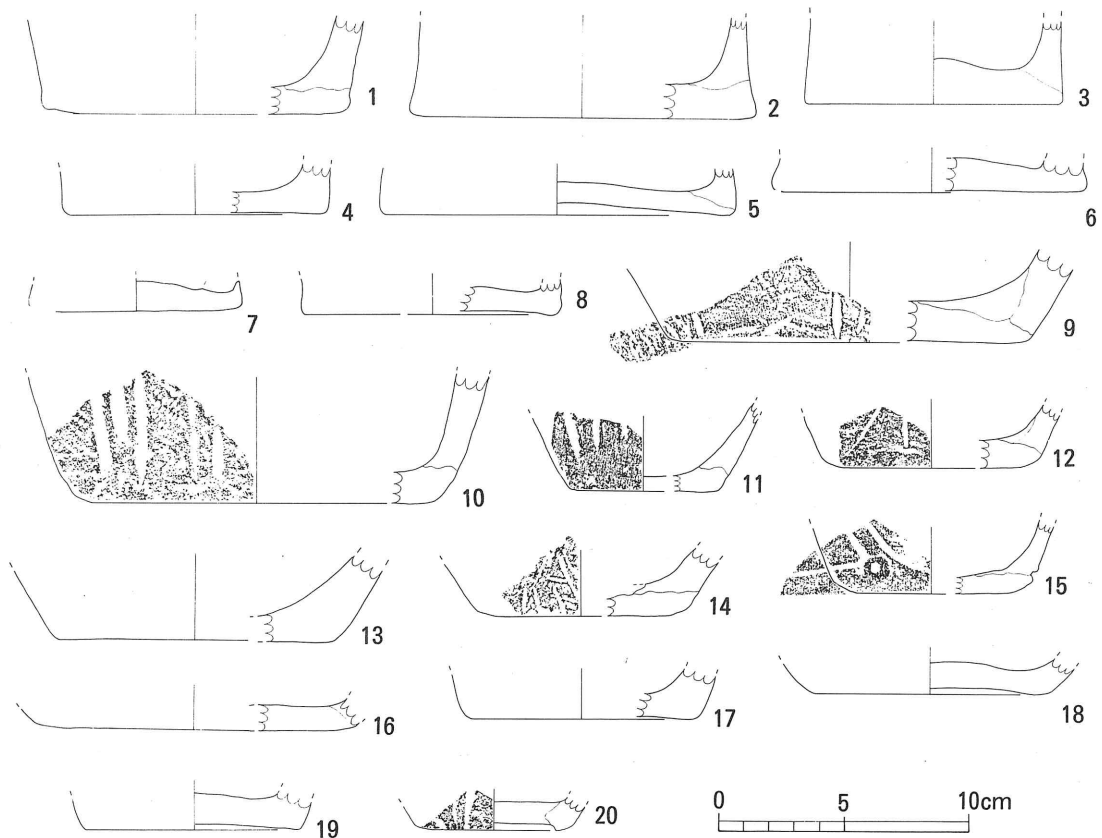
底部付近にまで雑な縦位の沈線文が施されるもの(24)と、無文のものがある(25)。何れも色調は赤褐色を呈している。

VI類 底部から直立ぎみに胴部へと移行するもので、底部端が僅かに突出するもの(同26～29, 第48図1)。

胴部下端にまで縄文が施され、三本単位の沈線文が施されるもの(26～29)と、無文でなで調整が施されたもの(第48図1)とがある。色調は淡褐色、淡赤褐色を呈し、何れの



第47图 土器底部实测图(1)



第48図 土器底部実測図(2)

胎土にも細かな黒雲母粒と砂粒が含まれている。

Ⅶ類 胴部下半がやや内傾しながら立ち上がるものである(第48図 2～8)。

底部内面中央部が肥厚するもの(3, 6, 7)と、緩やかな上げ底状を呈するもの(4, 5, 8)とがある。胴部外面には、なでまたは研磨が施されている。色調は淡褐色、淡赤褐色、黒褐色を呈し、何れの胎土にも細かな黒雲母粒と砂粒が含まれている。

Ⅷ類 胴部がやや内湾ぎみに緩やかに立ち上がるもので、底部との境が丸みを帯びているもの(同 9～16)。

平底のもの(9～16)と、やや上げ底を呈すもの(17～20)とがある。縄文を地文とし三本単位の沈線文が施されるもの(9, 10)、沈線文のみのも(11, 12, 14, 20)、円形の貼付文と沈線文が施されるもの(15)などがある。色調は淡褐色、淡赤褐色、黒褐色を呈している。

これら各類の所属する時期に関しては、小破片が多いために比定の困難なものもあるが、一応Ⅰ類は中期前葉の阿玉台式期、Ⅱ・Ⅲ類は中期中葉、Ⅳ・Ⅴ類は中期中葉から後期初

頭，VI—VIII類は後期初頭の堀之内I式期に属するものと思われる。

8. 底部圧痕

底部圧痕を有するものは，底部破片総数612点のうち，僅かに34点確認できた。その内訳は網代痕33点，木葉痕1点である。このうち23点を図示し得た（第49図）。

網代痕のうち編み方を確認出来たものはその内の16点であり，〔経〕の条に対する〔緯〕の条の〔超え〕〔潜り〕と，〔緯〕の条間の〔送り〕とによって分類すると，次の4類に分類できた。

I類 「1本超え，1本潜り，1本送り」のもの（第49図14）。

1点のみ出土した。〔緯〕の条の単位が10mmと，やや長いのが特徴である。

II類 「2本超え，1本潜り，1本送り」のもの（同1～13）。

最も多く13点出土した。いずれも，幅1～2mmの細い原体が用いられている。〔経〕の条が1本ずつを単位とするもの（2，3，5～11）と，2本単位のもの（1，4，12，13）とがある。

III類「1本超え，3本潜り，2本送り」，「1本超え，3本潜り，2本送り」，「1本超え，3本潜り，3本送り」の順で繰り返されるもの（同15）。

1点のみ出土している。〔経〕の条は2本単位で編まれている。

IV類 「4本超え，4本潜り，2本送り」と思われるもの（同16）。

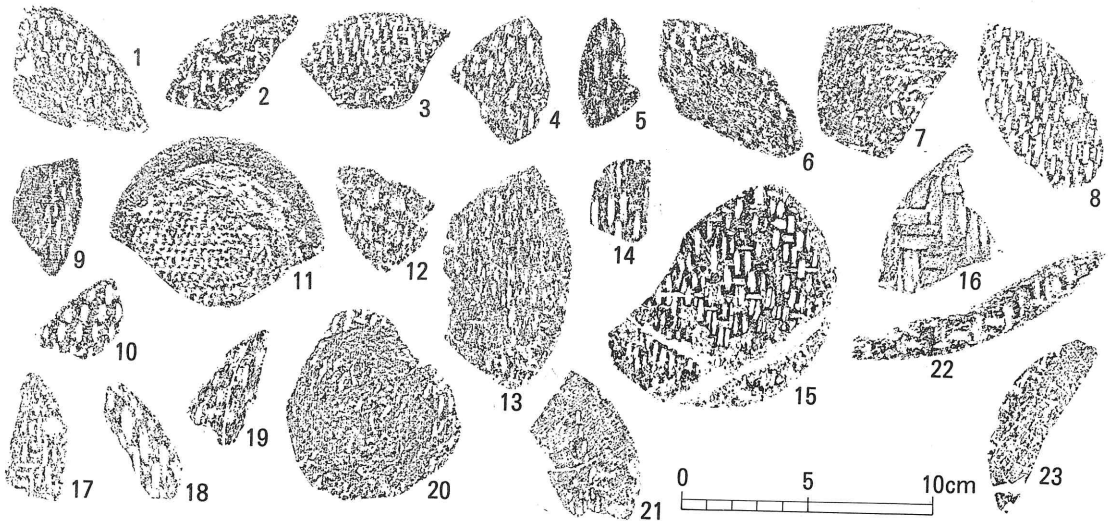
1点のみ出土している。原体幅が5mmをこえるためか，前述の各群と比べ異質な感じがする。

その他，網代痕で識別が困難なものが6点ある（同17～22）。

木葉痕は1点確認できた（同23）。

破損品のため，中脈（主脈）は不明だが，葉脈が末端では網目状に絡まっていることから落葉広葉樹と思われる。なお，葉脈の圧痕が鮮明なことから，土器底に葉の裏面を押しつけたことがうかがえる。

次にそれぞれの所属する時期であるが，1～3，17は中期前葉の阿玉台式期，4，5，12，14～16，18，19，22は中期中葉から後葉，6～10，11，13，20，21，23は後期初頭に属すると思われる。



第49図 底部圧痕拓影図

9. 土器接合痕，補修孔

土器の接合痕の明瞭なものが計11点出土した（第50図）。接合痕はその形態によって、次の2類に大別できる。

I類 積み上げた粘土帯の上端部に，細い棒状のもので刻みを施したもの。

刻みが器面の外側から斜位に突き刺すように施されたもの（第50図2～5），内側から斜位に施されたもの（同7～10），粘土帯を刻むように施されたもの（同12）の3種類がある。刻みの間隔は，概ね7～10mm前後のものが多いが，中には連続に近い状態で施されたものもある。

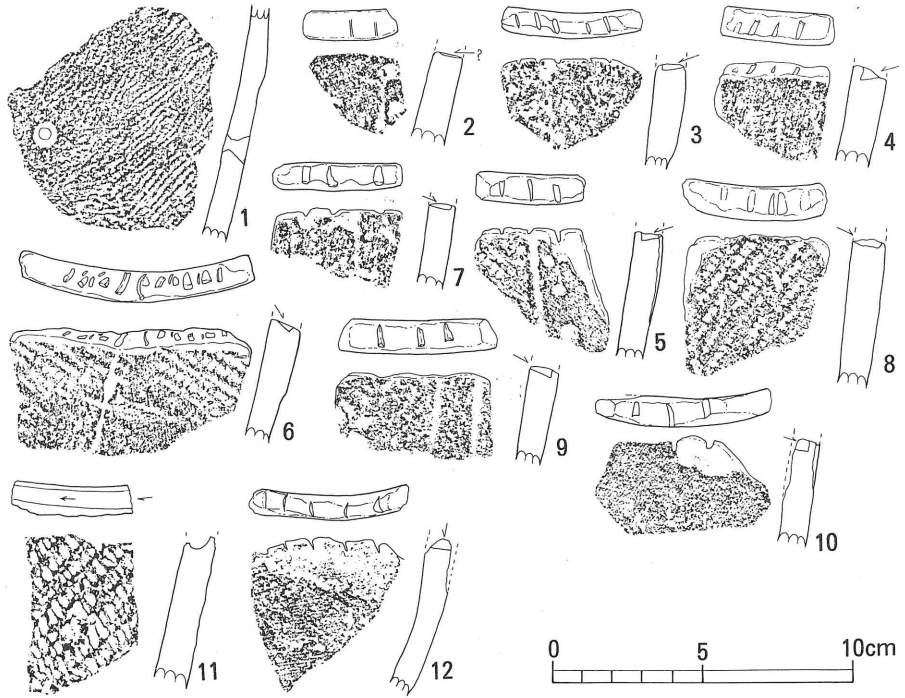
II類 積み上げた粘土帯の上端部に沿って，溝状の加工が施されたもの（同11）。

1点のみ出土している。幅5mm前後で，断面が半円形を呈する溝状の加工痕がある。

これらの接合痕は接着の際の結合度が弱かったために，いずれも残存したのと考えられるが，刻みの形状もあまり変形していないことから，かなり器面の乾燥がすすんでから，施されたものと考えられる。

次に，補修孔のある土器片であるが，僅かに1点のみ確認できた（第50図1）。器厚が7～8mm前後の粗製土器と思われるもので，外面に単節の斜縄文が施されている。補修孔は両側から穿孔されているが外側からのほうがより穿孔度が強い。穴の周辺は摩滅している。

これらの土器片の所属する時期は中期後半から後期初頭と思われる。



第50図 土器接合痕他拓影図

10 堀之内 I 式土器の概要

— 古宿遺跡出土土器を中心として —

今回の調査では縄文時代後期前葉の堀之内 I 式土器（第 2 群土器）が多量に出土した。本項では、古宿遺跡出土の堀之内 I 土器の検討を中心に据えて県内各所の該期土器についてその概要を記述したい。その概要とはいってもここでは堀之内 I 式土器一部のバリエーションを提示するに止どめたい。つまり、堀之内 I 式土器の組成内容を総て扱えなかったことをまずは断っておきたい。それは次の理由による。該期の出土例は県内各地かなりの数にのぼる。しかしながらまとまった資料は必ずしも多いとはいえない現状である。住居跡などの遺構検出例は二・三あるものの一括資料として確認できる例は殆ど無い。古宿遺跡でも土器埋設遺構として単体で検出されたもの、遺物包含層出土のものが大半であった。今回ここで例示した資料も殆どその例に漏れないところである。これらの資料は遺構単位の一括遺物とは性格を異にするため個々の土器の共存性について云々することは問題が大きいと考えられるからである。

しかしながら古宿遺跡の発掘資料では該期の土器について幾つかの分類が可能であった。本項ではそれらを基本に現在確認できる県内各地の堀之内Ⅰ式土器について編年的位置づけと土器の系統性について若干のコメントをしたいと思う。

堀之内Ⅰ式土器の研究は大正年代の型式確認以来長い歴史を有している。しかしその型式内容の整理は長い間等閑視されていた。堀之内Ⅰ式土器についてはとくにその感が強かった。近年、発掘調査の進捗に伴う資料の増加と相まってようやくその型式細分など活発に行われる様になった。1982年関東近県の該期資料の比較検討が行われた(市立市川考古博物館編1982)。それによれば堀之内Ⅰ式土器は現在では第1～第3段階の大方三細分に統一されている。本項でもそれを援用し三細分の枠で考えようとした。本遺跡の堀之内Ⅰ式土器はその第3段階に大半含まれるようである。但し、県内各所の土器を通観すると地区によっては後述するように系譜の異なる幾つかの土器を提示することが出来る。

本項ではまず例示した資料を形態的な側面から分類してみた。但し、今回取り扱った資料は甕形土器・深鉢形土器であり、その他の器形については分類対象とは出来なかった。これは扱った資料の殆どが土器埋設遺構に使用された単体資料であるため土器の種類が非常に少ないからである。次いで各器形毎に用いられた文様とその施文位置(文様帯)などによる分類も試みた。堀之内Ⅰ式期に至って顕著になる土器の精粗の別、注口土器、浅鉢土器、小形の特殊な土器などについてはここで取り上げることは出来なかった。ここでは、現在確認出来る県内の堀之内Ⅰ式土器の整理案といった意味で記述したいと思う。

堀之内Ⅰ式土器の分類

形態的な側面

今回検討対象とした資料は20数遺跡29個体の土器である。これらを形態的な面から次の四種類に分類できた。

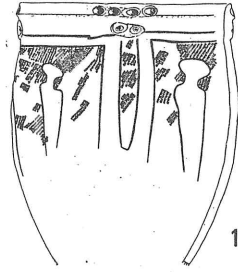
A 頸部で大きくくびれ胴部の膨らむ器形。第51図1～11, 第28図2,3,5など。

古宿遺跡後期第2群土器のうちⅡ類a種の大半, 同b種及びⅠ類の一部などこれに含まれよう。

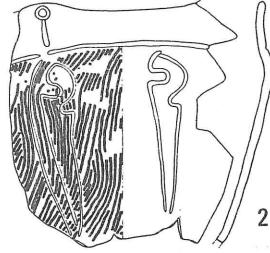
B 口縁部が直立するか或いは内傾気味に立ち上がり, 多くは胴部にそれほどの膨らみを見せないで底部に移行する器形。第44図31, 32, 35など。中には第51図12などのようにやや下膨れ気味の胴部をもつものもある。

古宿遺跡後期第5群土器のうちⅠ類c種がこれにあたる。

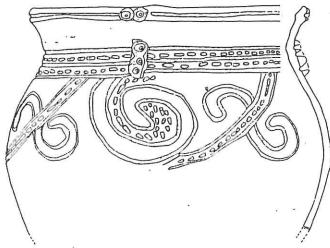
C 口縁部が内湾し丸味を帯びた口頸部を持つ。胴部以下は底部に向かってやや膨らみを見せながらスムーズに移行する器形。第52図1～6など。中には第29図5などのよ



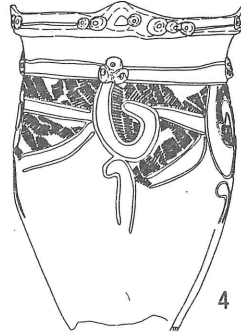
1 後藤 (藤岡町)



2 槻沢 (西那須野町)



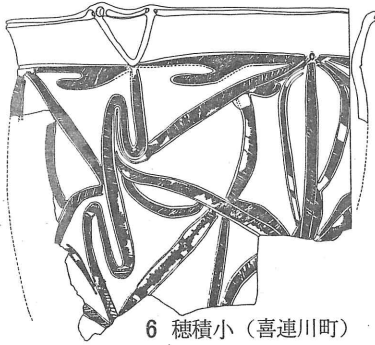
3 遠原 (藤岡町)



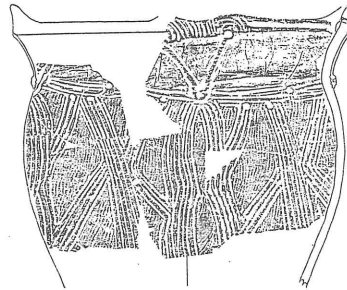
4 北の内 (佐野市)



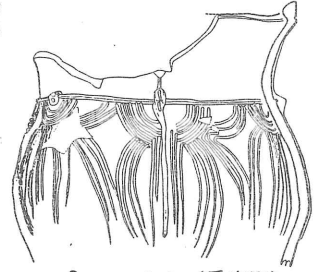
5 北の内 (佐野市)



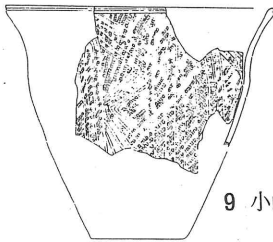
6 穂積小 (喜連川町)



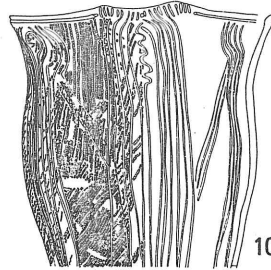
7 塚原 (真岡市)



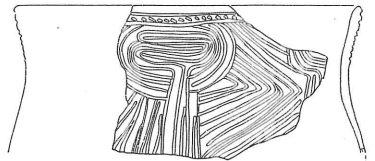
8 ハットヤ (氏家町)



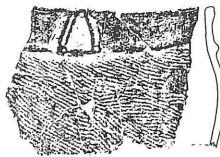
9 小山市



10 小山市



11 小山市



12 槻沢 (西那須野町)

第51図 県内各地の堀之内I式土器(1)

うに胴部が直線的ないしは内反り気味になるものもある。

古宿遺跡後期第5群土器のうちⅠ類b種がこれにあたる。また第28図4の土器なども器形的には同様と見られる。

D 底部から口縁部に向かって直線的に開く器形。第52図7などがこれにあたる。

古宿遺跡後期第2群土器のうちⅡ類c種がこれにあたる。

これらのうちA・Bは甕形土器の一群、C・Dは深鉢型土器の一群である。Bには地文縄文部の多い飾られない土器でありかつて粗製土器と言われたものが大半を占める。Cにも同様なことが言えそうである。しかしBの様な器形の土器をもって総て粗製土器であるとは一概に言えないようである。同様な器形の土器を多く見ることの出来る綱取Ⅰ式・Ⅱ式土器などにはその胴部に磨消しや沈線を用いてこの時期特有のモチーフを描出した土器を間々見受けられるからである。またCも第28図4の土器をみるかぎり粗製土器に多く見られる器形とは言えそうも無い。後述するように今回提示した資料は堀之内Ⅰ式土器の中でも新しい段階のものが大半であった。Dなどの器形の土器は堀之内Ⅰ式土器としては割合ポピュラーなものと考えられるが、今回それ程の量は提示出来なかった。但し文様の展開を見る限り堀之内Ⅰ式土器でもやや新しい段階に出現する器形らしい。

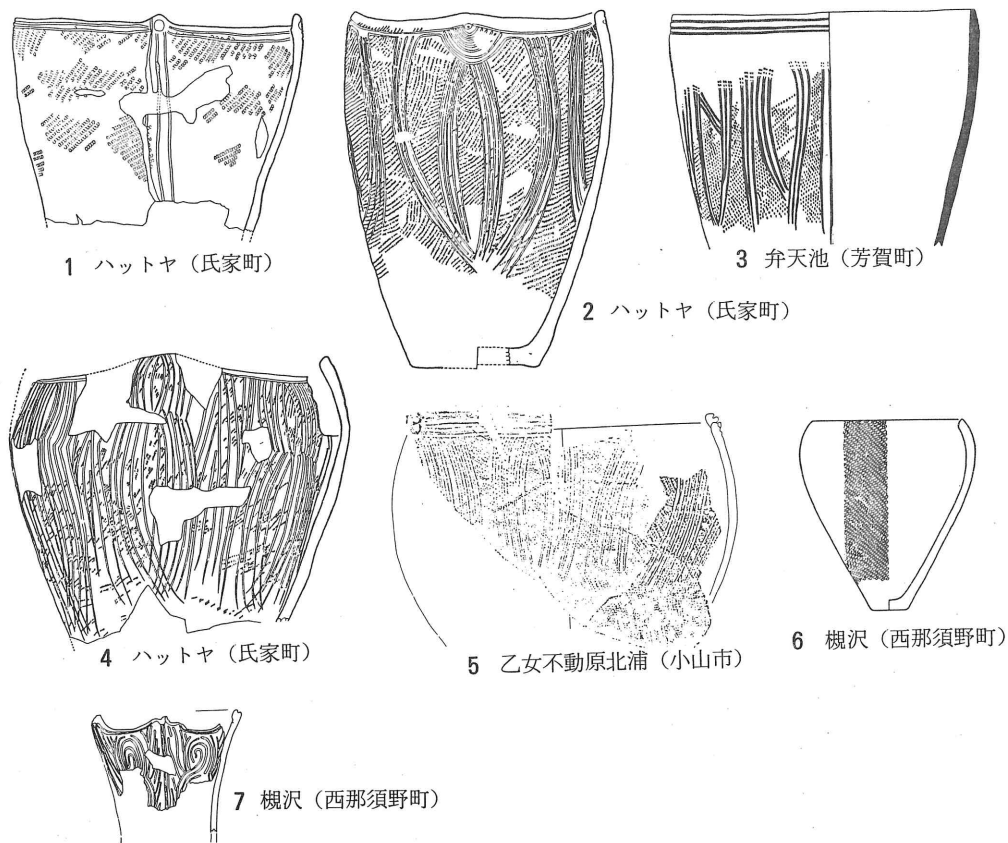
文様とその施文位置

以上、形態的な側面から土器の分類を試みたわけである。次いで文様的な様相からの分類を試みたい。

上述の四形態のうちA形態の土器群が最も多量に確認できた土器群である。文様についても他の形態に比べて最も多くのバリエーションを提示できるものである。まずこの形態の土器群の検討を手はじめに、文様の変化からみた時期的な変遷を考えて見たい。更にその文様が施された位置の観察から幾つかの種類分けをし、土器の系統性についても若干触れてみたい。

一部に例外はあるがA形態の土器群は地文縄文とその上に施された沈線文の特徴的な土器群である。沈線文で描かれるモチーフは蕨状文やJ字文、渦文などであり、いずれも曲線的なものである。また第28図2、第51図10・11のように器面全体にこれらを施すものも二・三あるが、大半は第51図1～8などのように胴部文様として用いられることが多い。これらの文様を通観すると前記した堀之内Ⅰ式土器の三段階区分に概ね合致するようである。つまり次の三段階に区分することが可能である。

・基本的な文様（単位文様）が明確でありそれが独立的に器面に配置される段階。単位文様には太い沈線による簡素なモチーフ（蕨状文・J字文）が描かれる。



第52図 県内各地の堀之内I式土器(2)

・各単位文様間を一種の連絡文でつなぐ段階。各単位文様を複数の沈線で表現するなど沈線の多条化の傾向が窺われる。

・沈線の多条化が更に進み沈線が器面全体を覆うようになる段階。単位文様を強調するという意識は次第に薄れてくる様である。

それぞれ第一段階、第二段階、第三段階と仮称し実際の土器群と照合してみる。ただしそれぞれの中間的なものが実際には間々見受けられる。この区分はあくまでモデル的なものと理解したい。

第一段階 第40図3, 第51図1・2など。第51図1のように一部にまだ磨消縄文が存続するようである。同図2などは単位文様は明確であるが沈線でそれを囲むなど沈線の多条

化の傾向が看取される。単位文様として蕨状文が多用される。

第二段階 第28図2, 第40図1, 第51図3～6など。第51図4のように磨消縄文が残る。各单位文様間に二本単位の連絡文が取り付けられる。J字状のモチーフ(第40図1, 第51図4・5)や一種の渦文(第51図3)など窺える。その他蛇行文, 入組み文的なモチーフなど施される。第51図3などは沈線間に刺突を持つなど称名寺式土器の名残を窺える土器である。第51図6は帯縄文の特徴的な土器でやや異質とみられるが単位文様とその間の連絡文など第二段階の一群として良かろうと思われる。

第三段階 第28図3, 第29図1, 第51図7～11など。最も多量に検出されている一群である。蕨状文や渦文など窺うことが出来るが, 第28図3のようにそれは痕跡的なものになる。それを囲む沈線数も四～五本と多条化の傾向が一層進む。第51図11のように器面全体に沈線を充填するものも現れてくる。口縁部に様々な突起が付けられるのもこの段階である。

次いで上述の段階区分を基本にA, C, Dの三形態の土器群について更に詳細に観てみる。

A形態の土器は頸部を無文に作る一群と地文縄文を施す一群の大きく二つのタイプに分けられる。両者とも第一段階から第三段階まで存続するようである。また両者の口唇部文様帯を比較すると前者には顎の目立つ比較的幅広であるのに対し後者は狭くかすかに屈曲するだけである。更に前者では大振りな貼付文を窺えるが後者は刺突文が多くなっている。頸部と胴部の境にも前者では貼付文を窺うことができる。前者はストレートにはつながらないが関東西南部に多く分布する該期の土器群との関連を想起させる土器群である。更に, A形態の一群の中には第28図5の土器のように全面地文縄文のみの飾られないものがある事は注意されよう。

C形態の土器も大まかに二種類に分けることができる。一つは地文縄文の上に沈線による文様を描くもの, 一つは地文縄文のみのものである。一般には後者の土器は粗製土器と理解されている。両者を同種に扱うのはやや奇異にみられよう。しかし形態的に同様であることに重きを置いて考えると土器組成の中では同一の一群とみたほうが適切かと思われる。沈線文の施された一群の土器は今回の資料では第3段階に当たるものが多い。

D形態の土器についても今回の資料では第3段階のものが大半を占めている。更に, 器面に施された沈線文はより細密になっており第3段階でもより新しい部分になると思われる。第29図2などはもはや主要なモチーフの判別は困難で沈線もより細くなっている。第39図2・9～16もこの一群とみられる。2はやや太い集合沈線の施された土器である。このような一群の土器が次の段階に9～16のような区画文を多用する一群に変遷するものと考えられる。9および10などは堀之内Ⅱ式土器直前に位置付けられよう。

次に、土器の系統性について若干触れてみたい。

県内の堀之内Ⅰ式土器を概観すると、以上のように大まかに三段階に区分できる。これは一応単位文様の変化や沈線の多条化の進行度合いなどで説明される訳である。これを言い換えれば主要なモチーフの変遷をもって理解できる訳である。つまり蕨状文の変化や「J」字文の消長などで説明することも可能かと考えられる。

蕨状文や「J」字文は決して堀之内特有のモチーフではない。それは前代の称名寺式土器のなかに随所に見られるモチーフである。称名寺式土器は近年かなりの細分が試みられている。この中で磨消縄文（充填縄文）から沈線文へという変遷は大方納得できよう。主に関東地方南西部においては、堀之内Ⅰ式土器は地文を持たない沈線文系の土器として開始される。器形的にも称名寺式の流れのなかに追うことが可能と思う。

本県にも一部にそのような系統の土器が二・三窺える。例えば第51図3などがこれにあたと考えられる。しかし本県域を含む関東地方北東部の堀之内Ⅰ式土器を概観すると、称名寺式一統では律しきれない。地文に縄文を所有することや器形的な様相など何等他の系統の介在を認める必要があるだろう。

前述のB形態の甕形土器は幅広の頸部文様帯、胴部以下の縄文部の面積の広さなど特徴的な一群である。更に頸部と胴部との境には多くのものが一種の隆帯を取り付けている。口頸部は幅広く無文に作りその要所に「J」字や「ノ」字の隆帯をあしらう。仮にこの土器の胴部に沈線文や磨消縄文など施された場合南東北に広く分布する綱取式的な様相を想起することも決して不可能ではない。これは器形的にもうなずく事ができそうである。事実本県においてもそのような土器が所々に確認されつつある。

堀之内Ⅰ式土器は関東各所で数多く検出されるにも拘わらずその研究は充分のものとは言えない。該式土器の成立に当たっては幾つかの系統が絡み合う事は明白である。特に本県については関東南西部などの様相は当然の事、南東北などの事情も決して無視はできない。

第2節 土製品

1. 土器片錘

土器片錘は、第4表に示すように、破損品を含めて計16点出土した。E区を除いた調査地区から分散して出土しており、CXII～DXII区で比較的多く出土している（第53図参照）。

いずれも土器片を利用したものであり、すべて長軸の両端に紐掛けを有する形態のものである。

完成品14点の長さ・幅・厚さの平均値は、それぞれ4.56 cm, 3.35 cm, 1.16 cm, 重さは最も重いもので35.8 g, 軽いもので10.5 gを測り、その平均値は21.14 gである。

時期的には中期末葉の加曾利EIV式期から後期初頭の堀之内I式期にかけての所産と思われる。

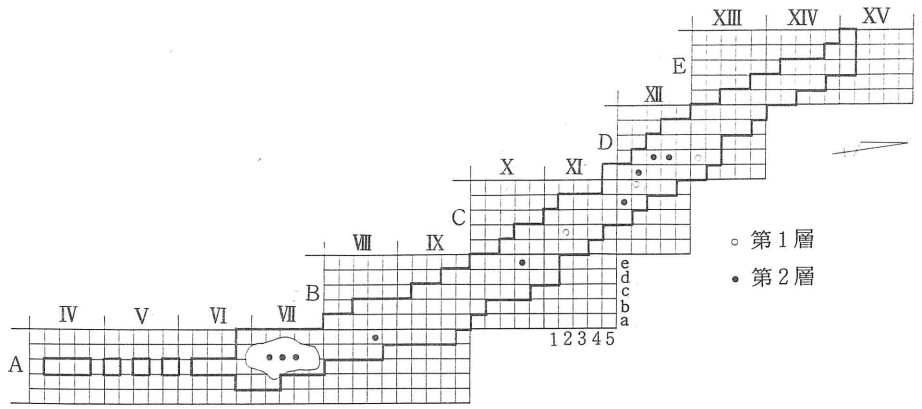
第3表 土器片錘一覧表

〔単位cm及びg.()を付したものは現存値を示す〕

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	文様・時期	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1号配石	—	A	完形	称名寺	4.5	2.7	1.7	28.1	54-4
"	—	A	"	堀ノ内	6.1	3.5	1.3	29.5	54-5
"	—	A	½	縄文LR	(4.4)	4.7	1.3	(27.8)	54-10
5号配石	埋土中	A	完形	無文	3.4	2.8	1.1	13.6	54-11
13号土壌	"	A	"	加曾利EIV	5.2	4.1	1.2	29.4	54-1
AⅧ-e 4	第2層	A	"	無文	3.7	3.6	1.3	21.3	54-12
BX-e 4	"	A	"	加曾利EIV	5.6	6.0	1.0	35.8	54-2
CXI-b 2	第1層	A	"	無文	4.0	2.9	0.8	12.4	54-13
CXII-d 1	第2層	A	"	無文	3.9	3.4	1.0	15.7	54-14
CXII-e 2	第1層	A	"	縄文RL	3.7	2.1	1.0	10.5	54-7
"	"	A	"	堀之内I	3.9	2.3	1.7	20.5	54-6
DXII-a 2	第2層	A	½	縄文RL	(2.7)	3.0	1.2	(12.9)	54-8
DXII-b 3	"	A	完形	無文	4.6	4.3	1.1	22.9	54-15
DXII-b 4	"	A	"	加曾利EIV	4.9	3.0	1.1	17.3	54-3
DXIII-b 1	第1層	A	"	無文	6.1	2.9	1.1	23.9	54-16
表採	—	A	"	縄文RL	4.2	3.3	0.8	15.1	54-9

2. 土偶

土偶の手の部分と思われる破片が13号土壌から1点出土した（第55図2）。残存部の長さ・巾・厚さはそれぞれ3.0, 0.9, 1.0 cmを測る。文様は施されておらず、鋭利な道具によって各面が削り出されている。色調は赤褐色を呈し、胎土には微砂が含まれている。



第53図 土器片錘の地区別分布図



第54図 土器片錘拓影図

3. 垂 飾

管状を呈する垂飾の完形品が1号配石から1点出土した(第55図1)。両端部が僅かに膨らみ、中央部に沈線が一条めぐらされている。径4mmの細い棒状の芯に粘土を巻きつけ、丁寧につまみながら整形したものと考えられる。長さ・巾・厚さ・重さはそれぞれ6.4, 2.0, 1.8cm, 20.2gを測る。色調は淡褐色を呈し、胎土には微砂が多く含まれている。

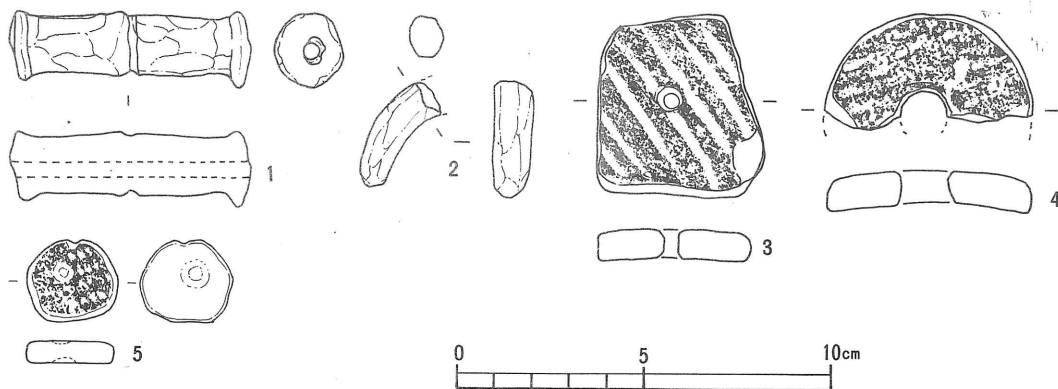
4. 有孔土製円盤

有孔土製円盤の完形品、破損品、未製品がそれぞれ1点ずつ出土した(第55図3~5)。いずれも土器の破片を利用したものである。3は完形品であり四角形状を呈している。中央部に径4mmの穿孔が施されている。器面に集合沈線が見られることから、堀之内I式期に属するものと思われる。4は円形を呈するものの破損品であり、中央部に推定径12mmの穿孔が施されている。器面には斜縄文が施されている。5は円形を呈する小形の未製品であり、上端部が僅かに凹み中央部近くに推定径3mmの穿孔途中の痕が残っている。器面には斜縄文が施されている。

第4表 土製品一覧表

[単位cm及びg。()を付したものは現存値を示す]

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材 質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
13号土壙	埋土中	土偶?	破片	—	(3.0)	0.9	1.0	(3.8)	55-2
1号配石	—	垂飾	完形	—	6.4	2.0	1.8	20.2	55-1
"	—	有孔円盤	½	—	(2.8)	5.5	0.9	(16.2)	55-4
DⅩⅡ-d4	第2層	"	完形	—	4.8	4.5	0.8	21.8	55-3
EXⅣ-a1	第2層	垂飾未製品	完形	—	2.5	2.2	0.5	3.7	55-5



第55図 土偶、垂飾、有孔土製円盤実測図

5. 土製円盤

第5表に示すように、土製円盤が250点出土した(第56～第59図)。調査区全域から出土している(第60図)。

何れも土器の破片を整形したものである。周縁に粗く調整剥離を加えただけのものと、更に研磨を加えたものがある。

平面形で次の5類に分類できる。

I類 縦横共に同じ程度の長さで、角のとれた円い形を意識して作られたと思われるもの(第56図1～30, 第57図1～20, 24, 第59図5)。

土製円盤の大半を占めており、完形品109点、破損品117点の計226点が出土した。完形品109点の長さ・巾・厚さの平均は、それぞれ4.2, 3.7, 1.0 cmを測る。重さの平均は20.1 gで、重量の度数分布をみると、10 g以上20 g未満の段階のものが過半数を占めていることがわかる(第61図参照)。

第57図17や第59図5は蓋の可能性もあるが、一応ここでは土製円盤として扱った。

II類 縦横のいずれかを、他方より長くすることを意識して作られたと思われるもの(第58図27～37)。

完形品2点、破損品16点の計18点が出土した。半割されているものが多い。

III類 四角形を意識して作られたと思われるもの(第59図1～3)。

完形品が3点出土した。1点は、長さ・巾ともに5 cmをこえる大形のものである。

IV類 長方形を意識して作られたと思われるもの(第59図4)。

完形品が1点出土した。第II類に含まれる可能性もあるが、より長形状を呈しているので一応別に扱った。地文には複節の縄文が施されており、長さ6.1 cm, 巾3.4 cmを測る。

V類 三角形を意識して作られたと思われるもの(第59図6)。

完形品が1点出土した。単節の縄文が施されており、長さ4.2 cm, 巾4.1 cmを測る。

なおI類及びII類に属すると思われる円盤を、半割(第57図21～23, 25～35, 第58図1～12, 28, 29, 32～37)または¼割(第58図13～26)したような形状を呈する破片が全体の半数以上の133点出土している。これらの破損は土圧によるものと考えるよりも、何らかの人為的な要因によるものと思われる。

文様から時期を比定できるものとして、最も古いもので阿玉台Ⅲ式期のものが3点、加曾利E式の後半期に属するものが27点、称名寺式期のものが17点、堀之内式期のものが10点、後期初頭と思われるものが4点出土している。他の無文のものや、縄文のみのものも中期後葉から後期初頭にかけての所産と思われる。

第5表 土製円盤一覧表

[単位cm及びg ()を付したものは現存値を示す]

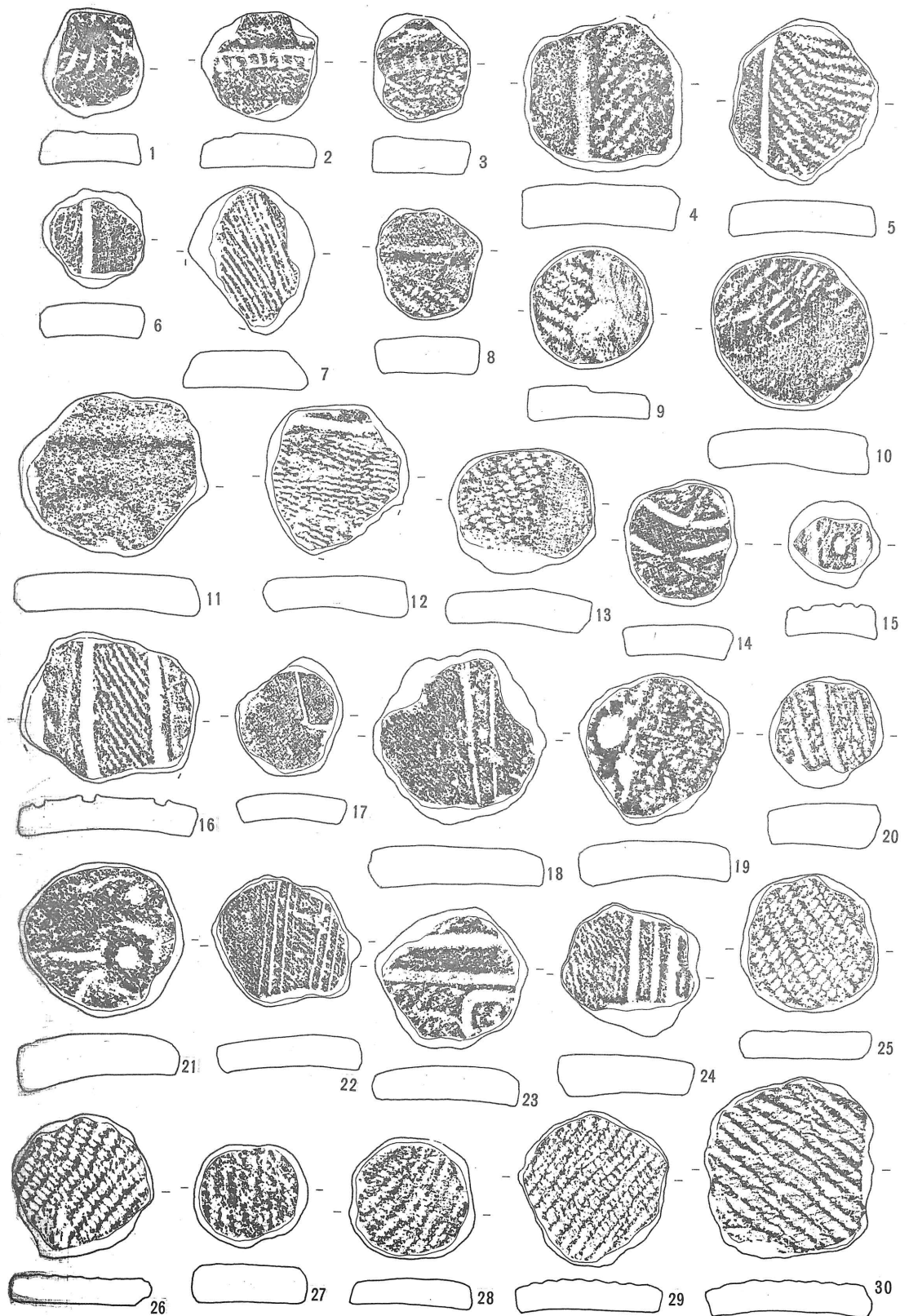
出土地区	出土層位	器種	遺存状態	文様・時期	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1号配石	—	I	1/2	加曾利E後半	(4.6)	(3.5)	1.2	(23.8)	56—7
"	—	"	1/2	加曾利E IV	(4.7)	(3.2)	0.9	(12.3)	—
"	—	"	一部欠	称名寺	4.0	3.5	0.8	(16.4)	56—14
"	—	"	1/4	堀之内 I	(3.9)	(3.3)	1.2	(18.7)	58—14
"	—	"	1/2	"	3.5	(2.8)	1.4	(13.8)	—
"	—	"	完形	縄文 R L	4.7	4.3	0.9	22.4	56—25
"	—	"	"	縄文 L R	4.5	4.4	1.0	24.1	56—26
"	—	"	"	"	3.8	3.3	0.9	12.2	—
"	—	"	"	無文	5.6	4.9	0.9	32.7	—
"	—	"	1/2	縄文 R L	(5.8)	(3.4)	0.9	(26.8)	—
"	—	"	完形	無文	4.1	3.4	1.0	20.7	—
"	—	"	"	縄文 L R	4.4	3.7	1.0	17.7	—
"	—	"	1/2	無文	4.7	(3.0)	0.6	(12.5)	—
"	—	"	完形	"	3.8	3.3	0.9	15.0	—
3号配石	—	"	"	縄文 L R	3.7	3.4	1.2	18.4	56—27
"	—	"	1/2	縄文LR+沈線	6.0	(4.2)	0.9	(27.0)	57—27
"	—	"	1/4	縄文 ?	(3.6)	(3.4)	1.1	(14.0)	—
"	—	"	1/2	無文	5.7	(3.6)	1.3	(28.8)	57—28
"	—	"	一部欠	縄文 R L	3.6	3.0	1.3	(15.3)	—
"	—	II	完形	加曾利E III	5.1	3.0	1.6	28.5	58—27
"	—	"	1/2	加曾利E IV	(3.8)	3.9	1.0	(24.8)	58—28
6号配石	—	I	完形	縄文 R L	2.7	2.5	0.6	5.3	—
7号配石	—	"	"	"	4.1	3.9	0.9	16.0	56—28
"	—	"	1/2	無文	5.0	(2.9)	0.8	(16.1)	57—29
"	—	"	"	"	4.1	(2.5)	1.2	(7.8)	—
3号土壌	埋土中	"	完形	縄文 L R	5.0	4.7	1.0	27.9	56—29
6号土壌	"	"	"	後期初頭	3.5	2.8	1.0	9.4	—
8号土壌	"	"	1/2	縄文 R L	5.5	(3.2)	1.0	(19.0)	—
"	"	V	完形	縄文 L R	4.2	4.1	0.9	15.9	59—6
10号土壌	"	I	"	称名寺	3.5	3.0	1.1	13.2	—
12号土壌	"	"	1/2	中期後葉	3.6	(2.6)	0.7	(7.4)	—
"	"	"	"	称名寺	(5.4)	(3.4)	1.3	(25.1)	58—17
"	"	"	完形	無文	6.0	5.6	0.9	37.9	—
"	"	"	1/2	縄文 ?	3.5	(2.5)	1.1	(10.9)	57—30
"	"	"	"	縄文 R L	(3.3)	(3.7)	0.7	(11.6)	—
"	"	"	"	無文	3.6	(2.5)	1.0	(10.4)	—
"	"	"	1/4	縄文 R L	(2.7)	(2.7)	1.1	(10.1)	—
"	"	"	一部欠	縄文 L R	4.6	4.1	0.8	(13.9)	—
13号土壌	"	"	完形	加曾利E IV	3.3	3.0	1.1	13.2	—
14号土壌	"	"	"	縄文 R L	4.9	4.3	0.8	20.6	—
"	"	"	一部欠	無文	4.4	4.3	1.0	(24.3)	—
"	"	"	完形	縄文 L r	3.9	2.6	1.0	8.1	—
"	"	II	1/2	縄文 L R	(3.5)	3.1	0.9	(11.7)	58—29
15号土壌	"	I	完形	沈線	5.1	4.5	0.9	24.7	57—1
20号土壌	"	"	1/4	縄文 L R	(3.3)	(2.7)	1.0	(10.5)	58—19
"	"	"	"	縄文 R L	(3.7)	2.5	0.7	(7.8)	58—25
22号土壌	埋土中	I	1/2	無文	3.7	(2.5)	0.8	(8.7)	—

23号土壙	"	"	完形	"	3.2	2.8	1.2	12.1	57-2
"	"	"	1/3	繩文 R L	(4.7)	(3.4)	0.9	(15.5)	58-18
"	"	"	1/2	"	(3.1)	(2.0)	0.7	(4.9)	58-11
"	"	"	完形	"	3.6	3.5	0.7	12.8	—
2号埋甕	"	"	"	"	3.9	2.9	0.9	14.5	—
AIII-c 3	第3層	"	"	繩文 L R	5.2	4.3	1.1	27.7	—
AIII-c 4	第1層	"	"	"	3.8	3.5	1.2	17.8	57-3
AIV-c 1	第2層	"	1/2	"	4.2	(2.8)	1.5	(22.0)	—
"	"	"	1/4	無文	(3.0)	(3.1)	1.1	(13.3)	58-20
"	"	II	1/2	"	(3.2)	3.3	0.9	(12.6)	—
AIV-c 2	"	I	完形	"	3.6	2.8	1.0	11.1	—
AIV-c 3	"	"	1/2	堀 I	4.3	(2.7)	0.9	(12.5)	—
AIV-c 4	第3層	"	完形	繩文 L R	4.3	3.8	1.2	21.7	—
AV-c 5	"	"	"	無文	3.3	2.9	0.8	9.8	—
AVI-c 4	第2層	"	"	繩文 R L	3.2	3.2	1.1	14.4	—
AVII-c 2	"	"	1/2	繩文 L R	4.4	(2.1)	1.1	(12.3)	57-31
AVII-d 3	第1層	"	完形	加曾利E後半	5.8	4.8	1.2	42.7	56-4
"	"	"	"	堀之内 I	5.0	4.7	1.0	27.0	56-19
"	第2層	"	"	称名寺 II	3.6	3.3	0.8	11.8	56-17
"	"	"	1/2	繩文 L R	5.1	(3.5)	0.9	(19.6)	57-34
AVII-d 4	"	"	1/4	称名寺	(4.1)	(3.8)	0.9	(17.3)	—
AVII-d 5	第1層	"	一部欠	加曾利E後半	5.7	(4.9)	1.3	(37.8)	—
"	"	"	"	無文	2.9	(2.6)	0.8	(8.4)	—
AVIII-d 2	第2層	"	完形	加曾利E IV	3.9	3.5	1.0	14.5	56-8
"	"	"	"	沈線	3.5	1.9	1.3	10.4	58-30
"	"	"	1/2	無文	3.5	(2.9)	1.0	(12.4)	—
"	"	"	1/4	"	(3.4)	(2.4)	0.8	(7.9)	58-21
AVIII-e 1	"	"	完形	繩文 L R	4.0	3.6	0.8	16.6	57-4
"	第3層	II	"	無文	4.7	3.3	1.0	23.3	58-31
AVIII-e 3	第2層	I	"	加曾利E IV	5.2	4.9	1.2	30.6	56-10
AVIII-e 4	"	"	1/4	繩文 ?	(4.6)	(4.2)	1.0	(24.1)	58-22
AVIII-e 5	第1層	"	一部欠	繩文 R L	4.0	(3.2)	0.9	(17.1)	—
"	"	"	完形	無文	3.3	2.5	1.2	10.4	—
"	"	"	"	"	3.2	3.0	1.0	12.5	57-6
AIX-e 1	第2層	"	1/2	加曾利E IV	4.8	(3.6)	0.9	(20.0)	—
"	"	"	完形	加曾利E後半	5.5	4.6	0.9	26.0	56-5
"	"	"	"	称名寺	2.5	2.3	0.9	5.0	—
"	"	"	1/2	繩文 L R	(4.7)	(2.7)	1.2	(16.2)	57-32
"	"	"	完形	無文	2.8	2.6	0.7	6.7	57-7
BVIII-a 3	第2層	"	1/2	繩文 ?	3.9	(2.9)	0.9	(13.3)	57-33
"	第3層	"	完形	無文	3.8	3.6	1.1	18.5	57-8
BVIII-a 4	第1層	"	"	繩文 L r	3.0	2.7	1.1	9.6	57-9
BIX-a 1	"	"	"	繩文 ?	3.9	3.6	1.2	18.5	—
"	第2層	"	"	無文	3.5	3.3	1.1	13.1	—
BIX-a 3	"	"	"	加曾利E後半	3.3	3.1	1.0	11.4	56-6
"	"	II	1/2	無文	(4.2)	4.8	1.1	(27.3)	58-32
"	"	III	完形	繩文 ?	3.2	3.0	1.0	12.8	59-1
BIX-a 4	第1層	I	1/2	無文	4.6	(2.2)	1.2	(17.5)	—
BIX-b 1	第2層	"	1/4	称名寺 I	(4.2)	(3.4)	1.3	(19.3)	—
BIX-b 2	第2層	I	完形	沈線	3.3	3.2	0.9	10.4	—
"	"	"	1/2	繩文 R L	3.9	(2.8)	1.1	(13.2)	—

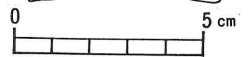
"	"	"	"	無文	(4.0)	(2.9)	0.8	(10.4)	—
"	"	"	¼	"	(3.9)	(3.3)	0.9	(15.8)	—
"	"	"	"	繩文 R L	(3.9)	3.1	0.9	(11.2)	—
"	"	II	½	無文	(3.7)	3.2	1.1	(14.5)	—
BIX-b 4	第1層	I	完形	繩文 L R	3.8	3.4	0.9	15.6	57-10
"	"	"	"	繩文 L r	5.1	4.1	1.0	21.9	—
"	"	"	½	無文	6.5	(5.7)	1.4	(50.6)	—
BIX-b 5	第2層	"	完形	繩文 ?	5.4	5.0	1.8	53.6	57-11
BIX-c 3	"	"	½	称名寺 I	5.7	(3.7)	0.8	(21.9)	57-25
"	"	"	"	繩文 R L	4.4	(2.8)	1.2	(17.3)	57-35
BIX-c 4	第1層	II	"	無文	(4.3)	3.9	1.3	(18.1)	—
"	第2層	I	"	称名寺	3.9	(2.3)	0.8	(8.7)	57-26
BIX-d 4	第1層	"	完形	無文	3.7	3.3	1.2	18.1	—
BIX-d 5	"	"	¼	"	(3.0)	(2.4)	0.8	(8.2)	—
"	"	"	完形	"	3.5	2.7	1.1	12.6	—
"	第2層	"	"	阿玉台 III	3.5	2.9	0.9	12.8	56-1
"	"	"	"	称名寺 II	2.8	2.6	1.0	8.1	56-15
"	"	"	"	繩文 LR+沈線	4.1	3.7	1.0	19.5	57-12
"	"	"	"	無文	3.9	3.6	1.5	24.3	—
"	"	III	"	繩文 R L	5.9	5.2	0.9	41.1	59-3
BX-b 1	"	I	½	"	3.9	(3.4)	1.4	(18.1)	—
BX-c 1	"	II	"	繩文 L R	(3.5)	3.2	0.9	(13.4)	58-33
BX-c 3	第3層	"	"	"	(3.0)	4.0	0.9	(10.5)	—
BX-d 1	第1層	I	一部欠	無文	3.4	(2.7)	0.9	(9.5)	—
"	"	"	¼	繩文 R L	(3.1)	(3.1)	0.9	(10.8)	58-23
"	第2層	"	½	繩文 ?	5.6	(3.9)	0.9	(21.5)	—
"	"	"	"	繩文 R L	4.0	(2.9)	1.0	(14.4)	—
BX-d 4	第1層	"	"	加曾利E後半	5.3	(3.4)	0.7	(19.6)	57-21
"	第2層	"	完形	繩文 R L	4.3	4.0	1.6	31.6	—
BX-e 1	"	"	¼	繩文 L r	(3.7)	(3.6)	1.1	(17.7)	—
BX-e 2	第1層	"	"	繩文 ?	(3.5)	(2.9)	0.9	(11.3)	—
"	"	"	一部欠	繩文 R l	4.6	(3.6)	1.0	(19.6)	—
BX-e 3	第2層	"	"	繩文 R L	5.6	(4.8)	0.8	(33.2)	—
BX-e 4	第1層	"	½	無文	4.5	(2.8)	1.1	(14.6)	—
BX-e 5	"	"	¼	加曾利E後半	(4.2)	(3.8)	0.8	(14.1)	—
CX-a 3	"	II	½	繩文 L R	(3.3)	3.2	0.8	(11.5)	58-34
"	第2層	"	"	"	(4.4)	4.0	0.9	(19.5)	58-35
CX-a 4	第1層	I	一部欠	無文	(3.9)	4.3	1.0	(22.1)	—
"	"	"	½	"	4.2	(2.9)	0.8	(14.8)	—
"	第2層	"	"	"	4.3	(2.4)	0.7	(9.4)	58-1
"	"	II	"	称名寺 II	(2.7)	3.6	0.7	(8.1)	58-37
CX-b 4	第1層	I	完形	無文	4.4	3.8	0.8	17.8	—
"	"	"	¼	繩文 ?	(3.6)	(2.8)	0.7	(10.0)	—
"	第3層	"	完形	加曾利E後半	4.7	4.0	1.0	19.6	57-22
CX-b 5	第1層	"	½	無文	(3.3)	4.1	1.1	(18.1)	—
"	"	"	"	繩文 L R	3.7	(2.0)	0.8	(7.7)	58-2
"	"	"	"	称名寺	3.7	(2.5)	0.9	(11.5)	—
CXI-b 2	"	"	"	無文	5.7	(3.4)	1.1	(27.5)	—
CXI-b 2	第1層	IV	完形	繩文 L R L	6.1	3.4	1.3	35.2	59-4
"	第2層	I	一部欠	繩文 R L	4.8	(4.4)	1.1	(41.4)	—
CXI-b 3	第1層	"	完形	堀之内 I	4.4	3.9	0.7	15.8	—

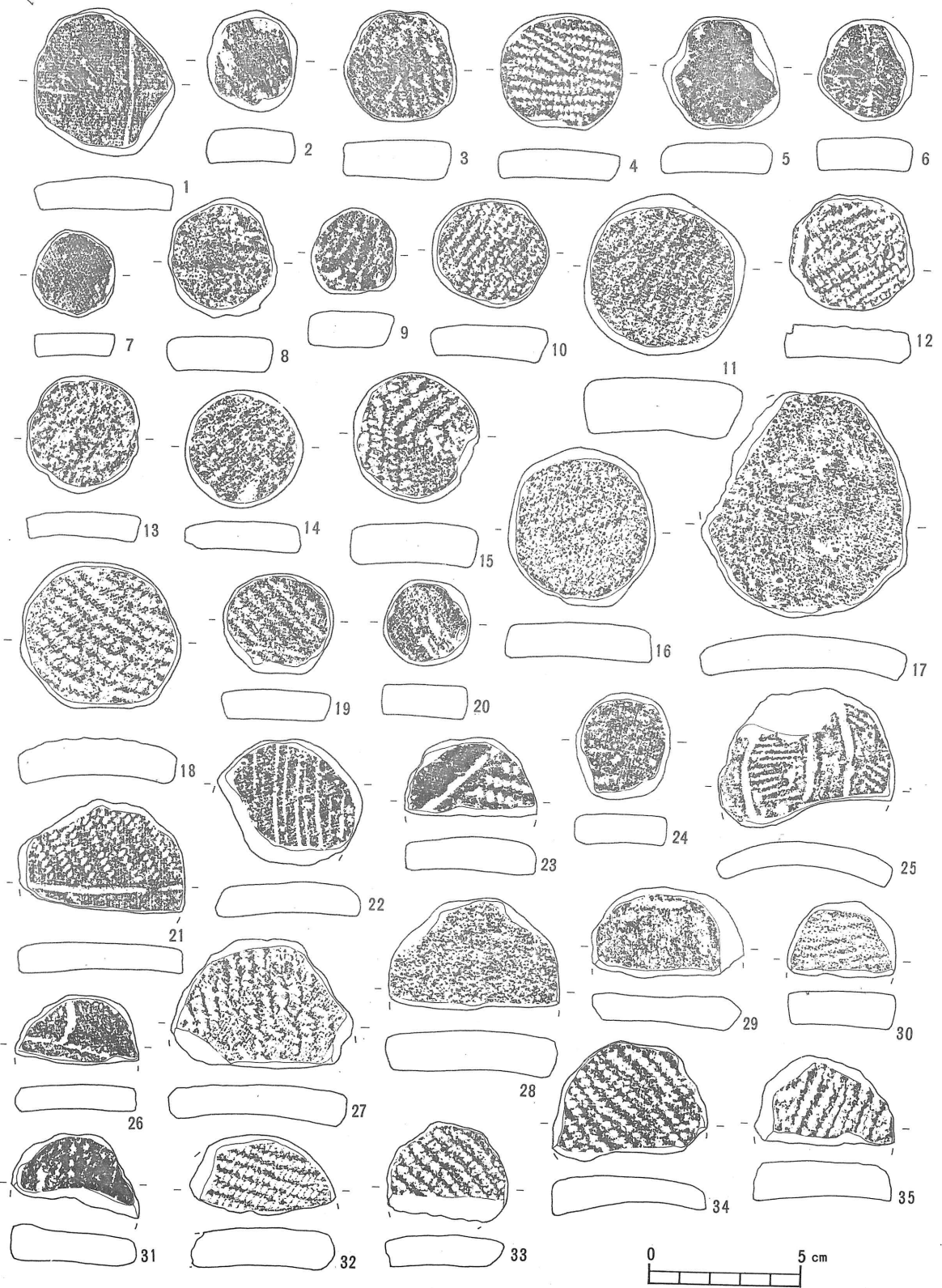
		第2層	"	"	称名寺 I	5.7	4.5	0.9	32.8	56-16
		"	"	"	1/2 繩文 L R	5.9	(4.1)	0.8	(29.1)	58-3
CXI-c 4		第1層	"	1/4	繩文 L R (3.8)	(3.1)	0.8	(11.6)	58-24	
		第2層	"	完形	加曾利 E IV	3.8	3.8	1.0	16.9	56-9
		"	"	"	無文	6.3	6.0	0.6	34.8	59-5
		"	"	"	繩文LR+沈線	2.8	2.7	0.8	8.1	—
		"	"	1/2	無文 (3.8)	(2.4)	1.2	(11.8)	—	
CXI-d 4		第1層	"	完形	"	3.5	3.4	0.8	13.3	—
		"	"	"	繩文 R L	4.1	3.7	1.0	19.6	—
		"	"	1/2	無文 (4.4)	(4.1)	1.0	(17.9)	—	
		"	"	III	完形 繩文 R L	3.6	3.3	0.7	13.8	59-2
		"	"	I	一部欠 "	3.6	(3.3)	0.9	(10.5)	—
CXI-d 5		"	"	"	繩文 L R	3.5	(3.2)	0.9	(11.4)	—
		"	"	"	完形 繩文 R L	3.5	3.2	1.0	14.1	—
CXI-e 5		第2層	"	1/4	繩文 L r (3.3)	(3.2)	1.0	(11.5)	58-26	
CXII-d 1		第1層	"	完形	阿玉台 III	4.1	3.5	1.0	15.0	56-2
		"	"	"	"	3.5	3.3	1.0	15.8	56-3
		"	"	1/2	加曾利 E 後半	6.4	(3.6)	1.5	(46.1)	—
		"	"	完形	加曾利 E IV	5.1	4.6	1.0	26.4	56-12
		"	"	"	"	4.2	4.1	1.6	27.0	—
		"	"	"	堀之内 I	3.6	3.2	0.9	17.2	56-20
		"	"	"	無文	7.3	6.9	1.2	62.2	57-17
		第2層	"	"	加曾利 E IV	4.7	4.1	1.1	29.1	56-13
		"	"	"	1/2 繩文 L R (4.4)	(2.0)	1.0	(12.1)	58-4	
		"	"	"	1/4 無文 (3.4)	(2.9)	0.9	(10.9)	58-16	
		"	"	"	1/2 "	5.5	(3.3)	1.0	(19.6)	—
		"	"	"	完形 "	4.5	4.0	1.0	24.6	—
		"	"	II	1/2 繩文 L R (5.1)	4.1	0.9	(22.0)	—	
		"	"	I	完形 加曾利 E IV	3.7	3.4	1.1	18.6	—
		"	"	"	一部欠 無文	4.4	3.9	1.0	(16.8)	—
		"	"	"	完形 "	3.7	3.5	0.9	16.8	—
		"	"	"	1/2 "	4.8	(3.6)	1.2	(27.3)	—
CXII-d 2		"	"	1/4	称名寺 (4.4)	(3.4)	1.0	(21.1)	58-13	
		"	"	"	1/2 繩文 R L (5.5)	(3.1)	0.9	(19.8)	—	
CXII-e 2		第1層	"	完形	堀之内 I	5.3	4.9	1.2	33.8	56-21
		第2層	"	"	繩文 L R	3.9	3.5	1.1	18.4	—
		"	"	"	1/2 無文	4.1	(2.7)	0.8	(10.9)	58-5
CXIII-d 2		"	"	"	条線文 (3.8)	(2.1)	1.1	(6.6)	58-6	
DVII-b 3		"	"	一部欠	繩文 L R	6.0	(4.2)	0.9	(31.5)	—
		"	"	"	1/2 "	4.3	(2.9)	1.0	(13.3)	—
DVIII-a 1		"	"	"	"	3.8	(2.7)	1.1	(15.2)	58-7
DX-d 1		"	"	完形	無文	3.7	3.5	1.0	16.4	57-5
DXI-e 5		"	"	1/2	称名寺 I	4.2	(3.4)	0.8	(12.6)	—
		"	"	"	完形 繩文 L r	5.5	5.1	1.1	42.0	—
DXII-a 1		"	"	1/4	無文 (3.6)	(3.4)	1.4	(17.4)	58-15	
DXII-a 2		第1層	"	完形	"	4.3	4.1	0.9	21.9	—
		"	"	"	1/2 "	5.3	(4.3)	1.2	(38.8)	—
DXII-a 2		第1層	II	1/2	称名寺 (3.5)	3.6	0.9	(14.5)	—	
		第2層	I	完形	堀之内 I	3.7	3.7	0.8	12.9	—
		"	"	"	繩文 L r	4.3	3.6	1.1	20.8	57-13
		"	"	"	一部欠 条線文 (4.1)	4.2	0.9	(21.5)	56-22	

"	"	"	1/2	無文	4.6	(3.7)	1.0	(16.7)	—
"	"	"	"	"	4.8	(3.2)	1.2	(21.0)	—
"	"	"	1/2	"	4.5	(2.9)	1.5	(22.6)	—
"	"	"	1/4	"	(3.5)	(3.3)	1.0	(14.5)	—
"	"	II	1/2	"	(3.1)	3.4	0.9	(14.4)	58—36
DXII—b 3	"	I	一部欠	"	(4.2)	(3.5)	1.1	(19.1)	—
"	"	"	1/4	"	(3.0)	(2.5)	1.1	(9.4)	—
DXII—c 4	第1層	"	1/2	加曾利E後半	4.3	(2.6)	1.1	(13.3)	—
"	"	"	完形	後期初頭	5.6	5.3	1.3	38.8	56—18
"	"	"	1/2	"	(3.8)	2.9	1.0	(14.3)	57—23
"	"	"	"	繩文?	4.6	(3.3)	0.9	(14.3)	—
DXII—d 4	第2層	"	"	無文	6.3	(3.8)	0.9	(22.5)	—
DXIII—a 1	"	II	"	"	(3.7)	3.7	0.8	(13.7)	—
DXIII—b 1	第1層	I	完形	"	4.2	3.5	1.2	20.5	—
"	"	"	"	"	4.5	3.8	0.9	15.6	—
DXIII—c 1	"	IV	1/2	繩文 L r	(1.7)	3.4	0.8	(5.7)	—
DXIII—c 2	第2層	I	一部欠	加曾利E後半	(3.4)	3.4	1.0	(13.2)	—
"	"	"	1/2	称名寺	4.4	(3.2)	1.3	(19.9)	—
"	"	"	完形	堀之内 I	2.7	2.7	0.9	9.5	—
"	"	"	"	繩文 R L	3.8	3.8	0.9	16.8	37—14
"	"	"	"	"	4.4	3.6	1.1	20.9	—
"	"	"	1/2	無文	4.1	(2.4)	1.1	(12.0)	58—12
"	"	"	完形	"	3.8	3.0	1.0	12.6	37—20
"	"	II	1/2	"	(2.9)	(4.0)	1.2	(14.7)	—
DXIII—e 5	"	I	完形	後期初頭	4.7	4.2	0.9	23.1	56—23
EXIV—a 1	第1層	"	"	加曾利 E IV	6.1	5.0	0.9	44.0	56—11
"	"	"	"	繩文 L R	4.3	4.2	1.2	26.4	57—15
"	"	"	"	無文	3.0	2.7	1.1	13.2	—
"	"	"	"	"	5.0	4.4	1.1	30.2	—
"	第2層	"	"	加曾利E後半	3.9	3.6	1.0	17.8	—
EXIV—b 1	第1層	"	1/4	繩文 R L	(4.2)	(3.9)	0.9	(18.5)	—
EXIV—b 2	第2層	"	完形	堀之内 I	3.4	2.9	1.2	14.1	—
EXIV—b 3	"	"	1/2	無文	3.8	(2.5)	1.1	(11.9)	—
EXIV—b 4	第1層	"	完形	繩文 L R	4.8	4.2	1.2	18.9	—
"	第2層	"	"	無文	3.9	3.7	0.9	(13.6)	—
"	"	"	1/2	"	(3.3)	(2.2)	0.9	7.6	58—8
EXIV—c 4	第1層	"	完形	"	3.4	3.0	1.1	13.3	—
"	第2層	"	"	堀之内 I	4.6	3.8	1.2	22.7	56—24
"	"	"	"	繩文 R L	5.2	4.8	1.2	37.0	57—16
"	"	"	"	無文	3.8	3.7	0.6	9.5	—
EXIV—d 5	第1層	"	"	繩文 L R	5.3	4.7	1.2	34.2	57—18
試掘 1	第2層	"	1/2	"	4.3	(3.0)	0.8	(13.0)	58—9
"	"	"	完形	"	3.6	3.1	0.9	12.3	57—24
"	"	"	1/2	"	3.7	(2.2)	1.0	(8.2)	58—10
試掘 4	"	"	完形	加曾利 E IV	5.0	4.0	0.9	18.0	—
"	"	"	"	繩文 L R	6.1	5.4	1.1	39.2	—
表採	—	I	完形	繩文 L r	5.8	5.3	1.0	42.0	56—30
"	—	"	"	繩文 L R	3.6	3.2	1.0	12.9	57—19
"	—	"	1/2	無文	3.7	(2.7)	0.8	(8.3)	—
"	—	"	完形	"	3.2	2.6	1.1	10.8	—

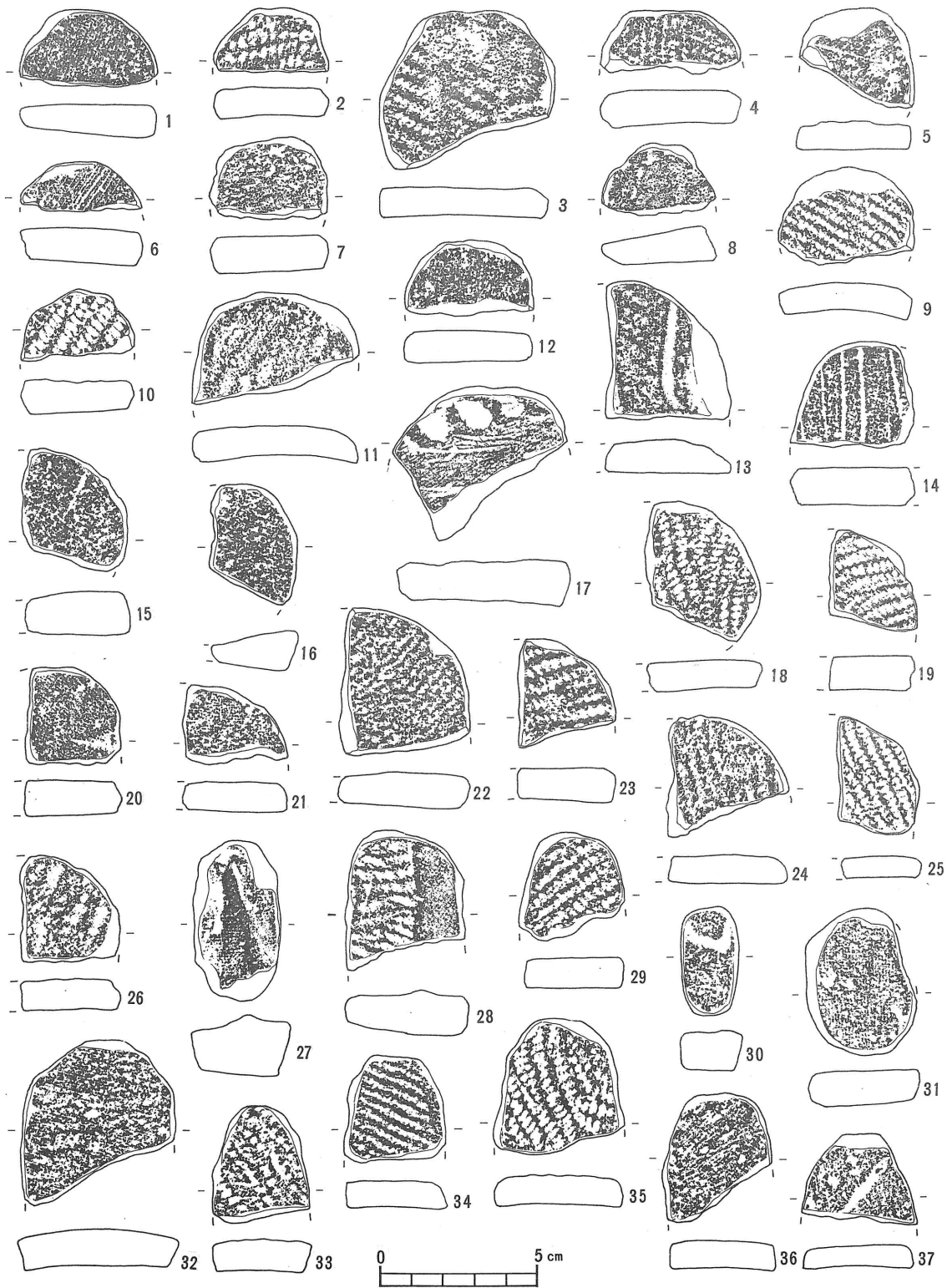


第56図 土製円盤拓影図(1)

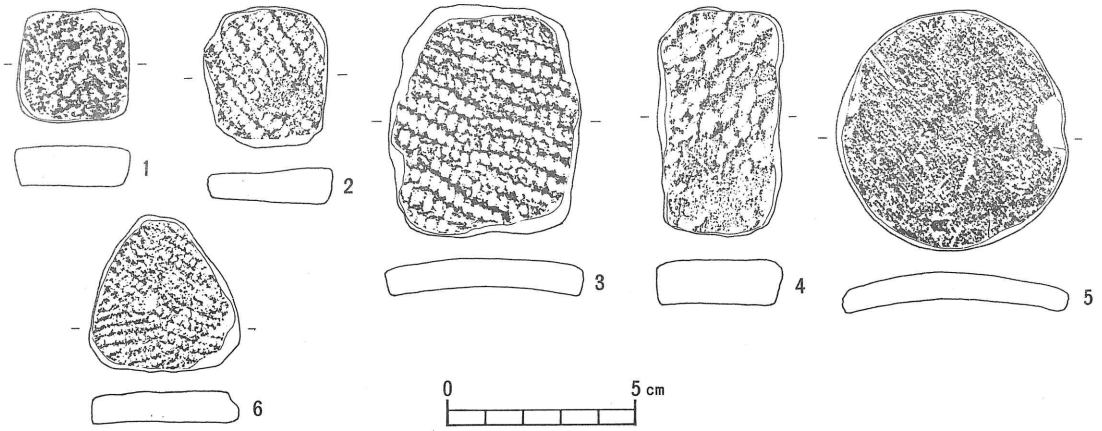




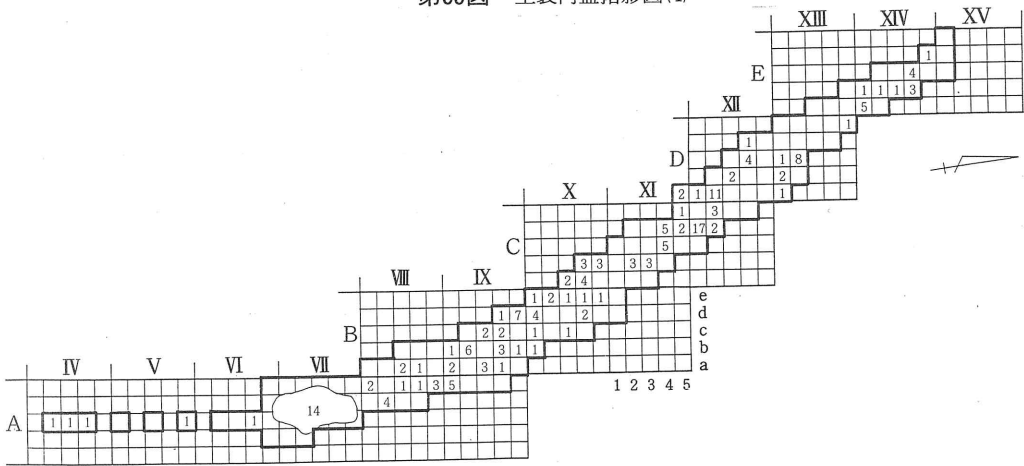
第57図 土製円盤拓影図(2)



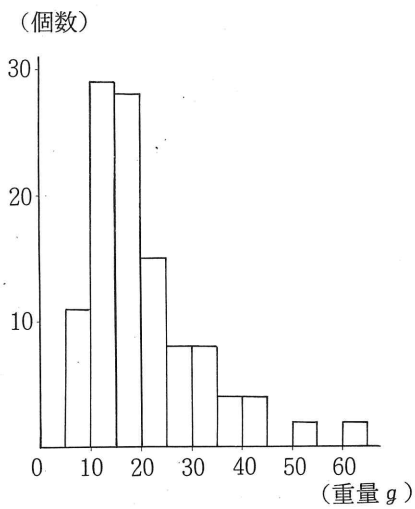
第58図 土製円盤拓影図(3)



第59図 土製円盤拓影図(4)



第60図 土製円盤の地区別分布図 (数字は各グリッド出土数)



第61図 土製円盤の重量度数分布

第3節 石 器

1. 打製石斧

打製石斧は、第7表に示すように、完形品、破損品、未製品？を併せて計35点出土した。調査地区のほぼ全域から出土しているが、A・BⅧ区～BⅩ区にかけて、特に集中的に出土した（第62図参照）。

これらの打製石斧は、何れも大形の剥片に剥離を加えて整形したもので、片面に自然面を残すものが多く、その形状から次の3類に分類できる。

I類 分銅形を呈するもの（第63図2～8、第64図1）。

平面形がいわゆる分銅形を呈するもので、本遺跡の打製石斧の中で最も多く、完形品11点、破損品17点の計28点が出土している。

いずれも柄の装着部と思われる銚れ部に、刃潰しのための調整剥離が施され、その上にかなり明瞭な磨耗痕が認められる。また多くは刃部にも使用の結果と思われる、剥離痕や磨耗痕が認められる。

石質は安山岩9点、ホルンフェルス17点、硬砂岩2点である。

Ⅱ類 撥形を呈するもの（第64図2～4）。

基部が細く刃部が幅広の形状をなすので、完形品が2点、破損品が3点、未製品が1点の計6点が出土した。

いずれもI類同様、柄の装着部と思われる基部近くの側縁部に、刃潰しのための調整剥離が施され、そのうえ磨耗痕が認められるものもある。また、刃部にも使用の結果と思われる。剥離痕や磨耗痕を有するものもある。

石質はホルンフェルス3点、閃緑岩・砂岩・結晶片岩が各1点ずつである。

Ⅲ類 短冊形にちかいもの（第64図5）。

小形の完形品が1点出土している。形状は縦長の細い台形状を呈している。両面には丁寧な剥離が施され、自然面は残っていない。側縁部の上半には刃潰しのための細かな調整剥離が施されている。

石質はホルンフェルスである。

2. 握り槌状石器

第8表に示すように、打製石斧に比べ器厚のある石器が完形品2点、破損品1点の計3

点出土した（第62図参照）。

これらは打製石斧に比べ大形で、基部のつくりが不整形であり、全体の形状も異なることから、一種の握り槌としての機能を有していたものと思われる。

第63図1は完形品であり、重さが582.8gを測る。器面全体に粗い調整剥離が施され整形されているが、片面に僅かに自然面を残している。刃部が頭部に比べて幅広で、頭部・刃部共に丸みをもつ。側縁部には刃潰しのためか、細かい調整剥離が施されており、その上はかなり磨耗している。刃部には細かな剥離痕がみられ、その上はかなり磨耗している。石質はホルンフェルスである。

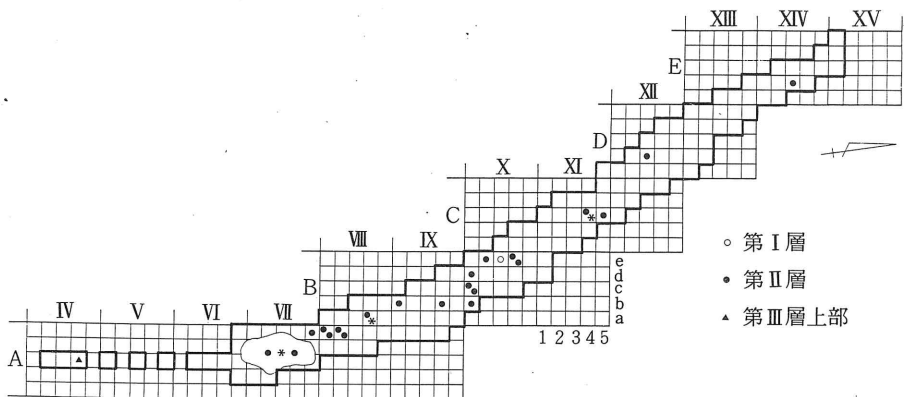
もう一点の完形品は、重さが354.9gを測るやや小形のものである。粗い調整剥離によって整形されているが、片面に大きく自然面を残している。前者同様、刃部には細かな剥離痕がみられ、その上はかなり磨耗している。

石質は珪質流紋岩である。

破損品の方は側縁部のみの観察が可能である。刃潰しのための調整剥離が施された後に、かなり明瞭な磨耗痕が認められる。最も大形であったと推定できる。

石質はホルンフェルスである。

打製石斧及び握り槌状石器の計測値について記す。重量は前者が450g以下で、特に250～300g前後のものが多いのに比べ、後者は350g以上と大形である（第66図）。厚さは打製石斧がすべて3.5cm以下であるのに対し、握り槌状石器の方は4.5cm以上であり、肉厚の石器である点特徴的である（第65図）。数量化はし得なかったが次にこれらの刃部及び基部の巾の関係をみてみると、打製石斧は刃部の巾が6cmから9cm、基部の巾が3.5～6cmの範囲に収まるものが多く、握り槌状石器の方は打製石斧の大形のものに近い値を示している。またこれら二者は、刃部の角度にも明瞭な差を有しており、明らかに異なった目的で製作されたものと考えたい。



第62図 打製石斧、握り槌状石器（※印）の地区別分布図

第6表 打製石斧一覧表

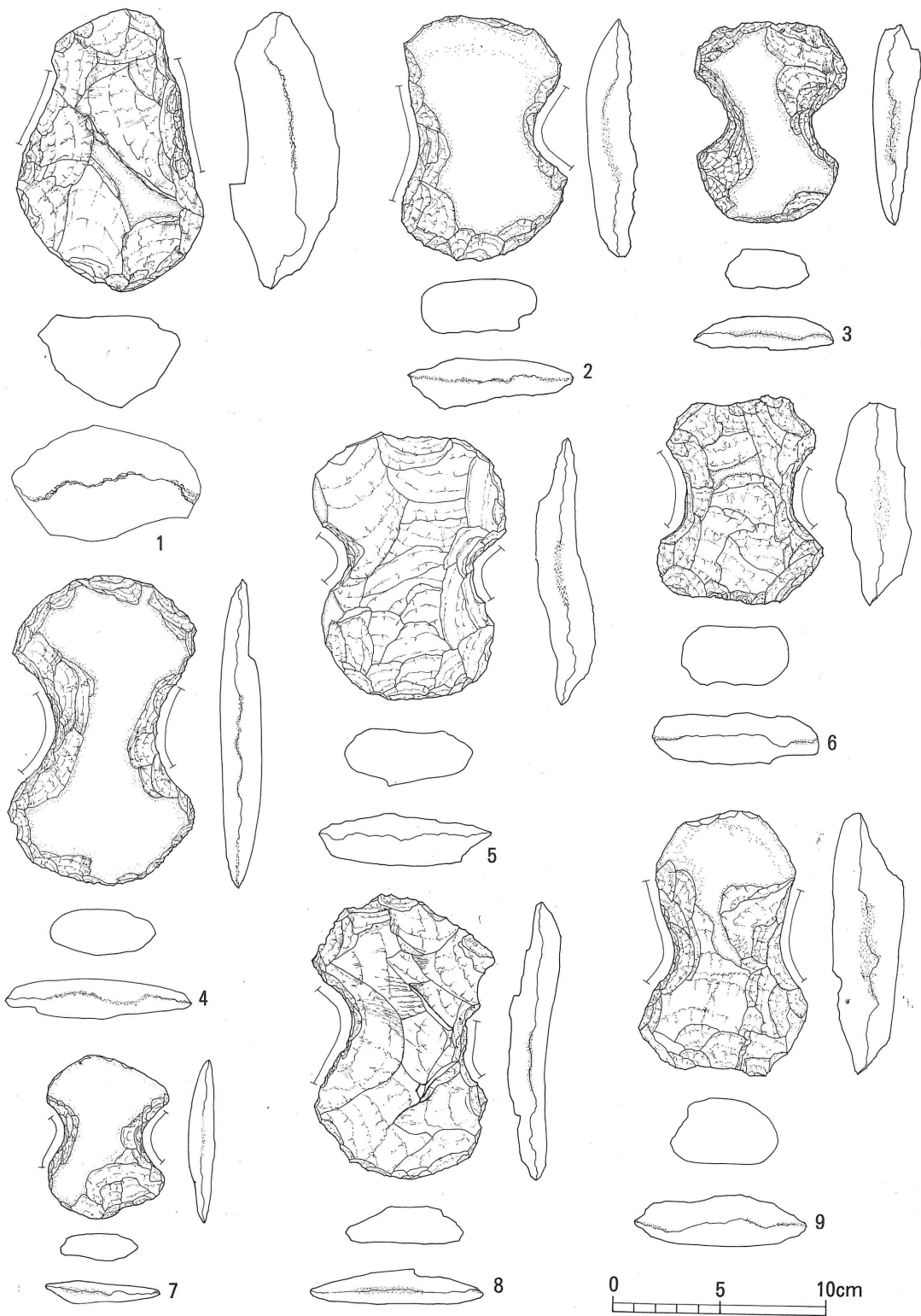
〔単位cm及びg. ()を付したものは現存値を示す〕

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	最小巾	最大巾	厚さ	重さ	挿図番号
1号配石	—	II	一部欠	ホルンフェルス	10.5	(2.6)	6.5	2.8	(240.7)	—
"	—	I	½	安山岩	(7.8)	5.8	8.9	3.2	(277.3)	—
1号土壙	埋土中	"	完形	"	11.5	5.3	7.5	2.2	270.1	63-2
3号土壙	"	III	"	ホルンフェルス	10.1	2.6	4.1	1.6	71.7	64-5
6号土壙	"	I	"	硬砂岩	12.5	5.2	8.5	2.4	292.2	—
15号土壙	"	"	½	安山岩	(5.3)	3.5	6.7	1.5	(59.4)	—
17号土壙	"	"	完形	ホルンフェルス	9.5	3.9	7.1	2.1	162.5	63-3
18号土壙	"	"	"	"	14.3	4.7	8.7	2.1	296.3	63-4
20号土壙	"	"	½	安山岩	(8.9)	5.6	9.0	3.2	(292.9)	—
"	"	"	⅓	ホルンフェルス	(8.4)	—	8.0	(2.6)	(159.7)	—
AIV-c 4	第3層	II	一部欠	閃緑岩	15.8	5.1	(8.5)	2.7	(334.1)	64-2
AVII-e 5	第2層	I	完形	ホルンフェルス	12.3	5.8	9.0	2.5	358.2	63-5
AVIII-e 1	"	"	"	安山岩	9.7	5.0	7.8	3.0	240.7	63-6
"	"	"	"	ホルンフェルス	8.4	4.5	5.6	2.1	131.5	—
AVIII-e 2	第2層	II	"	"	12.5	3.4	7.0	2.2	179.0	—
"	第3層	I	½	"	(7.4)	5.5	7.9	2.9	(175.4)	—
BVIII-a 4	"	"	一部欠	"	14.2	6.4	(9.5)	3.0	(419.3)	—
BIX-b 1	第2層	"	"	"	(9.0)	4.0	7.7	3.0	(240.1)	—
BIX-b 4	"	"	½	"	(7.0)	5.9	6.7	2.8	(137.5)	—
BX-b 1	"	"	⅓	安山岩	(5.8)	—	9.8	3.0	(213.7)	—
BX-c 1	"	"	完形	ホルンフェルス	13.1	5.3	8.7	2.0	258.5	63-8
"	"	"	"	"	7.6	3.6	5.6	1.3	61.2	63-7
BX-d 1	"	II	"	"	8.3	3.2	5.0	1.6	79.3	64-4
BX-e 2	"	I	一部欠	"	9.4	3.4	6.3	2.1	(111.1)	—
BX-e 3	第1層	"	¼	"	(6.1)	—	(5.5)	2.4	(70.3)	—
BX-e 4	第2層	II未製品?	一部欠	結晶片岩	18.5	5.4	7.9	3.9	783.7	—
BX-e 4	"	II	½	砂岩	9.4	—	(5.9)	1.7	(106.8)	—
CXI-c 4	"	I	"	ホルンフェルス	(6.7)	4.8	7.8	2.5	(158.0)	—
CXI-d 4	"	"	"	"	(6.0)	5.5	6.1	1.7	(84.5)	—
DXII-b 3	"	"	完形	硬砂岩	12.3	5.0	7.8	3.2	322.8	63-9
EXIV-b 3	"	"	"	安山岩	12.5	6.5	10.2	2.7	418.8	64-1
試掘	4	"	½	ホルンフェルス	(7.4)	5.9	7.1	2.5	(117.2)	—
表採	—	"	"	安山岩	(7.0)	5.0	8.0	1.8	(119.3)	—
表採	—	"	"	"	(7.6)	5.1	7.6	1.6	(103.1)	—
表採	—	"	"	ホルンフェルス	(5.8)	—	8.4	2.1	(138.8)	—

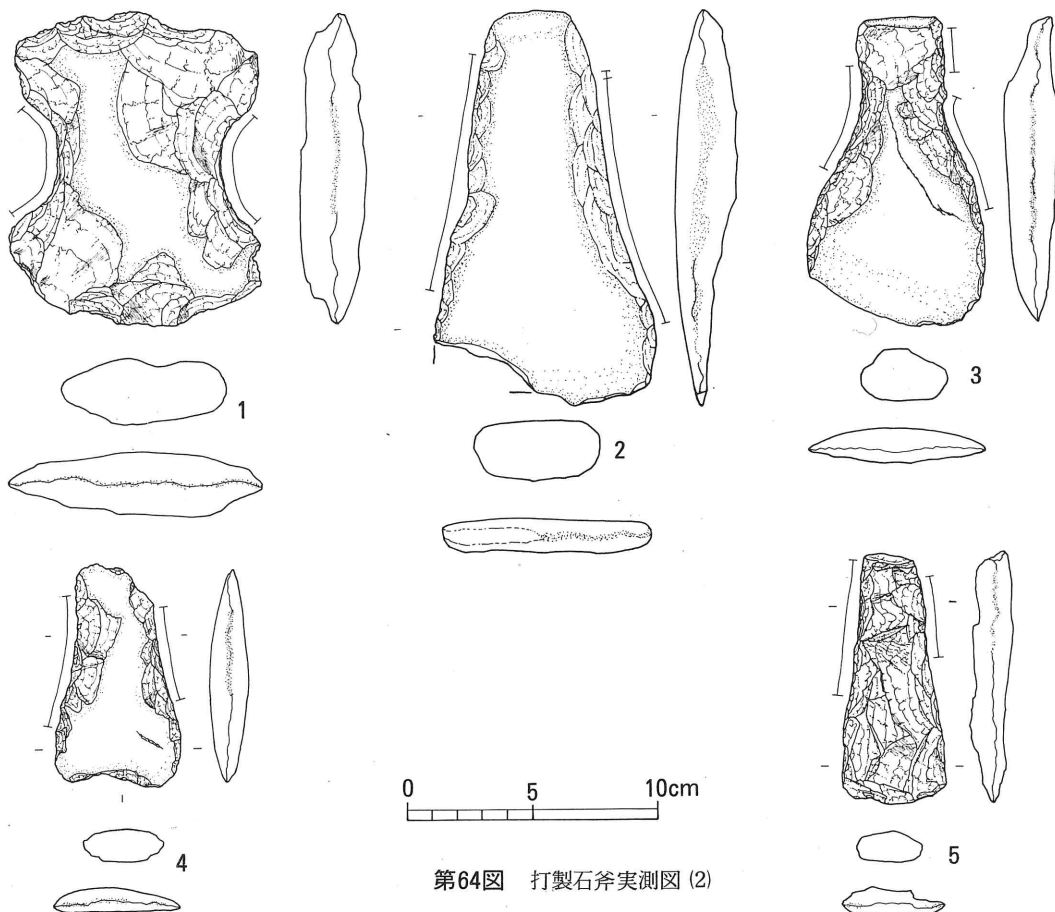
第7表 握り槌状石器一覧表

〔単位cm及びg. ()を付したものは現存値を示す〕

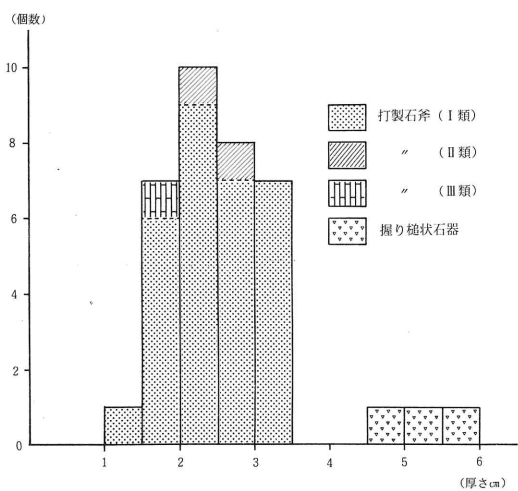
出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	最小巾	最大巾	厚さ	重さ	挿図状態
1号配石	—	—	完形	ホルンフェルス	13.2	5.2	9.0	5.2	582.8	63-1
BVIII-a 4	第2層	—	"	珪質流紋岩	10.0	7.3	8.1	4.6	354.9	—
CXI-c 4	"	—	½	ホルンフェルス	(13.7)	—	7.7	5.5	(625.6)	—



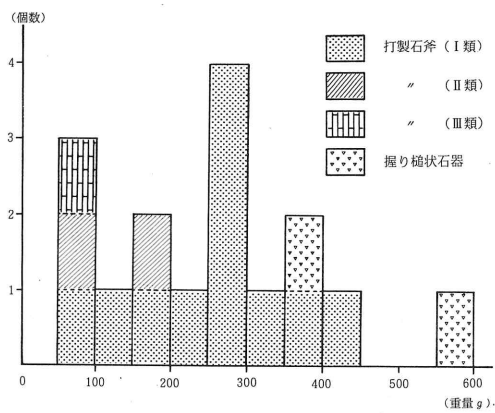
第63図 打製石斧，握り槌状石器実測図(1)



第64図 打製石斧実測図(2)



第65図 打製石斧，握り槌状石器の厚さ度数分布



第66図 打製石斧，握り槌状石器の重量度数分布

3. 磨石・磨石兼敲石・磨石兼凹み石

磨石、磨石兼敲石及び磨石兼凹み石の名称に関しては、次のように扱った。

- (1) 磨石……………敲き痕がなく磨痕のみが認められるもの。
- (2) 磨石兼敲石……磨痕及び敲き痕が認められるもの。ただし、凹み部を有さないもの。
- (3) 磨石兼凹み石……磨痕及び敲き痕が認められ、そのうえ凹み部を有するもの。

なおそれぞれの形態分類に関しては、平面形及び断面形の特徴によって次の5類に分類できる。

I類 平面形が楕円形に近く、断面形も扁平な楕円形に近いもの。

II類 平面形が楕円形に近く、断面形が円形に近いもの。

III類 平面形が円形に近く、断面形が扁平な楕円形に近いもの。

IV類 平面形が円形に近い楕円形を呈し、断面形が扁平度の小さい楕円形に近いもの。

V類 球形に近い形のもの。

(1) 磨石

磨石は第9表に示すように、僅かに4点出土している。

形態的にはI類が2点、III類(第71図1)・IV類(同3)が各一点ずつである。石質は何れも安山岩である。

(2) 磨石兼敲石

磨石兼敲石は第10表に示すように、15点出土している。B IX区、C XII区でやや多く出土している(第67図参照)。

形態的にはI類が4点(第71図6)、II類が1点(同9)、III類が2点(同4)、IV類が5点(同2, 5, 8, 11)、V類が3点(同10, 13)である。

長軸の両端部に敲き痕が集中するもの(同7～9, 11, 13)、両端部及び平坦面の片側に敲き痕を有するもの(同6)、長軸の両端部に敲き痕が集中するとともに側縁部にまで及ぶもの(同5, 10)、側縁部に平均して敲き痕が認められるもの(同2, 4)である。

完形品の重さの平均はI類が594.3 g (n = 3)、II類が546.8 g (n = 1)、III類が128.05 g (n = 2)、IV類が117.24 g (n = 5)、V類が736.2 g (n = 2)を測る。

石質は1点(第71図9)が石英斑岩で他は何れも安山岩である。

(3) 磨石兼凹み石

磨石兼凹み石は第11表に示すように、34点出土している。14号ピット及びB IX—X区で多く出土している(第67図参照)。

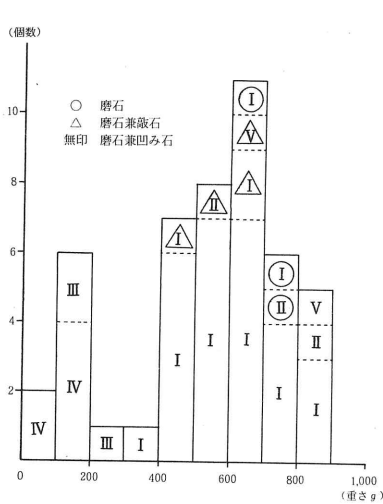
形態的にはI類が32点(第71図12, 15, 第72図1～9)とその大半を占めており、II類が2点(第71図14)ある。

いずれも、平坦な両面は磨られ、その中央部近くに1・2個の敲き痕が集まった凹み部を有し、周縁部全体に敲き痕が認められる。

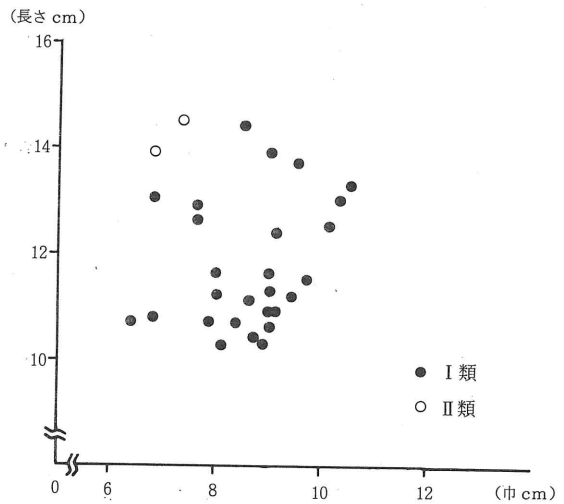
完形品の重さの平均はI類が605.3 g (n=32)、II類が815.9 g (n=2)を測る。

石質は石英斑岩、砂岩が各1点で他は何れも安山岩である。

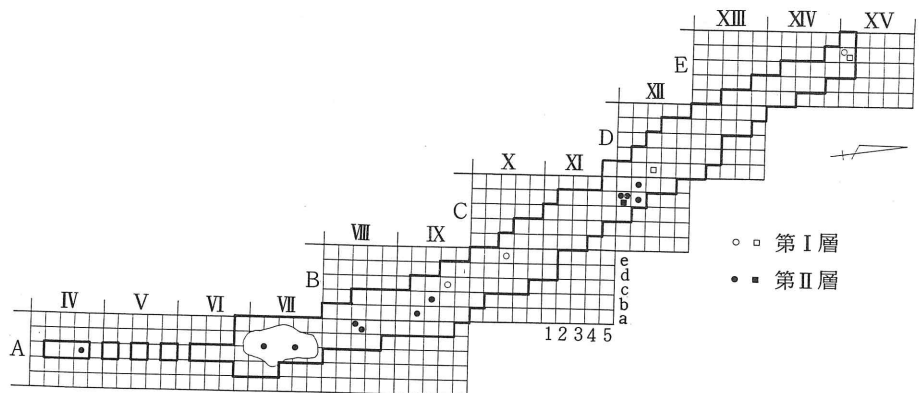
これら磨石、磨石兼敲石、磨石兼凹み石の各形態と重量の関係をみると、第11表に示すように、重量の分布は250 g以下の群と、351 g以上の群に明瞭に分かれている。また前群と形態のIII・IV類、後群と形態のI・II・V各類とがそれぞれ対応関係にあることが指摘できる。このことは、これら磨石、磨石兼敲石、磨石兼凹み石の製作段階で、使用目的に応じて作り分けがなされていたことを示唆しているものと考えられる。



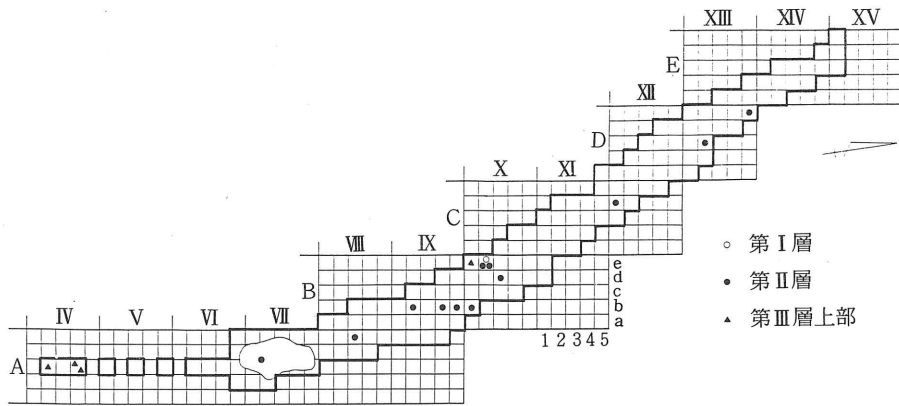
第67図 磨石、磨石兼敲石、磨石兼凹み石重量度数分布 (数字は各類別)



第68図 磨石兼凹み石の長さとの関係図



第69図 磨石 (□印)、磨石兼敲石 (○印) の地区別分布図



第70図 磨石兼凹み石の地区別分布図

第8表 磨石一覽表

(単位cm及びg.()を付したものは現存値を示す)

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
C XII-d 1	第2層	I a	完形	安山岩	14.0	7.8	4.6	755.1	—
表採	—	—	—	—	12.4	7.5	4.7	698.4	—
D XII-a 3	第1層	III-a	—	—	7.0	6.3	4.0	213.4	71-1
EXV-d 1	—	IV-b	—	—	3.3	3.1	2.3	29.8	71-3

第9表 磨石兼敲石一覽表

(単位cm及びg.()を付したものは現存値を示す)

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1号配石	—	I	完形	安山岩	13.0	6.7	4.6	655.7	71-6
—	—	V	¼	—	6.0	5.3	(2.7)	(116.4)	—
15号土塊	埋土中	III	完形	—	6.1	5.9	2.5	117.6	—
A IV-c 4	第2層	I	½	—	(7.5)	(8.9)	3.1	(290.5)	—
A VIII-e 3	—	IV	完形	—	4.2	4.2	3.2	74.7	71-2
—	—	IV	—	—	4.7	4.2	3.6	105.2	71-7
B IX-a 2	—	I	—	—	10.7	8.2	3.9	477.4	—
B IX-b 3	—	III	—	—	6.5	5.8	2.7	138.5	71-4
B IX-d 4	第1層	V	—	—	9.4	8.2	7.5	666.7	71-10
B X-e 3	—	I	—	—	12.2	8.3	4.2	649.8	—
C XII-d 1	第2層	IV	—	—	5.7	5.0	3.9	160.1	71-5
—	—	IV	—	—	5.7	4.7	3.7	123.1	71-8
C XII-d 2	—	II	—	石英斑岩	9.8	6.7	6.0	546.8	71-9
C XII-e 2	—	V	—	安山岩	8.3	8.3	8.5	805.7	71-13
EXV-d 1	第1層	IV	—	—	4.7	5.2	3.7	123.1	71-11

第10表 磨石兼凹み石一覧表

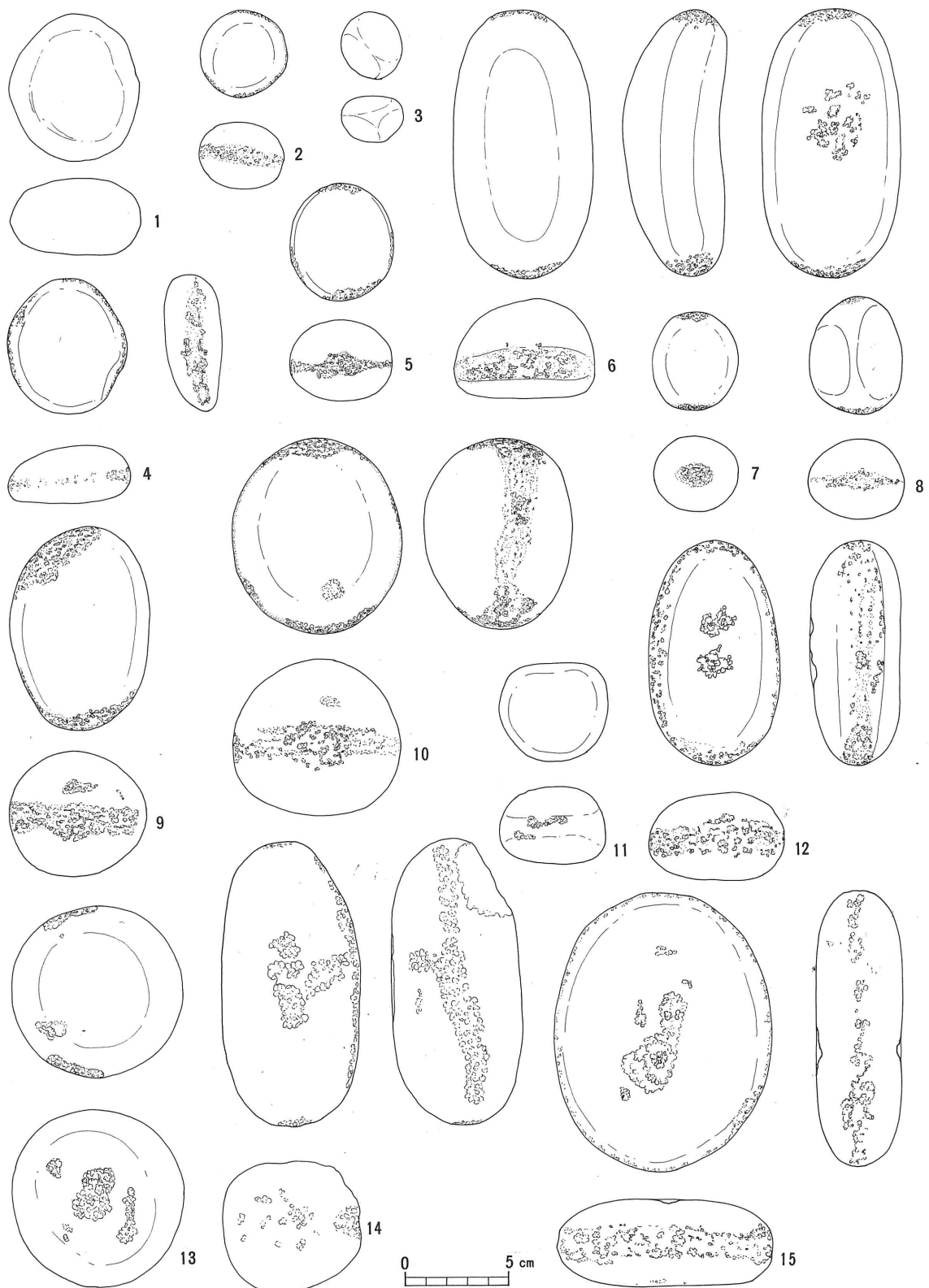
[単位cm及びg。()を付したものは現存値を示す]

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1号配石	—	I—a	完形	安山岩	11.3	8.0	4.2	574.7	—
5号土壙	埋土中	〃	〃	〃	10.8	6.4	4.3	388.9	71—12
7号土壙	〃	〃	〃	〃	13.8	9.5	3.4	547.2	—
11号土壙	〃	〃	〃	〃	10.8	7.9	3.8	453.9	—
14号土壙	〃	〃	〃	〃	13.4	10.5	4.2	787.0	71—15
〃	〃	〃	〃	〃	11.0	9.1	5.0	613.5	—
〃	〃	〃	〃	〃	13.1	6.8	3.1	407.9	—
〃	〃	〃	〃	石英斑岩	10.9	6.8	4.0	467.5	—
〃	〃	〃	一部欠	安山岩	10.8	(7.6)	5.3	(548.7)	—
〃	〃	〃	½	〃	(7.4)	10.0	3.9	(388.2)	—
17号土壙	〃	〃	完形	〃	11.7	9.0	4.0	607.0	72—2
〃	〃	〃	〃	〃	10.8	8.4	4.3	523.0	72—1
23号土壙	〃	〃	〃	〃	14.0	9.0	3.6	615.8	—
AIV—c 2	第3層	〃	½	〃	(6.4)	7.2	4.5	(287.8)	—
AIV—c 4	〃	〃	〃	〃	(7.9)	(11.8)	4.1	(542.3)	—
〃	〃	〃	完形	〃	13.1	10.3	4.2	845.9	—
BIX—b 2	第2層	〃	〃	〃	14.5	8.5	3.8	606.6	72—6
BIX—b 4	〃	〃	〃	〃	11.6	9.7	5.5	787.6	72—4
BIX—b 5	〃	〃	〃	〃	11.3	9.4	5.0	684.1	72—5
BX—b 1	〃	〃	〃	〃	12.5	9.1	5.1	850.7	—
BX—d 3	〃	〃	〃	〃	12.7	7.6	5.5	782.3	—
BX—e 1	第3層	〃	〃	〃	10.5	8.7	4.5	479.4	—
BX—e 2	第1層	〃	〃	〃	(7.4)	8.5	3.6	(321.3)	—
〃	第2層	〃	〃	〃	10.7	9.0	4.7	656.2	72—3
〃	〃	〃	〃	〃	11.7	8.0	4.3	556.0	—
CXII—d 1	〃	〃	〃	〃	12.6	10.1	4.4	730.6	72—7
DXIII—c 2	〃	〃	〃	〃	10.4	8.9	3.8	456.1	—
DXIII—e 5	〃	〃	〃	〃	11.2	8.6	5.4	434.5	—
試掘 4	〃	〃	〃	〃	11.4	9.0	4.7	611.2	72—8
〃	〃	〃	〃	〃	13.0	7.6	3.9	548.3	—
表 採	—	〃	〃	〃	11.0	9.0	5.7	805.3	72—9
〃	—	〃	〃	砂岩	10.4	8.1	4.7	522.2	—
14号土壙	埋土	II—a	〃	安山岩	14.6	7.3	5.5	763.1	—
AVIII—e 3	第2層	〃	〃	〃	14.0	6.8	6.2	868.6	71—14

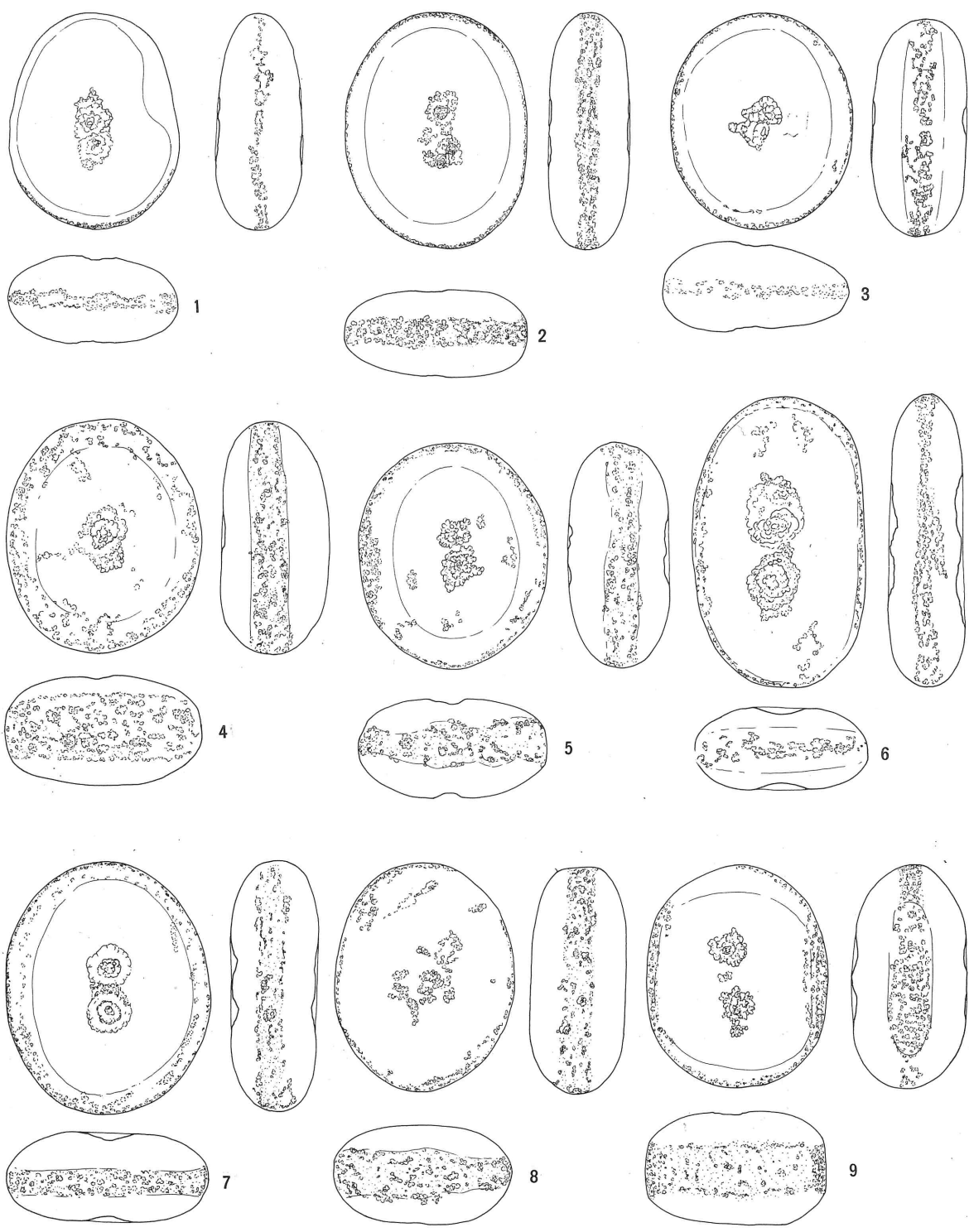
4. 石 皿

石皿は第12表に示すように、完形品、破損品、未製品を併せて総計34点出土した。1号配石中から特に多く出土している(第73図参照)。石質はすべて広義の安山岩である。

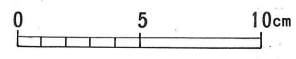
何れも石材に粗い敲きを加えて整形し、研磨を加えて仕上げたもので、大きさ及び縁の形状や磨面の深さなどの関係から、次の5類に分類できる。



第71図 磨石, 磨石兼敲石, 磨石兼凹み石実測図



第72図 磨石兼凹み石実測図



I類 幅の広い平坦な縁を有し、磨面の横断面が扁平な「U」字状を呈するもの（第74図4～6、第75図1、2）。

破損品が7点、未製品の破損品が1点の計8点が出土している。大形のものも多く、裏面に蜂巢石同様、多くの凹み部を有するものもある。

II類 幅の広い平坦な縁を有し、磨面の横断面が浅く凹むか、ほとんど平坦なもの（第75図3）。

破損品が1点のみ出土している。磨面に敲き痕が明瞭に残っていることから、本類はI類の未製品の可能性もある。

III類 端部が丸みをおびる縁を有し、磨面の横断面が扁平な「U」字状を呈するもの（第75図4、6、7、第76図1、2）。

本遺跡出土の石皿の中で最も多く、破損品が10点出土した。I類同様、裏面が蜂巢石状を呈するものもある。本類のうち7号配石・DXII～a5・DXII～c4の各区から出土した4点の破片が接合した（第75図4）。

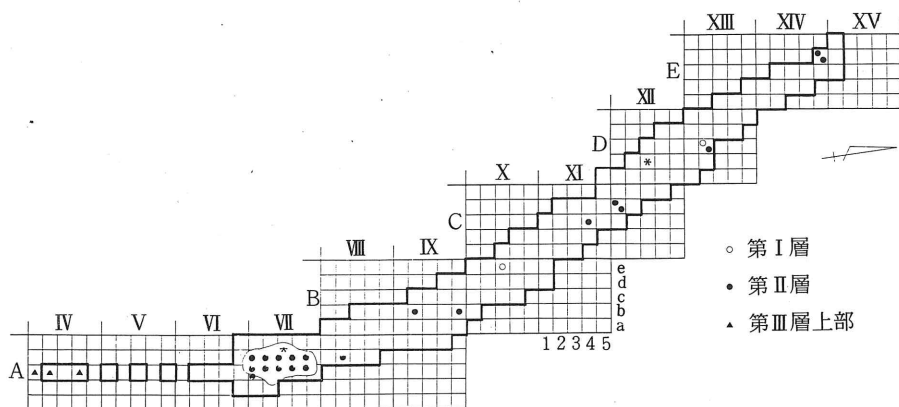
IV類 ほとんど縁にあたる部分を有せず、磨面の横断面が浅く凹むか、ほとんど平坦なもの（第75図5、第76図3、4）。

破損品が5点出土している。

V類 手のひらに乗るような15cm内外の小形のもの（第77図1～6）。

やや幅のある磨面を有するもの（同1～3）、磨面が円形に凹むもの（同4、5）、磨面が両側にありドーナツ状の形状を呈するものもある（同6）。

本遺跡出土の石皿は小形のV類に一部完形品があるものの、他は破損品である。安山岩のような硬い石質でしかも器壁の厚いこのような石器が、大半破損品として出土している事実の裏に、なんらかの人為的な破壊行為を推定できるのではないだろうか。



第73図 石皿、蜂の巣石（※印）の地区別分布図

第11表 石皿一覧表

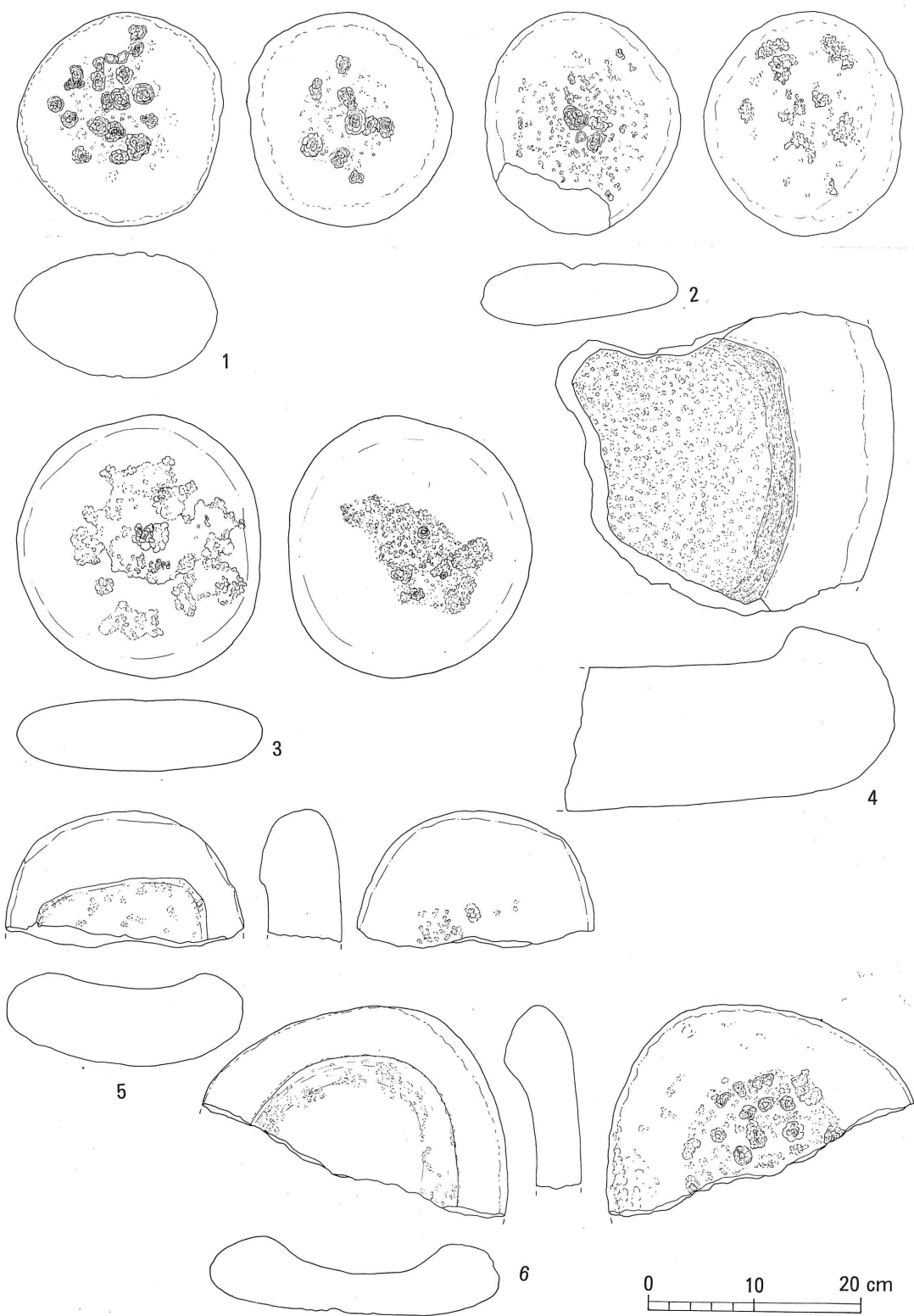
〔単位cm及びg. ()を付したものは現存値を示す〕
〔※は裏面蜂巢石状を呈すもの〕

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	全長	全巾	厚さ	内面長	内面巾	深さ	重さ	挿図番号
1号配石	—	I ※	1/3	(12.3)	(22.4)	8.6	(5.6)	(15.5)	(1.8)	(2,900)	74-5
"	—	I ※	2/3	(28.1)	(29.9)	(9.0)	(25.2)	(22.0)	(2.6)	(8,400)	75-1
"	—	II	1/4	(21.6)	(18.9)	6.1	(13.0)	(12.0)	(0.6)	(2,500)	75-3
"	—	I 未製品	1/6	(17.2)	(17.5)	11.4	(14.7)	(13.5)	0.7	(3,700)	75-2
"	—	I	1/4	(23.5)	(13.5)	(12.4)	(15.1)	(7.6)	(4.2)	(4,300)	—
"	—	III	1/6	(19.0)	(7.3)	8.3	(16.6)	(5.5)	(2.5)	(1,220)	—
"	—	III ※	2/3	(32.1)	26.7	10.8	(28.5)	20.5	3.2	(10,000)	76-1
"	—	III	1/8	(13.1)	(9.3)	(4.5)	(10.1)	(6.7)	(0.9)	(600)	—
"	—	IV ※	2/3	(20.1)	22.6	8.1	(17.5)	18.7	1.1	(4,700)	75-5
"	—	IV	1/3	(13.4)	(10.8)	(5.8)	(12.0)	(8.5)	0.6	(1,360)	—
2号配石	—	V	1/4	(6.0)	(4.9)	3.2	(3.9)	(3.9)	(1.6)	(78.7)	—
5号配石	—	IV	完形	24.2	18.5	8.5	15.0	13.5	0.1	5,000	76-3
6号配石	—	I	1/4	(29.0)	(32.2)	(17.2)	(24.2)	(21.3)	3.6	(18,000)	74-4
"	—	I	1/2	(17.5)	(21.8)	(9.2)	(16.2)	(16.2)	(3.5)	(3,600)	—
7号配石	—	III ※	1/2	(21.3)	(21.6)	(6.6)	(21.1)	(18.6)	2.6	(3,100)	75-4
DXII-a5											
DXII-c4											
7号配石	—	III	1/8	(13.3)	(9.4)	(7.4)	(13.1)	(6.5)	(2.4)	(850)	—
15号土壇	埋土中	I ※	1/8	(26.1)	(11.1)	(10.6)	(19.7)	(5.7)	(2.3)	(2,600)	—
AIV-c1	第3層	V	1/4	(4.9)	(3.8)	3.8	(3.7)	(2.4)	2.0	(21.7)	77-4
AIV-c2	"	III ※	1/8	(12.7)	(10.6)	(5.6)	(11.5)	(7.7)	(1.9)	(600)	—
AIV-c4	"	IV ※	1/2	(16.1)	(22.0)	(7.0)	(14.4)	(17.8)	(0.8)	(2,700)	76-4
AVII-c1	第2層	III	2/3	(21.2)	(17.6)	6.2	(18.5)	15.0	2.3	(2,300)	75-6
AVIII-d2	"	V	1/2	(9.3)	5.0	4.9	(6.1)	(3.1)	(2.5)	(131.6)	77-6
BIX-b2	"	III	2/3	(28.1)	(24.9)	9.6	(26.0)	(19.3)	(2.6)	(6,100)	76-2
BIX-b5	第1層	V	1/6	(5.4)	(3.0)	3.9	(4.2)	(2.0)	(1.1)	(45.4)	—
BX-e3	"	III	2/3	(17.4)	(18.2)	(6.1)	(15.7)	(14.7)	(1.8)	(2,200)	75-7
CXI-c4	第2層	I ※	1/3	(21.5)	(28.0)	(7.9)	(18.5)	(15.7)	(3.4)	(3,700)	74-6
"	"	III ※	1/6	(15.6)	(15.6)	(8.1)	(11.0)	(11.0)	(2.6)	(1,700)	—
CXII-d1	"	不明	破片	(13.1)	(11.3)	(5.7)	(10.5)	(8.3)	(2.9)	(630)	—
"	"	V	完形	14.0	9.4	7.7	10.5	5.5	0.7	870	77-2
DXIII-c2	第1層	V	1/2	(8.1)	(4.0)	3.6	(5.2)	(2.2)	1.6	(115.8)	77-5
"	第2層	V	1/2	(13.6)	(6.4)	4.5	(8.5)	(2.9)	(0.2)	(475.9)	—
EXIV-d5	"	V	1/2	(8.1)	8.7	4.9	(6.5)	7.1	1.6	(204.9)	77-3
"	"	V	完形	14.0	12.4	5.0	10.8	8.2	0.7	966	77-1
表 採	—	IV	1/2	(18.5)	(9.9)	6.2	(14.3)	(5.9)	(0.6)	(1,190)	—

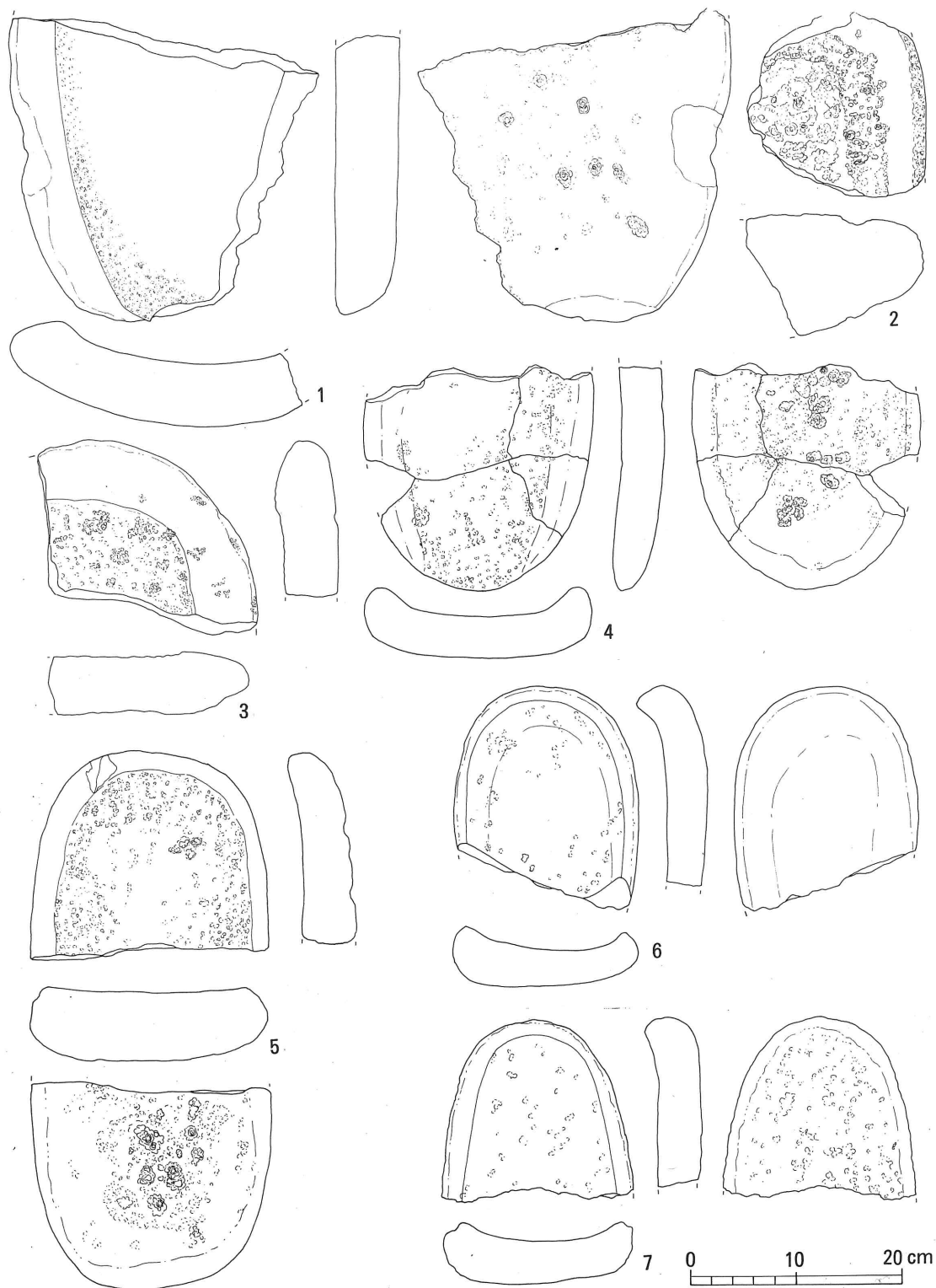
第12表 蜂の巣石一覧表

〔単位cm及びg. ()を付したものは現存値を示す〕

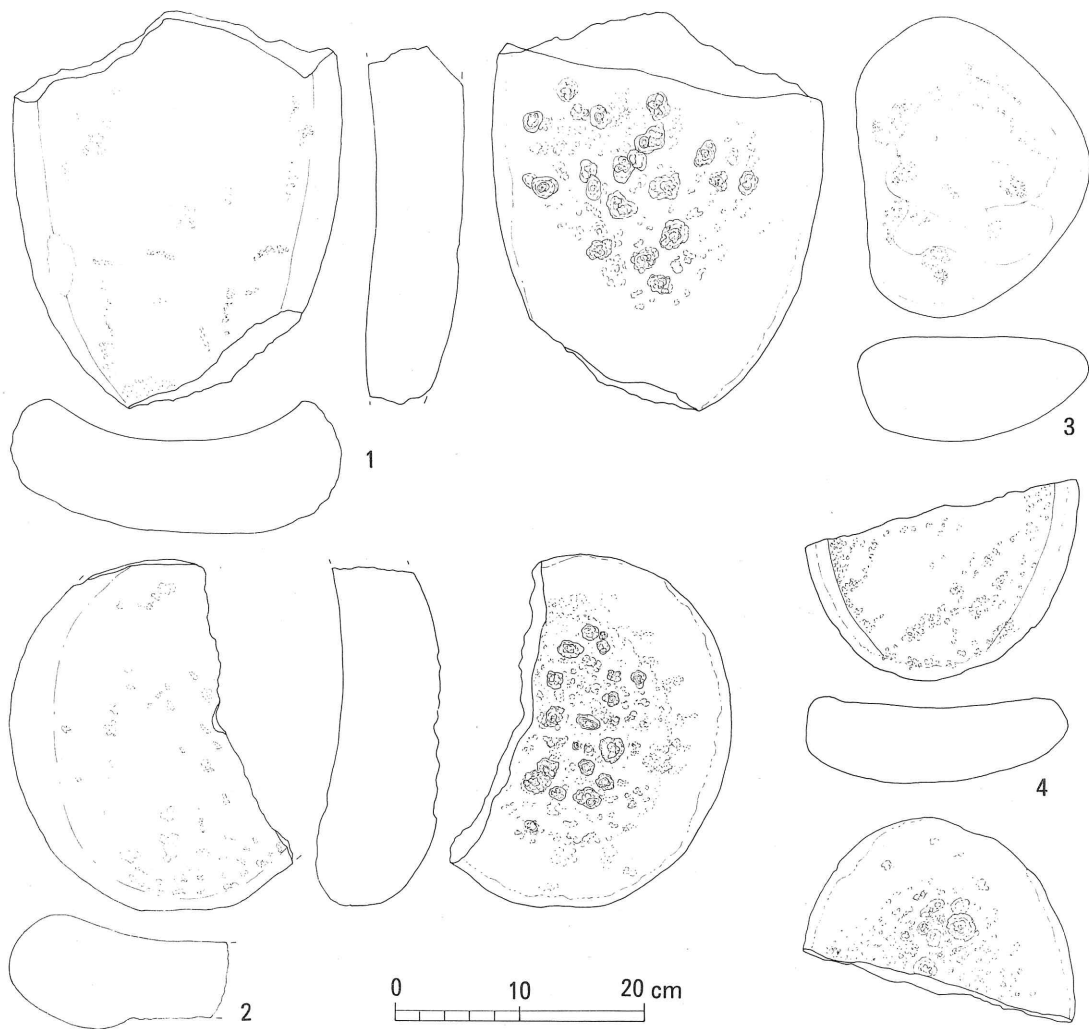
出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1号配石	—	—	1/4	安山岩	(20.3)	(22.5)	9.5	(5,300)	—
5号配石	—	—	完形	"	24.9	23.3	6.8	6,200	74-3
3号土壇	埋土中	—	完形	"	21.3	18.6	5.7	2,700	74-2
8号土壇	"	—	1/2	"	(20.8)	(17.4)	11.3	(5,000)	—
DXII-b3	第2層	—	完形	"	20.5	19.1	12.0	5,900	74-1



第74図 石皿，蜂の巣石実測図(1)



第75图 石皿実测图(2)



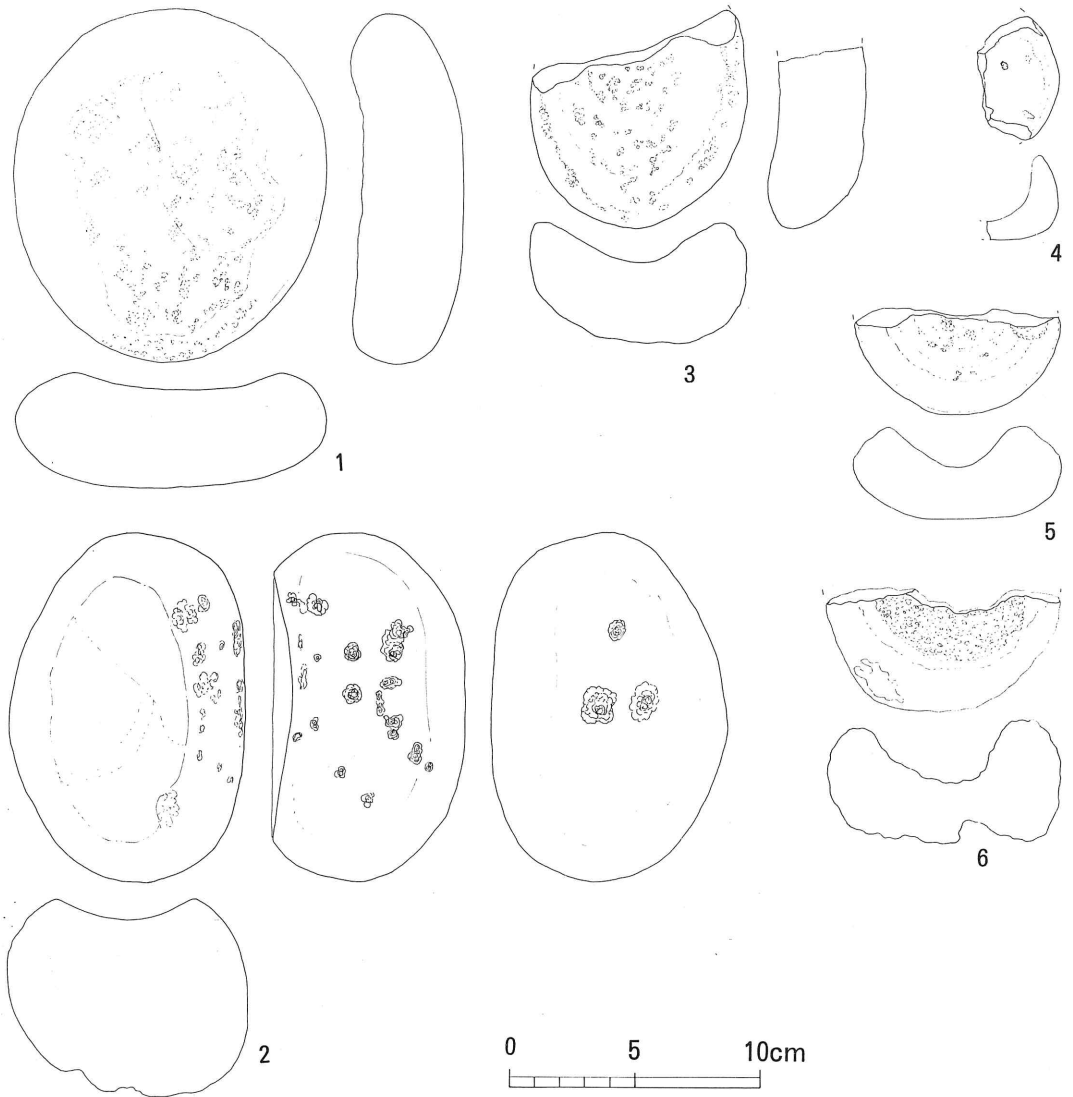
第76図 石皿実測図(3)

5. 蜂の巣石

第13表に示すように、一般に蜂の巣石と称される石器が、完形品3点、破損品2点の計5点出土した(第73図参照)。

いずれも直径20cm程度の扁平な河原石を利用している。表裏に多数の凹みを有するものであるが、凹みの浅いもの(第74図3)と、深いもの(第74図1,2)とがみうけられる。

石質はいずれも安山岩である。



第77図 石皿実測図(4)

6. 石 槍

石槍は、17号ピットから1点出土した(第79図1)。

表裏ともに、素材とした剥片の剥離面を残し、側縁部には連続した調整剥離が施されている。残存部は約 $\frac{1}{2}$ で、基部が欠損しているが、平面形は左右非対称の柳葉形を呈していたものと思われる。

石質は珪質流紋岩である。

7. 石 鏃

石鏃は、第14表に示すように、破損品を含めて総計15点出土した。分布は、A・BⅧ区～BⅩ区にやや集中する傾向が認められる（第78図参照）。

15点のうち、完形品は8点である。破損品は先端部または基部を欠損しているものが多い。未製品と思われるものが1点ある。

石質は、チャート6点、珪質流紋岩5点、黒曜石2点、珪質凝灰岩、瑪瑙各1点である。周縁の調整は比較的粗雑であり、素材とした剥片の剥離面を大きく残したものもみられる。また、鏃身の厚さにもあまり統一性はみられない。平面形態と基部形態で以下の6類に分類できる。

I a類 側縁部が直線的で、平面形が二等辺三角形状を呈し、基部に丸みをもつもの（第79図2～5）。

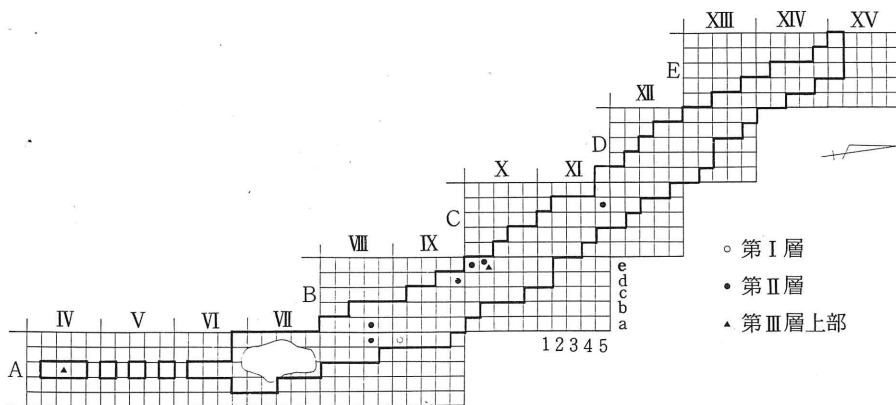
I b類 平面形が二等辺三角形状を呈し、基部が平坦か僅かに抉りが認められるもの（同6～8）。

I c類 平面形が二等辺三角形状を呈し、基部に明瞭な抉りがあるもの（同9, 10）。

II a類 側縁部が途中で屈曲するために、平面形が五角形状を呈し、基部に丸みをもつもの（同16）。

II b類 平面形が五角形状を呈し、基部が平坦か僅かに抉りが認められるもの（同11, 13, 14）。

本遺跡出土の石鏃は、長さが32mm、重さが4gをこえるやや大形のものと、20mm、2g以下の小形のものに分かれるようであるが、資料数が少ないので、ここではその傾向を指摘するに留めたい。

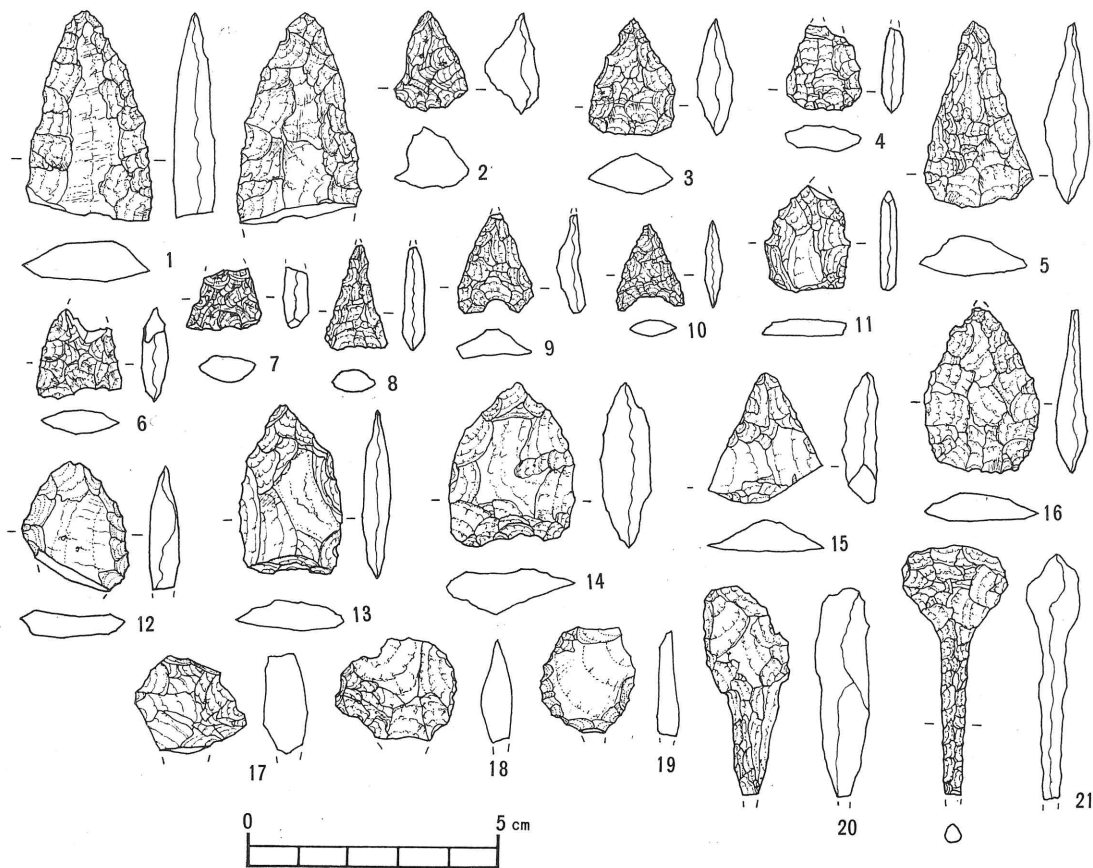


第78図 石鏃の地区別分布図

第13表 石鏃一覧表

(単位cm及びg. ()を付したものは現存値を示す)

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
5号配石	—	不明	一部欠	瑪瑠	(24.8)	21.3	4.6	(3.0)	79-12
8号土壙	埋土中	I a	"	黒曜石	19.0	(14.1)	10.6	(1.8)	79-2
16号土壙	"	I a	"	チャート	(16.2)	14.6	3.5	(1.0)	79-4
17号土壙	"	II b	"	"	(21.0)	17.1	3.7	(1.7)	79-11
"	"	I b	"	珪質流紋岩	(17.4)	16.5	5.2	(1.2)	79-6
23号土壙	"	I b	½	黒曜石	(12.7)	(15.2)	4.7	(0.9)	79-7
AIV-c 3	第3層	I c	完形	珪質流紋岩	19.0	14.4	4.0	0.8	79-9
AVIII-e 4	第2層	II b	"	チャート	33.6	21.3	5.8	4.6	79-13
AIX-e 1	第1層	I c	"	"	16.6	13.5	3.2	0.5	79-10
BVIII-a 4	第2層	II b	"	珪質流紋岩	32.4	25.1	9.2	6.8	79-14
BIX-d 5	"	I a	"	珪質凝灰石	35.5	21.4	8.0	4.4	79-5
BX-e 1	"	未製品	一部欠	チャート	25.4	(22.3)	5.7	(2.4)	79-15
BX-e 2	"	II a	完形	珪質流紋岩	32.1	22.7	5.8	4.0	79-16
"	第3層	I b	"	チャート	20.1	12.5	4.6	1.0	79-8
CXI-d 5	第2層	I a	"	珪質流紋岩	23.3	16.3	7.1	2.1	79-3



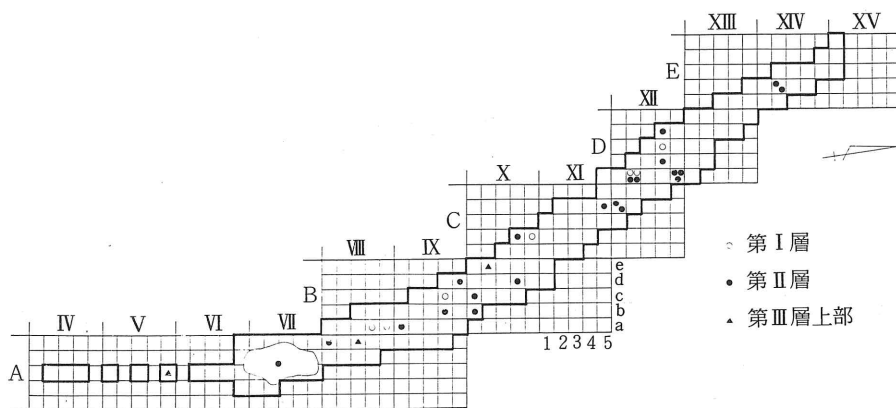
第79図 石槍, 石鏃, 石錐実測図

8. 切目石錘

切目石錘は、第15表に示すように、破損品を含めて計38点出土した。調査地区のほぼ全域から分散して出土しているが、D XII区で比較的多く出土している（第80図参照）。

本遺跡で出土した切目石錘は、長軸の両端にのみ切目を有するものと、短軸にも切目を有するものが出土している。出土点数の内訳はA種が36点、B種が2点である。ほとんどは扁平な河原石を利用したものであるが（第81図、第82図）、なかには細長いもの（第82図5）や、研磨を加えて断面形を長方形に仕上げたものもある（第82図18）。特に後者は、その特異な形状とともに、本県では産しない結晶片岩製である点が注目される。

完形品27点の長さ、巾、厚さの平均値は、それぞれ6.4 cm、3.4 cm、1.3 cmを測る。重さは、最も重いもので93.2 g、軽いもので5.4 gを測り、その平均値は40.8 gである。石質は、粘板岩21点、流紋岩8点、硬砂岩5点、凝灰岩・頁岩・結晶片岩・ホルンフェルスが各1点である。選材の傾向として、後述する礫石錘に比べ粘板岩の利用頻度が極めて高いことが指摘できる。



第80図 切目石錘の地区別分布図

第14表 切目石錘一覧表

[単位cm及びg. ()を付したものは現存値を示す]

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1号配石	—	A	完形	粘板岩	5.7	3.4	1.6	40.3	81-1
14号土壌	埋土中	"	½	流紋岩	(3.7)	2.7	0.7	(8.9)	81-2
17号土壌	埋土中	"	完形	流紋岩	5.7	2.9	1.1	25.7	81-3
17号土壌	埋土中	"	完形	粘板岩	6.7	2.3	1.5	32.2	81-4
17号土壌	埋土中	"	½	流紋岩	(4.2)	4.5	1.0	(28.2)	81-5
23号土壌	埋土中	"	½	硬砂岩	(5.7)	(5.4)	1.3	(41.9)	81-6
A V-c 5	第3層	"	完形	流紋岩	6.9	2.9	1.9	39.4	81-7

A VIII-e 3	"	"	完形	粘板岩	4.9	3.4	1.2	28.0	81-9
B VIII-a 4	第1層	"	一部欠	粘板岩	(5.5)	3.9	0.9	(31.5)	81-8
B VIII-a 5	"	"	1/2	粘板岩	(5.0)	(4.5)	0.9	(23.1)	81-11
B IX-a 1	第2層	"	1/2	粘板岩	(4.3)	(3.1)	(0.7)	(15.0)	81-12
B IX-b 4	"	"	完形	流紋岩	5.1	3.0	1.4	26.2	81-13
B IX-c 4	第1層	"	1/2	頁岩	4.8	3.2	1.0	24.3	81-14
B IX-d 5	第2層	"	1/4	粘板岩	(3.3)	(2.0)	0.7	(6.0)	81-10
B X-b 1	"	"	完形	粘板岩	6.3	3.8	1.7	53.7	81-16
B X-c 1	"	"	一部欠	凝灰岩	5.0	(4.2)	(0.9)	(18.5)	81-17
B X-d 4	"	"	1/2	粘板岩	(2.0)	(2.8)	1.0	(6.5)	81-15
B X-e 2	第3層	"	完形	粘板岩	7.9	4.8	1.8	93.2	81-18
C X-b 4	第2層	"	完形	粘板岩	7.8	3.9	1.4	65.4	81-19
C X-b 5	第1層	"	完形	砂岩	6.4	5.1	1.5	51.2	82-1
C XI-d 5	第2層	"	完形	粘板岩	4.9	3.4	1.0	22.6	82-2
C XII-d 1	"	"	完形	流紋岩	5.2	3.1	1.3	21.3	82-3
C XII-d 1	"	"	完形	粘板岩	5.7	3.9	1.4	39.0	82-4
D XII-a 2	第1層	"	1/2	ホルンフェルス	(10.6)	(1.8)	(0.9)	(23.1)	82-5
D XII-a 2	"	"	完形	硬砂岩	6.0	2.6	0.6	16.8	82-6
D XII-a 2	第2層	"	完形	粘板岩	7.3	3.2	1.6	54.8	82-7
D XII-a 2	"	"	完形	粘板岩	5.2	3.3	0.9	24.4	82-8
D XII-a 5	"	"	完形	粘板岩	7.0	2.7	2.0	37.5	82-9
D XII-a 5	"	"	完形	粘板岩	8.3	4.3	0.8	55.1	82-10
D XII-b 4	"	"	完形	流紋岩	7.5	3.8	1.6	67.1	82-11
D XII-c 4	第1層	"	完形	砂岩	5.5	3.1	1.1	26.6	82-12
D XII-d 4	第2層	"	完形	粘板岩	4.6	3.0	0.5	15.1	82-13
DXIV-b 2	"	"	完形	粘板岩	7.3	2.2	0.8	21.4	82-14
DXIV-b 2	"	"	完形	粘板岩	6.8	4.1	0.9	37.4	82-15
表採	—	"	完形	流紋岩	4.9	3.6	1.7	31.5	82-16
表採	—	"	完形	粘板岩	8.1	4.3	1.9	82.5	82-17
A VIII-e 1	第2層	B	一部欠	結晶片岩	(8.4)	1.6	0.7	(20.1)	82-18
D XII-a 5	"	"	完形	硬砂岩	10.8	3.3	1.6	69.2	82-19

9. 磨製石斧

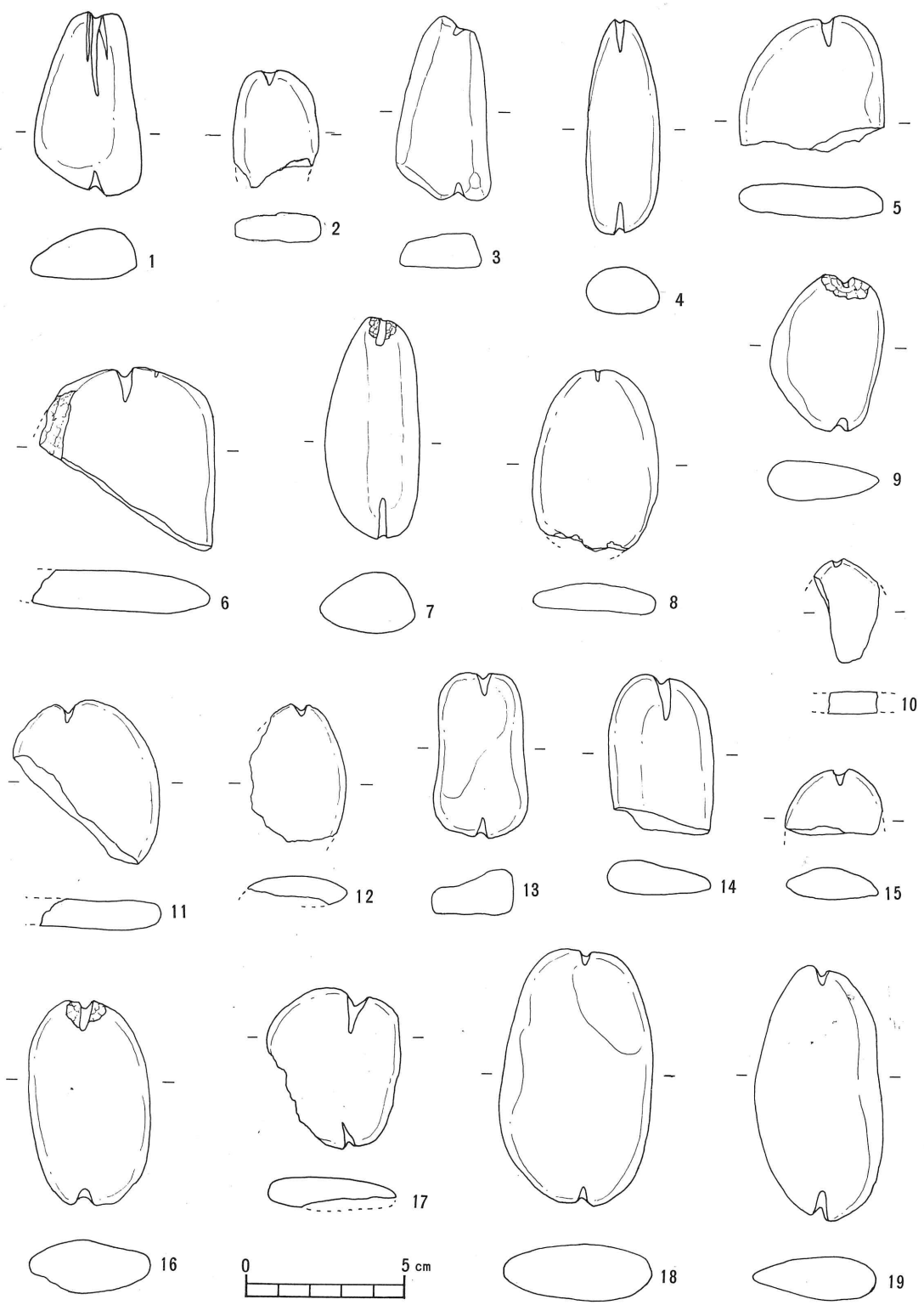
磨製石斧は、第16表に示すように、すべて破損品で計17点出土した。調査地区のほぼ全域から分散して出土している。

石質は、硬砂岩7点、ホルンフェルス3点、砂岩・凝灰岩各2点、礫岩・頁岩・チャート各1点である。

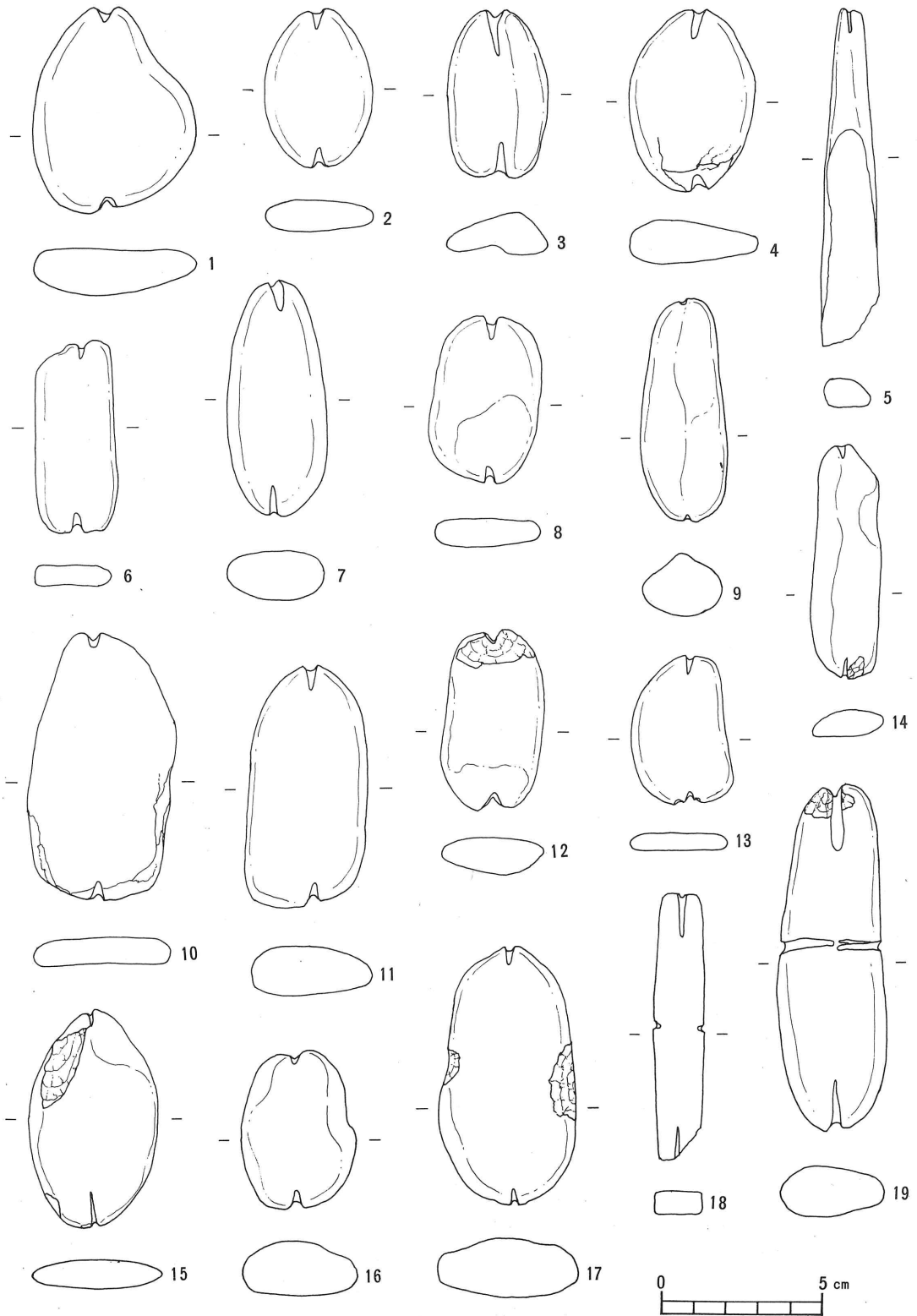
これらの磨製石斧はその形状から次の3類に分類できる。

I類 断面形が楕円形を呈し、刃部が蛤刃をなす、いわゆる乳棒状磨製石斧である（第85図1, 2）。

刃部幅が6cmをこえる大形のもので、基部と刃部の破損品が1点ずつ出土している。側縁部にはいずれも敲き痕を残し、両面はその上に粗い研磨が施されている。



第81图 切目石錘実測图(1)



第82图 切目石錘実測图(2)

なお刃部には細かい剥離痕がみられる。

II a類 いわゆる定角式のもので、大形のものを本類とした（同3～10、15）。

刃部幅5 cm、厚さ2.5 cmをこえる大形のもので、9点出土した。両側面及び頭部各面とも丁寧に研磨されて整形されており、断面形は隅丸長方形を呈し、何れも両刃のものである。

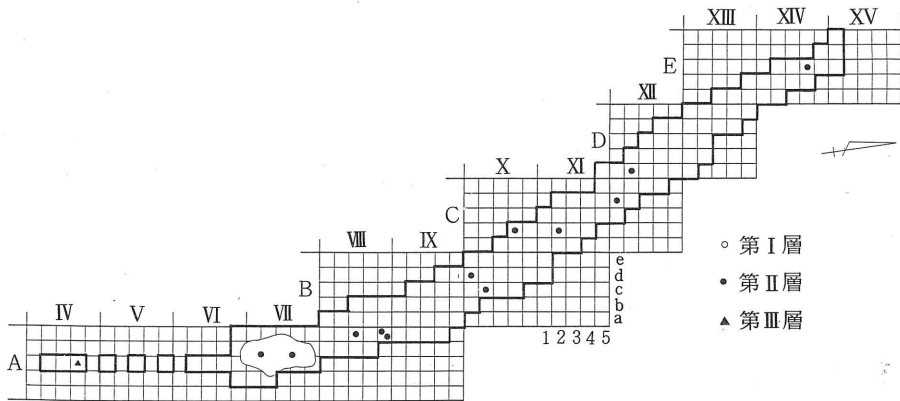
基部を含む破損品4点、刃部を含む破損品3点、胴部破片1点、未製品と思われるものが1点ある。

II b類 定角式のもので、小形のものを本類とした（同11～13）。

刃部幅3 cm、厚さ1.5 cm前後のもので、3点出土した。基部を含む破損品1点、刃部を含む破損品が2点ある。

II c類 定角式のもので、極めて小形のもの（同14）。

刃部幅1.7 cm、厚さ0.95 cmの鑿の刃を思わせる小形のもので1点出土した。



第83図 磨製石斧の地区別分布図

第15表 磨製石斧一覧表

〔単位cm及びg. ()を付したものは現存値を示す〕

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1号配石	—	II a	½	礫岩	(6.4)	(4.6)	3.1	(151.5)	85-3
"	—	II a	一部欠	硬砂岩	(9.2)	5.4	3.4	(280.8)	85-4
18号土壙	埋土中	III	一部欠	頁岩	5.5	1.7	0.9	(15.5)	85-14
A IV-c 4	第3層	II a	一部欠	ホルンフェルス	(8.5)	(4.7)	2.4	(149.8)	85-5
A VIII-e 3	第2層	II a	½	砂岩	(7.5)	5.3	2.7	(179.6)	85-6
A VIII-e 5	"	I	一部欠	硬砂岩	(12.5)	(5.8)	3.8	(383.3)	85-1
"	"	II b	一部欠	凝灰岩	(6.6)	(3.0)	1.7	(48.0)	85-11
B X-c 2	"	未製品?	¼	ホルンフェルス	(4.0)	(3.5)	2.0	(43.9)	85-16
B X-d 1	"	I	½	硬砂岩	(9.0)	(6.2)	3.5	(277.7)	85-2

CX-b 4	"	II a	1/3	ホルンフェルス	(4.0)	(3.9)	2.0	(54.5)	85-7
CXI-b 2	"	II a	1/4	硬砂岩	(8.2)	(5.5)	3.0	(138.7)	85-10
CXII-d 1	"	II a	一部欠	"	13.0	(4.8)	2.8	(220.2)	85-15
DXII-a 2	"	II b	一部欠	凝灰岩	(5.0)	2.8	1.2	(25.7)	85-12
EXIV-c 4	"	II b	1/2	チャート	(4.7)	3.3	1.5	(41.1)	85-13
表 採	-	II a	1/2	硬砂岩	(7.0)	5.1	2.6	(165.9)	85-8
"	-	II a	1/2	"	(7.4)	(4.6)	2.5	(152.0)	85-9
"	-	未製品?	1/2	砂岩	(6.3)	4.8	2.9	(135.0)	-

10. 石 錐

石錐は、第17表に示すように5点出土した。すべて破損品である。特定の地区に集中することはなく、散発的に出土した(第84図参照)。

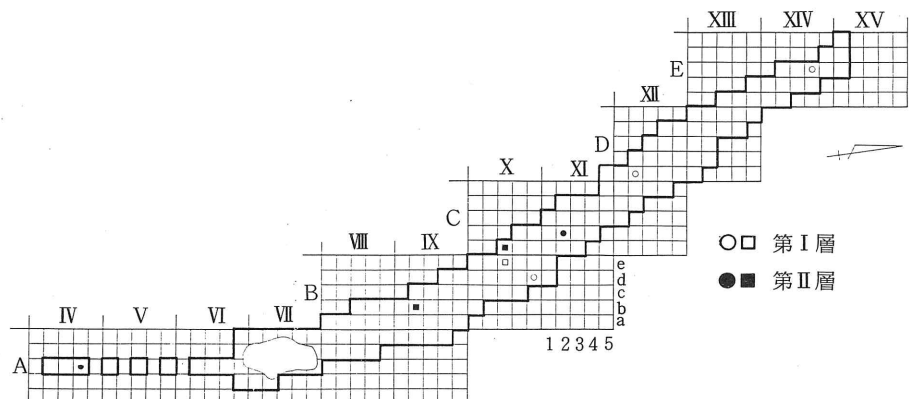
錐部が残存しているものは2点にすぎず、錐部の調整剥離が片側からのみの比較的粗雑な作りのもの(第79図20)と、両側四方向から丁寧に仕上げたものがある(同21)。他3点は基部の破片である。比較的粗い調整剥離の施されたもの(同17, 18)と、両縁辺に丁寧な調整の加えられたものがある(同19)。

石質は、珪質流紋岩4点、チャート1点である。

第16表 石錐一覧表

[単位cm及びg.()を付したものは現存値を示す]

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
A VI-c 4	第2層	-	一部欠	珪質流紋岩	(39.4)	18.0	11.0	(5.5)	79-20
B X-d 5	第1層	-	軸部欠	"	(20.5)	24.2	6.4	(3.2)	79-18
C XI-b 2	第2層	-	"	チャート	(19.3)	21.6	9.3	(4.3)	79-17
DXII-a 2	第1層	-	"	珪質流紋岩	(20.9)	17.9	4.7	(2.0)	79-19
EXIV-c 4	"	-	一部欠	"	(48.5)	20.3	9.4	(3.8)	79-21



第84図 石錐(○●印)、削器(□■印)の地区別分布図



第85图 磨製石斧实测图

11. 削 器

削器は、第18表に示すように、未製品を含めて6点出土した。B IX～X区・CX区付近に多く出土している（第84図参照）。

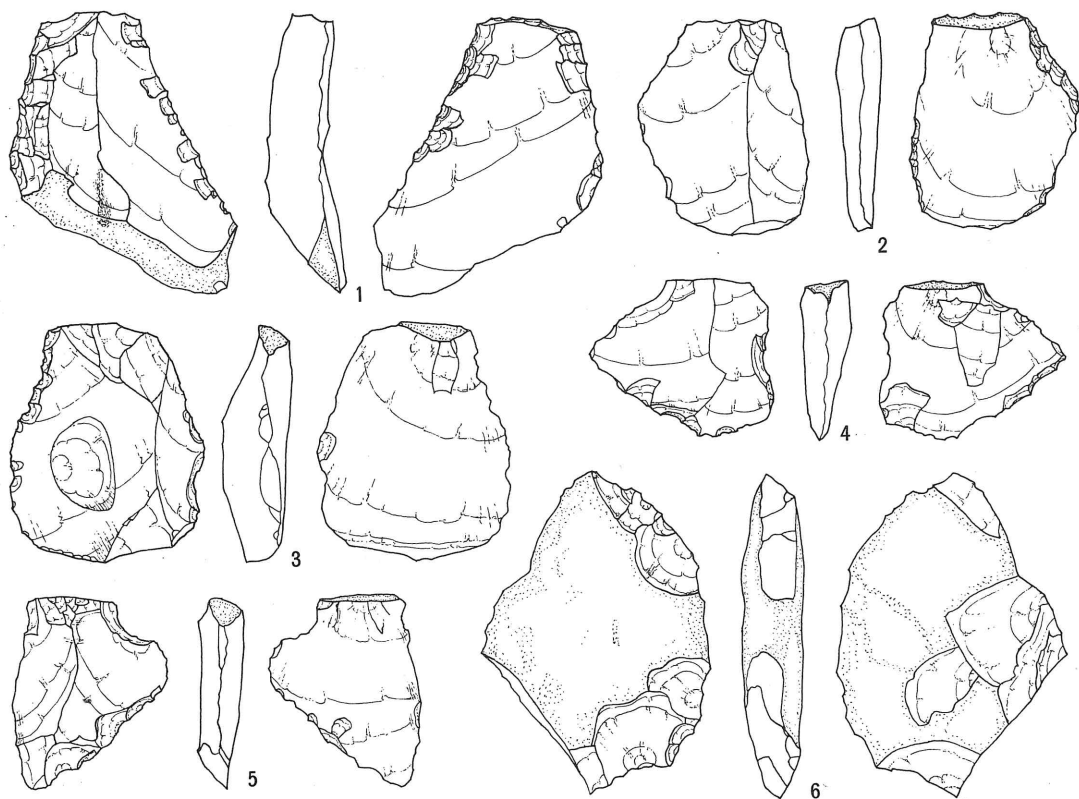
これらは、打痕を残した剥片を主に利用しており、側縁の二面に刃部創出のための剥離が施されたもの（第86図1～3）と三面に剥離が施されたもの（同4、5）とがある。

完形品5点の重さは、最も重いもので25.3 g、軽いもので9.8 gを測り、その平均値は16.1 gである。石質は、珪質流紋岩5点、チャート1点である。

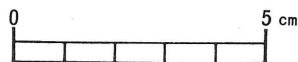
第17表 削器一覧表

（単位cm及びg。（ ）を付したものは現存値を示す）

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
7号土壌	埋土中	I	完形	珪質流紋岩	52.9	45.0	14.3	25.3	86-1
18号土壌	"	I	"	"	42.2	32.4	8.3	11.4	86-2
B IX-b 2	第2層	I	"	"	47.1	37.8	15.1	25.2	86-3
B X-e 3	第1層	II	"	"	30.8	37.4	10.2	9.8	86-4
C X-a 3	第2層	未製品	"	"	45.0	56.3	16.0	40.4	86-6
試掘	4	II	"	チャート	37.5	38.0	9.0	8.9	86-5



第86図 削器実測図



12. 礫石 錘

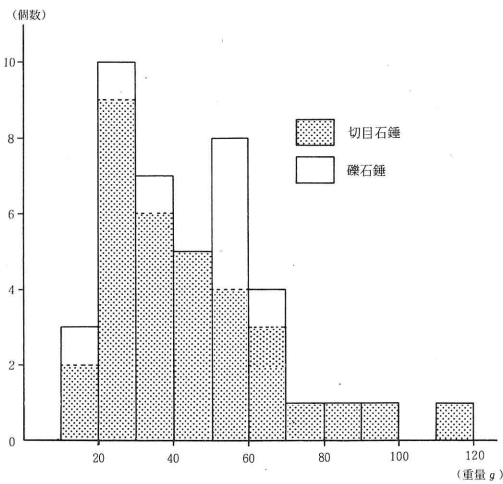
礫石錘は、第19表に示すように、計16点出土した。すべて完形である。ある程度の纏まりを保ちながら分散して出土している（第89図参照）。

何れも扁平で楕円形を呈する河原石を利用している。長軸に対して、垂直方向から軽く数回の打撃を加えて糸掛けを作出したためか、剥離面があまり大きくないのが特徴である（第90図参照）。

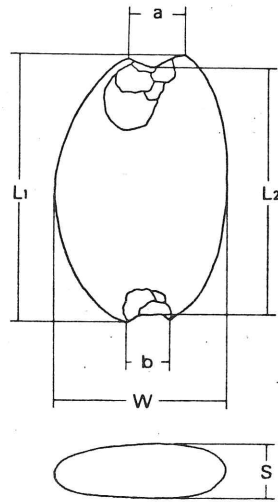
長さ、幅、厚さの平均値は、それぞれ5.8 cm、3.1 cm、1.5 cmを測る。重さは、最も重いもので114.5 g、軽いもので17.5 gを測り、その平均値は55.8 gである。

これらの特徴を切目石錘と比較すると、平均で7.2 g重く、石材選定の傾向にも差が認められる。このことは、形状の類似する切目石錘とは明かに異なる意識で、礫石錘が製作されたことが窺える。

石質は、流紋岩6点、安山岩・粘板岩が各3点、砂岩が2点、硬砂岩・ホルンフェルス各1点である。（第18表参照）



第87図 切目石錘、礫石錘の重量度数分布



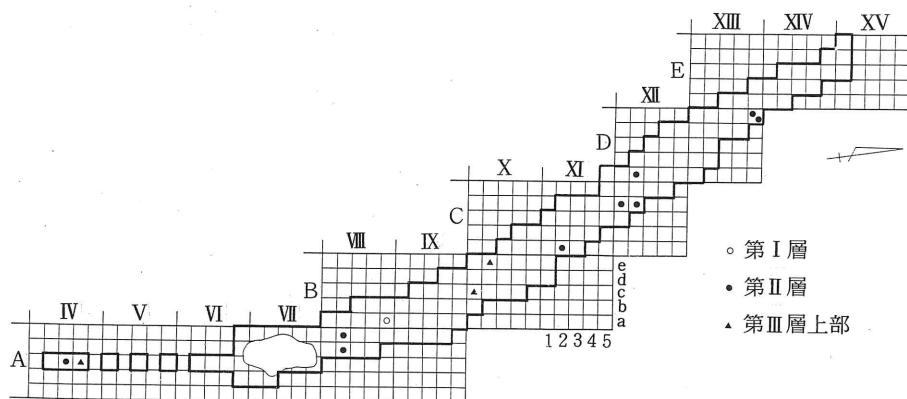
第88図 礫石錘計測部位説明図
(渡辺 誠 1980 による)

第18表 礫石錘一覧表

[単位cm及びg、()を付したものは現存値を示す]

出土地区	出土層位	器種	遺存度	材質	L1	L2	W	a	b	S	重さ	挿図番号
3号配石	—	A	完形	流紋岩	5.9	5.4	4.3	1.3	1.2	2.2	78.1	90-1
6号配石	—	A	〃	流紋岩	6.0	5.3	4.3	0.6	0.9	1.0	33.1	90-2
14号土壌	埋土中	A	〃	砂岩	5.4	5.0	4.6	0.9	0.9	1.9	60.2	90-3
AIV-c 3	第2層	A	〃	流紋岩	5.3	4.7	4.2	1.4	1.2	1.5	47.3	90-4

AIV-c 4	第3層	A	"	砂岩	7.5	6.8	4.7	0.8	0.9	1.7	79.8	90-5
AVIII-d 2	第2層	A	"	流紋岩	4.3	3.7	3.1	0.8	1.1	0.8	17.5	90-6
AVIII-e 2	"	A	"	粘板岩	5.5	5.1	3.1	0.7	1.3	0.9	28.7	90-7
BVIII-a 5	第1層	A	"	ホルンフェルス	5.9	5.6	4.0	1.0	1.1	1.1	50.8	90-8
BX-c 1	第3層	A	"	安山岩	5.1	4.4	4.7	1.2	1.9	1.3	48.7	90-9
BX-e 2	"	A	"	安山岩	5.2	4.4	4.4	1.3	1.7	1.2	45.7	90-10
CXII-d 1	第2層	A	"	粘板岩	5.3	5.0	4.7	1.0	0.9	1.3	55.2	90-11
CXII-d 2	"	A	"	硬砂岩	6.5	5.7	4.1	1.2	1.2	1.9	72.7	90-12
DXII-a 2	"	A	"	安山岩	6.3	6.1	3.9	0.8	0.9	1.2	47.1	90-13
DXIII-e 5	"	A	"	粘板岩	6.3	6.0	3.7	0.6	1.0	1.3	53.7	90-14
DXIII-e 5	"	A	"	流紋岩	6.6	6.1	4.3	1.4	1.7	2.5	114.5	90-16
表 採	—	A	"	流紋岩	5.8	5.4	4.1	0.9	1.2	1.8	59.7	90-15



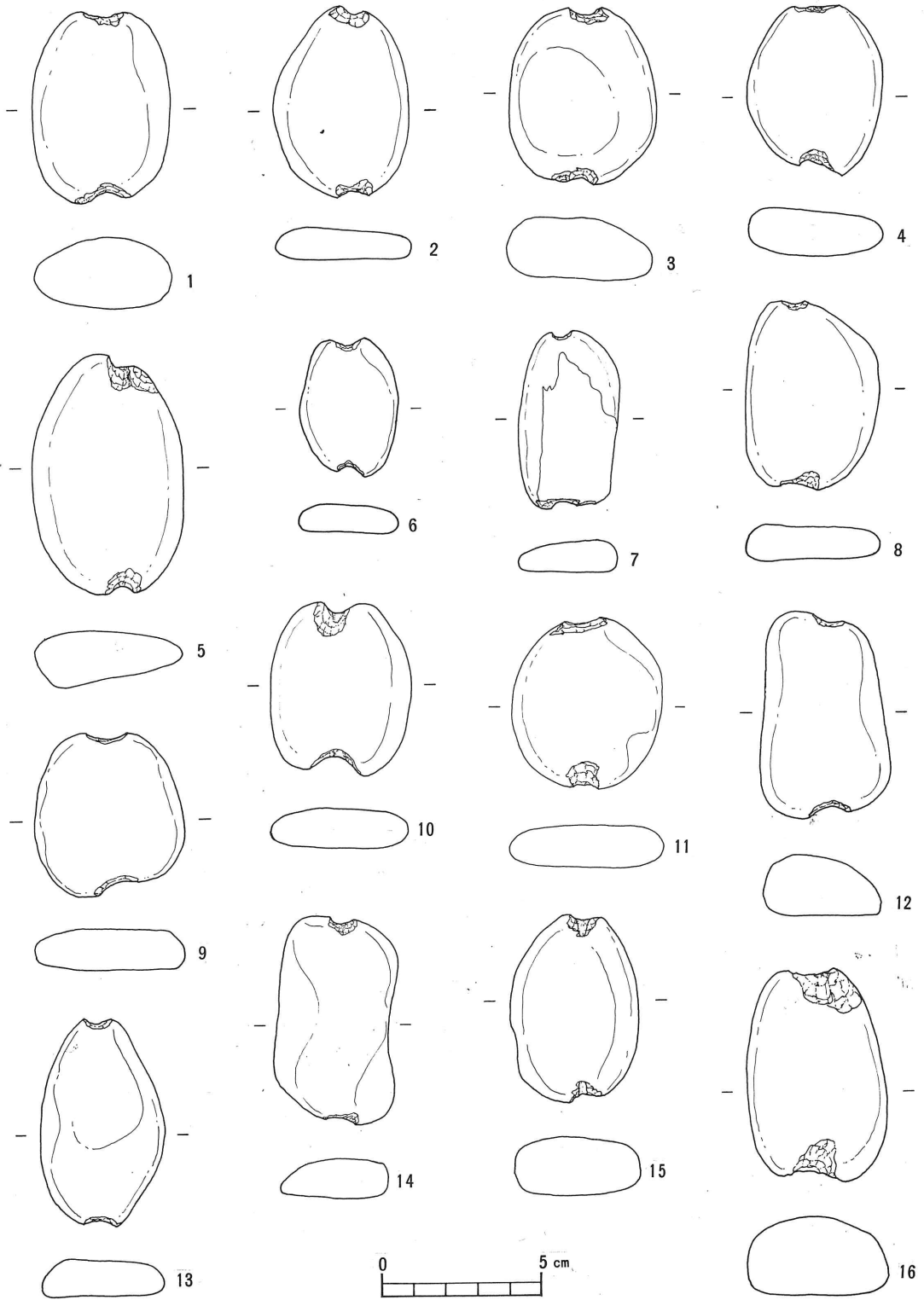
第89図 礫石鍾の地区別分布図

13. 原石・石核・剥片

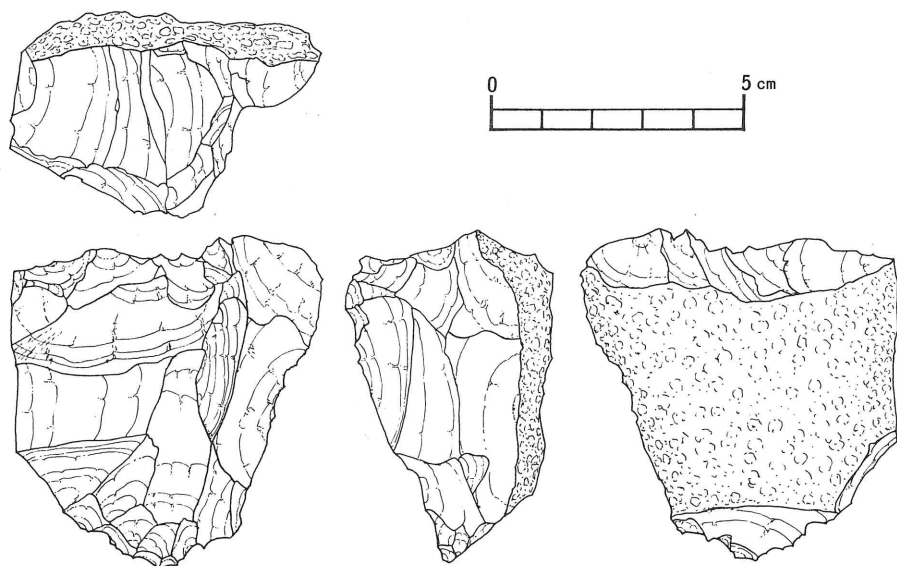
原石、石核及び剥片は計82点が、XIII地区以南の地区でやや纏まりながら出土している。調査区中、特にAIV-c 4区で剥片及び原石が8種類15点と集中して出土しているが、これは隣接するAIV-c 3で炉址が確認されていることと深い関係があると思われる。

石質は、珪質流紋岩、チャート、黒曜石など、剥片石器に多用されているものが多い。

第90図はAVIII-d 3区から出土した、珪質流紋岩製の石核である。長さ、巾、厚さはそれぞれ6.8、6.0、3.9 cmを測る。背面に自然面を残し、上面には打面調整剥離が施されている。剥片の剥離方向には、あまり規則性が認められない。



第90图 礮石錘実測图

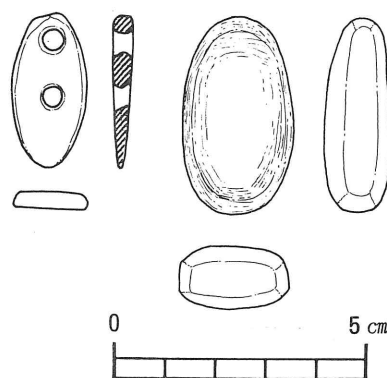


第91図 石核実測図

第4節 石製品

1. 垂飾

小形の垂飾が5号配石から1点出土した。平面形は楕円形を呈し、長さ、幅はそれぞれ3.5 cm, 1.5 cmを測る。厚さは上端部のほうが厚く3.8 mm, 下端部のほうが1.2 mmを測る薄形のものである。重量は2.4 gを測る。器面全体は丁寧な研磨で仕上げられ、光沢を帯びている。穿孔は中央部と上端部の二箇所になされ、いずれも両面から施されている。直径はどちらも4.2 mmを測る。色調は灰色がかった鶯色を呈し、縞状の斑が全体にみられる。蛇紋岩製である。



第92図 石製品実測図

2. 異形石製品

9号土壌から石製品が1点出土した。平面形、横断面形ともに楕円形を呈し、あたか

も磨石を小さくしたような形状のもので、おそらく副葬品と考えられる。器面全体はやや粗い研磨で整形されているために擦痕が認められる。長さ、幅、厚さは、それぞれ3.8 cm、2.2 cm、1.3 cmを測り、重さは14.9 gを測る。凝灰岩製である。

第19表 石製品一覧表

[単位cm及びg。()を付したものは現存値を示す]

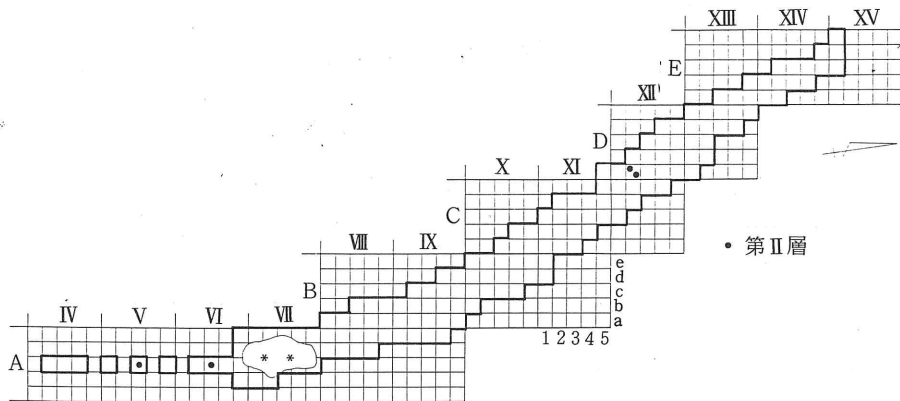
出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
5号配石	—	垂飾	完形	蛇紋岩	3.1	1.5	0.4	2.4	92-2
9号土壌	—	—	完形	流紋岩	4.0	2.2	1.3	19.4	92-1

3. 棒状石製品

第21表に示すように、径が4 cm以下の細い棒状を呈し、胴部や端部に加工痕が認められる石製品が7点出土した(第94図1~7)。これらは小形の石棒・石刀の類と思われるが、一応ここでは棒状石製品と仮称する。

何れも石材に敲打を加えて概ね形を作り出した後、適度に研磨を加えて整形したものである。1は断面形が隅丸の方形状を呈す。胴部周縁には丁寧な研磨が施され、丸みをおびた端部には細かい敲き痕がある。2は断面形が楕円形を呈す。胴部の平坦面に縦の連続した敲き痕があり、側縁部には研磨が施されている。3は断面形が隅丸の方形状を呈す。胴部の二面には細かい敲き痕があり、他の二面には研磨が加えられている。また端部にも細かな敲き痕がある。4は断面形が楕円形を呈す。胴部の平坦面には研磨が施され、側縁部及び端部には細かい敲き痕がある。5は胴部全体に研磨が施され、端部に細かな敲き痕がある。6、7は全体に丁寧な研磨が施され、敲き痕は認められない。

石質は硬砂岩4点、ホルンフェルス2点、珪質凝灰岩1点である。

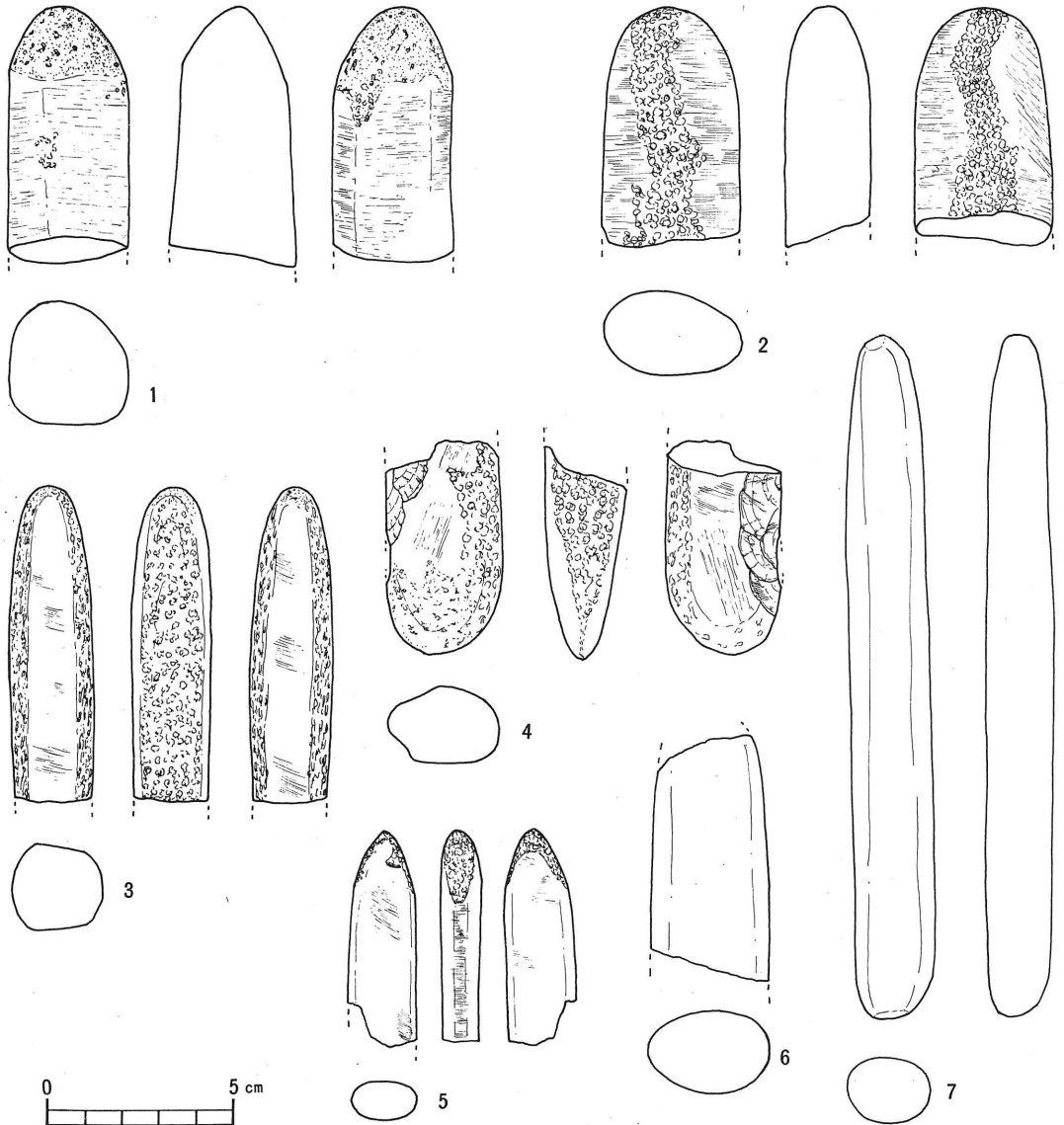


第93図 棒状石製品(•印)、石棒(*印)の地区別分布図

第20表 棒状石製品一覧表

(単位cm及びg. ()を付したものは現存値を示す)

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
2号配石	--	--	端部	ホルンフェルス	(8.5)	2.4	2.2	(82.5)	94-3
7号土壌	埋土中	--	"	硬砂岩	(6.8)	3.2	3.4	(120.2)	94-1
16号土壌	"	--	"	"	(5.7)	1.9	1.1	(20.1)	94-5
AV-c3	第2層	--	"	"	(6.2)	3.7	2.3	(89.0)	94-2
AVI-c3	"	--	"	"	(5.8)	3.0	2.2	(49.2)	94-4
DII-a2	"	--	両端部欠	珪質凝灰岩	(6.6)	3.3	2.2	(77.9)	94-6
"	"	--	完形	ホルンフェルス	18.2	2.3	1.7	135.8	94-7



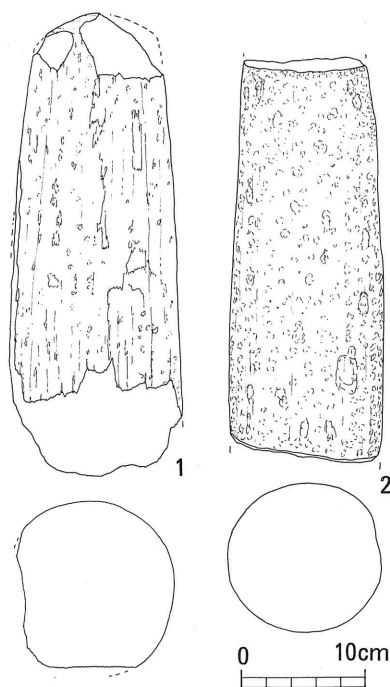
第94図 棒状石製品実測図

4. 石 棒

石棒は第22表に示したように、破損品が2点出土した。何れも1号配石中に含まれていたものである(第95図1, 2)。

2点とも周縁部を敲き出し、円筒形に整形した後に研磨を施している。1は直径約14cmを測り、形状は端部にいくにしたがって形がすぼまるいわゆる裁頭円錐形状を呈している。端部は一部が残存しており、緩やかな球面を呈していたと思われる。2も1同様の形状を呈すが、両端部を破損しているため詳細は不明である。直径は約12.5cmを測る。

石質は1が結晶片岩、2が安山岩製である。



第95図 石棒実測図

第21表 石棒一覽表

(単位cm及びg.()を付したものは現存値を示す)

出土地区	出土層位	器種	遺存状態	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
1号配石	—	石棒	½	結晶片岩	(37.5)	14.5	—	(14,000)	95-1
1号配石	—	石棒	½	安山岩	(32.5)	12.5	—	(11,000)	95-2

第5節 小 結

(1) 石器の組成とその特色

今回の調査では、第22表に示すように総数で228点の石器が出土した。その多くは、配石・配石を伴う土坑や埋甕などが検出された北向きの窪地から出土したものである。この地点は、当時の集落のなかでは明らかに居住空間とは異なる祭祀性の強い領域と考えられ、出土した遺物に破損品が多いのも、この場の性格と密接に関連しているものと思われる。すなわち、出土した石器は第一義的な場を離れたものであり、二次的な利用状況や廃棄の状態を示すものである。また遺構の性格上、遺物の時期的帰属の厳密性にやや欠ける点も否めない。しかし、これらの石器群は大規模な調査例の少ない本県域にあっては、縄文時代中期末から後期初頭の生活を考えるうえで、極めて貴重な資料である。

第22表 古宿遺跡出土石器組成表

器種	点数	状態		遺構内	各グリッド出土			表採
		完形	破損		第1層	第2層	第3層	
石 槍	(0.4%) 1		1	1				
石 鏃	(6.6%) 15	8	7	6	1	6	2	
削 器	(2.6%) 6	6	0	2	1	3		
磨製石斧	(7.5%) 17	0	17	3		10	1	3
打製石斧	(15.4%) 35	15	20	10	1	18	3	3
石皿・蜂巢石	(17.1%) 39	6	33	21	3	11	3	1
磨石類	(23.2%) 53	47	6	17	6	23	4	3
石 錘	(2.2%) 5	0	5		3	2		
切目石錘	(16.7%) 38	26	12	6	7	20	3	2
礫石錘	(7.0%) 16	16	0	3	1	8	3	1
握り槌状石器	(1.3%) 3	2	1	1		2		
計	(100%) 228	126	102	70	23	103	19	13

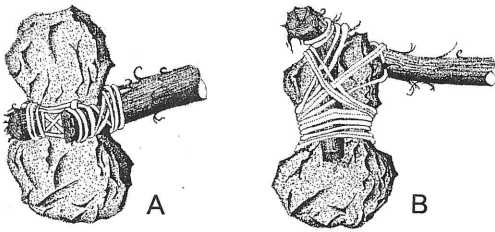
ここでは、これらの石器のなかから、当時の生業とかかわりが深いと思われるものに関して気付いた点を記すことにする。

まず第一に、石槍と石鏃である。これらは何れも狩猟具として縄文時代には一般的な石器である。ただし草創期を除いては、本県域の場合圧倒的に後者が卓越しており、東北地方などとは明らかに異なった様相を呈している。このことは、捕獲の対象となった動物の差か狩猟法の違いによるものであると考えられるが、ここでは実証的な資料に欠けるので問題提起にとどめることにする。次に本遺跡におけるこれら狩猟具としての石器の占める割合であるが、点数で計16点、全体の僅かに7%に過ぎず、石器の中では決して主体的な位置を占めているわけではない。石器の点数比がそのまま当時の生業の実態を示していないことは、言うまでもないことであるが、それにしても今回発見されている石鏃の作りを見た場合、何れも決して均整のとれたものとはいいがたく、製作が雑である印象をもった。なかには、先端部の鋭利さに欠けるようなものも多く、これらは、未製品か破損品であるがゆえに廃棄された可能性も有している。蛇足ではあるが、石鏃の形態は何れも無茎のものであり、後期初頭の本県域では、まだ有茎のものが普及していないことを示す一例となった。

第二に切目石錘である。切目石錘は土器片錘ともども網漁に関係の深い石器として研究されているが、本県域では中期後葉に出現し、中期末以降その数が急増している。このことは内陸部である本県の河川域でも、網漁が活発化したことを示しているものと考えられ

る。本遺跡では、中期末から後期初頭の土器片錘16点、切目石錘38点が出土しており、この時期の遺跡としては県内でも漁撈具を多出する遺跡と言える。対岸にある後期初頭の藤倉山遺跡からも28点の切目石錘が出土しており、山間部をぬけた鬼怒川が平野部に出て網状流化する本遺跡周辺の環境は、当時の人々にとってこの上ない好漁場であったことが窺える。また、1点だけではあるが切目石錘の中に中部地方にみられる形態のものも含まれており（第82図18）興味深い資料と言える。

第三に打製石斧であるが、この石器は本遺跡の場合破損の度合いが高く、くびれ部付近で折れているものが破損品の殆どである。またくびれ部には、すべてに刃潰しの調整がみられ、明らかに摩耗痕が認められる。このことは打製石斧の装着時の状態をある程度示しているものと考えられる。すなわちこれらの石器は、おそらく木製であったと思われる柄の先端を半截し、くびれ部を挟むようにして装着し固定したか（第96図A）、石器の長軸を、L字形をした柄先の内側にやはり刃の面が直交するように装着しくびれ部で固定したか（第96図B）、何れかの方法がとられたものだと考えられる。しかし今回は各石器の摩耗痕の観察を実施し得なかったので、ここでは、可能性を指摘するにとどめたい。



第96図 打製石斧装着復原図

つぎに時期的に見た場合、これら分胴形を中心とした打製石斧は、本県域では中期中葉に出現し、中期後葉には爆発的にその数が増加することが知られている。このことは、打製石斧を、単に、住居跡などを掘る際に用いる土掘り具として限定するよりも、生業活動の変化の中で急

増する道具のひとつであると考えたほうが、より妥当性を有しているのではないだろうか。現在のところ、このような爆発的な打製石斧の増加を見る地域は、中部地方を中心に北関東地方に限られている。この現象は、かつて縄文農耕論の根拠として数えられたことがあったが、あえてそこまで極論しなくても、渡辺誠氏が指摘するように、堅果類の利用にもなうアク抜き技術の発達段階の中で、ある時期を画して、根茎類の活発な利用がはかられた結果だとしたほうが、現時点では論旨に飛躍の少ない慎重な帰結であると思われる。

現在、堅果類のなかで最もアク抜きの困難であるトチの食用開始時期は、東北地方北部において縄文時代の中期初頭にはすでに確立されていたことが明らかになっている。すなわち煮沸段階に灰を加え、最後に冷水で晒すという技術の獲得がなされたことによって、可食化された植物は極めて多種にわたったことは想像に難くない。その結果、これら植物質食糧の保存を目的として、袋状土坑による貯蔵法が発達したものと考えられる。

東北地方の外縁部における本県域などでは、中期中葉にまず袋状土坑が伝播し、トチを代表とする堅果類の他に、根茎類の利用が活発化する中期中葉に及んで、爆発的に打製石斧が急増したものと考えられる。以後、本県域などでは連続として打製石斧は縄文時代を通じて製作されたようであるが、中期後葉のように各遺跡で多量に打製石斧を製作することはみられなかったようである。

本遺跡の場合などは、爆発的な急増をみた中期後葉の代表的な遺跡である宇都宮市上欠遺跡や御城田遺跡例に比べれば、その全体に占める比率もさほど多くなく15.4%を占めるにすぎない。この比率が量的にみた場合どの程度のものかは、本県域において比較する遺跡が皆無の現在では論究しようがないが、今後、調査事例が増加するなかで、後期における打製石斧の位置づけは、次第に明らかにされていくことと思われる。

最後に、磨石類及び石皿類の問題について考えてみたいと思う。

まず磨石類であるが、本遺跡における割合は最も高く、全体の23.2%に及んでいる。ことは前述した、打製石斧の問題とも関係が深いと考えられるが、とにかく当時の生業の中で植物質の食糧の占める比率は高く、堅果類や根茎類の製粉具として機能していたと考えることによって、その数の多さは諾けるところである。

続いて石皿である。本遺跡の場合、小形の一部を除いて完形品がなかったことは前述した通りである。本来的には磨石類とセットとなり、堅果類や根茎類の製粉具として機能するものであると考えられる。形態的には縁が高く深いものと、縁が殆んどなく浅いものの二者がある。流し口部を有するものが前者に多いことから、この差は製粉の対象となった植物の差異に起因するものと考えられる。すなわち、製粉時に液状を呈するものに関しては、目減りを防ぐ意味からも、特に前者との関係が深いものと思われる。他に、注目される資料として、手の平にのるような小形の石皿を指摘することが出来る。作業能率からみても、これらは主食となる植物の製粉具とは考えられず、山椒などの、調味料として用いられる植物の製粉具であった可能性を指摘できるものである。磨石類の中に、これらの石皿と対応するような、小形のものも出土しており、興味深い資料といえる。

最後に、本遺跡の第1号配石群中における、石皿の特殊な二次利用について記すことにする。そこでは、太い石柱とでもいうべき、打ち割られた2点の石棒とともに、明らかに人為的に破壊された、多くの石皿が出土した。中には、図版42に示すように、割れ目にまで淵みるほど、内面にタール状の炭化物が付着しているものもある。この資料は、破損した後の割れ口に、二次的な焼成が認められるものであるが、おそらく廃棄された後で被熱したものと考えられる。配石のなかで何故に石棒と対をなして破壊されたのか。従来指摘されるような、食糧の豊穡を願う何等かの祭祀行為の存在を抱拂とさせる資料である。植

物の高度な利用を中心とした、粉食を食生活の基本とする彼らにとって、石皿はまさに食糧加工のうえで不可欠の道具であり、食生活のシンボリック的存在として祭時に供されたものなのであろうか。

(2) 石器と石質

第23表は石器とその石質との関係を示したものである。各石器ごとに、かなり石質の選択がなされている様子を知ることができる。即ち刃部に鋭利さが必要で、定形的な薄い剥片を必要とする石鏃・石槍・削器には、珪質流紋岩・チャート・黒曜石、硬質で耐久性を必要とし、しかもある程度偏平な剥片を必要とする打製石斧には、ホルンフェルスやそれに近い安山岩、多孔質で硬く耐久性を必要とする石皿や磨石には主に安山岩、偏平な小円礫として採集しやすく、耐久性を必要とする切目石錘や礫石錘には主に粘板岩や流紋岩が多く用いられていることが分かる。

このように当時の人々は、石材の選択からみても、自然の資源に対する正確な知識を体験的に取得していたことが窺えるのである。

次にこれらの原石の採集場所について考えてみることにする。遺跡の立地している羽黒山周辺は、入畑流紋岩類とよばれる中生代白亜紀の地層を基盤とし、新生代第三紀の宮山

第23表 古宿遺跡出土石器と石質

器種 \ 石質	安山岩	閃緑岩	石英班岩	珪質流紋岩	黒曜石	メノウ	流紋岩	硬砂岩	砂岩	チャート	珪質凝灰岩	粘板岩	凝灰岩	頁岩	礫岩	ホルンフェルス	結晶片岩	小計
握槌状石器				1												2		3
打製石斧	9	1						2	1							21	1	35
磨石類	50		2						1									53
石皿	34																	34
蜂の巣石	5																	5
石槍				1														1
石鏃				5	2	1				6	1							15
切目石錘							8	5				21	1	1		1	1	38
磨製石斧								7	2	1			2	1	1	3		17
石錐				4						1								5
削器				5						1								6
礫石錘	3						6	1	2			3				1		16
小計	101	1	2	16	2	1	14	15	6	9	1	24	3	2	1	28	2	合計 228

田安山岩類・羽黒山流紋岩類・関白凝灰岩類等が分布し、極めて多様な石質の原石が今でも確認できる。また、遺跡の東側を南流する西鬼怒川や鬼怒川も、上流域に火山を控え、やはり多様な石質の原石が確認できる。このように、遺跡の周辺は、石材には恵まれており、当時のひとびとが身近かな場所で、各石器に最適な原石を選択しながら確保したであろうことは、想像に難くない。

第23表以外に、石製品の石質を加えても、周辺で採集不可能な原石として、僅かに蛇紋岩(垂飾)、黒曜石、結晶片岩があげられるにすぎない。これらのうち、高原山産の黒曜石は鬼怒川の北方を流れる荒川で採集可能であるので、古宿のひとびとが採集した可能性もあるが、糸魚川流域産の蛇紋岩、星ヶ塔産の黒曜石及び、おそらく秩父産と思われる結晶片岩は、やはり交易を通じてもたらされたものであろう。

なお、黒曜石に関しては、東京学芸大学教育学部化学教室の二宮修治氏によって、放射法による分析がなされているので、その結果をここに引用させていただくことにする。分析に用いられた資料は何れも剥片であり、出土地区等に関しては下記の通りである。

第24表 原産地黒曜石の化学組成の一例 —機器中性子放射化分析— (Na, Fe以外はppm)

試料番号	Na(%)	Fe(%)	Rb	Cs	La	Ce	Sm	Eu	Yb	Lu	U	Th	Hf	Ta	Co	Sc	Cr
高原山-01	2.77	1.24	110	5.6	25	48	5.8	1.0	3.9	0.54	-	12	5.1	0.7	1.2	7.4	4
星ヶ塔-01	2.93	0.46	150	6.9	16	31	4.7	0.66	2.3	0.39	-	9.9	3.5	0.6	0.1	3.0	3
神津島・沢尻湾-01	3.32	0.53	80	1.1	22	35	3.7	0.58	2.1	0.46	-	5.6	2.5	0.8	0.3	3.7	4
和田峠・小深沢-01	2.98	0.54	300	19	25	45	7.1	0.23	4.2	0.71	-	27	4.9	1.8	1.3	5.5	5

第25表 栃木県古宿遺跡出土黒曜石の化学組成

試料番号	Na(%)	Fe(%)	Rb	Cs	La	Ce	Sm	Eu	Yb	Lu	U	Th	Hf	Ta	Co	Sc	Cr
85310 TCM-100	3.10	0.49	150	8.0	16	33	5.2	0.61	2.7	0.37	3.5	10	3.6	0.8	0.1	3.0	7
85311 TCM-101	2.80	1.34	100	5.6	26	49	6.1	0.99	4.3	0.56	1.8	12	5.3	0.5	1.4	8.4	4
85312 TCM-102	2.86	1.31	110	5.6	25	47	5.8	0.99	3.8	0.53	2.5	12	5.0	0.4	1.0	7.5	4
85313 TCM-103	2.63	1.24	110	5.9	25	49	6.0	0.99	4.0	0.57	2.2	12	5.3	0.5	1.1	7.4	5
85314 TCM-104	3.06	0.49	140	7.9	15	34	5.1	0.60	2.5	0.35	3.1	10	3.5	0.8	0.1	3.0	5
85315 TCM-105	2.91	1.52	100	5.2	25	46	6.0	1.0	3.9	0.55	2.5	11	5.8	0.6	1.6	8.9	7
85316 TCM-106	2.83	1.26	110	5.5	26	48	6.1	0.91	3.9	0.58	2.4	12	5.2	0.5	1.0	7.5	7

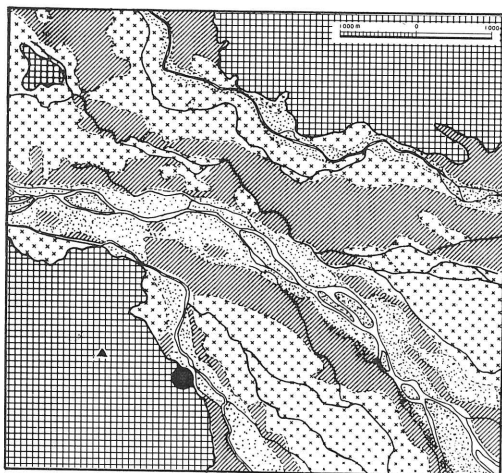
第26表 栃木県古宿遺跡出土黒曜石剥片の推定原産地

試料番号	出土地区	推定原産地
85310 TCM-100-54-01	CX-a3(Ⅲ層)	星ヶ塔
85311 TCM-101-54-02	"	高原山
85312 TCM-102-54-03	"	高原山
85313 TCM-103-54-04	"	高原山
85314 TCM-104-54-05	BX-d5(Ⅰ層)	星ヶ塔
85315 TCM-105-54-06	PT-16(理土)	高原山
85315 TCM-106-54-07	BIX-al(Ⅱ層)	高原山

以上、狩猟・漁撈・植物採集活動という、当時の人々の基本的な生業活動と石器の関係を中心に、本遺跡におけるそれらの特徴を記してみた。最後に、古宿遺跡周辺の地理的環境をふまえ、当時の「古宿人」の行動領域について概観して、小結を終えることにする。

第97図に示すように、当時の古宿のひとびとの行動領域に関しては、次のように4区分することが出来る。第1は遺跡の東側を網状流化して流れる鬼怒川と西鬼怒川である。第2はその間に挟まれた自然堤防などの微高地と後背湿地，第3は遺跡が立地する段丘及び羽黒山など周辺の山地，第4は遠隔地である（第97図参照）。

各領域と生業活動との主な対応関係を順に考えることにすると、まず狩猟は、遺跡の背後の羽黒山や周辺の山地を中心に、遠くは日光連山へと連なる遠隔地の山々や、遺跡の周辺の台地上でも捕獲の機会があったものと考えられる。その対照は、貝塚における調査の所見によるかぎりシカ、イノシシ等が中心に捕獲されていたものと考えられる。鳥類などは、自然堤防などの微高地上に於て捕獲の機会があったものと考えられる。石槍に比べ石鏃が圧倒的に数量で上回っていることから、弓矢による狩猟が中心であったものと考えられる。次に漁撈であるが、現在においてもこの付近での河川漁は活発であり、アユをはじめハヤ、コイ、フナ、などが捕獲されていることから、これらが網漁によって捕獲されていたものと考えられる。最後に植物質食糧の採集地であるが、堅果類の中でも陰性樹のトチ、クルミなどと、陽性樹のクリ、ドングリ類などでは採集地は明らかに異なっていたと思われる。これらは周辺の山地を中心に、日帰りが可能な程度の遠隔地の山々において採



集されたものと考えられる。次にワラビ、クズ、ユリ、カタクリ、ヤマノイモなどの根茎類であるが、これらは遺跡周辺の台地上や自然堤防などの微高地において採集されたものと考えられる。

第97図 古宿遺跡 (●) 周辺の地形概念図 (▲は羽黒山)

第6章 総括

まとめに先立って、今回の発掘調査及びその後の整理の中で判明した事柄について箇条書的に記しておきたい。更に、これらのうち遺跡全体にまで敷衍できると考えられる諸点についても多少触れておきたい。今回の調査地区は遺跡全体に比べれば約25分の1と極小範囲である。従って以下の事項の幾つかは一種の予察的なものとして考えておきたい。

(1) 遺跡の概要

1. 古宿遺跡は縄文時代中期から後期前半にわたって継続的に営まれた遺跡である。
2. 遺跡は羽黒山東麓の限定された地区に所在する。遺跡東側は鬼怒川沖積地に落ちる急崖で画され、北及び西側は羽黒山の急斜面で、南側は一尾根と小谷によって画される部分大略 $150 \times 100 m$ の範囲である(第1図)。調査はその一隅(遺跡北東縁)約 $650 m^2$ について実施された。
3. 標準土層については、七本桜軽石層まで0～V層までの層順を確認した(凡例参照)。このうちI層下位からIV層上位の約75cmの間が遺物包含層である。包含層は上中下三枚に分別することができる。それぞれ上位包含層・中位包含層・下位包含層と仮称した。これを標準土層に当てはめると各々I層下位～II層・III層上半・III層中位～IV層となる。
4. 上位包含層には加曽利EIV式から堀之内I式段階の土器が主体的に含まれる。同様に中位包含層には加曽利EII式からEIII式段階、下位包含層には阿玉台式から加曽利EI式段階の土器が含まれる。
5. 上記3・4から遺跡の時期区分を次のように試みた。上位包含層にかかわる時期を古宿第3段階、中位及び下位包含層にかかわる時期をそれぞれ古宿第2・第1段階とした。これは各遺構の検出層位とその時期によって検証され得る。更にこれは遺跡全体の時期区分にもかかわる可能性がある。

(2) 遺構について

1. 発掘調査で検出された遺構は、配石7基・土器埋設遺構8基・ピット23基・炉跡1基(住居跡か)の四種である。出土土器型式の量的構成、各遺構の検出層位から判断して、これらの営まれた時期を次のように考えた。但し、土器そのものを利用した土器埋設遺構以外は時期を特定する遺物が稀なためある程度の時期幅の中に位置づけざるを得ない。
配石; 加曽利EIV式から称名寺式段階(中でも称名寺II式を中心とする時期)
土器埋設遺構; 称名寺II式から堀之内式段階(中でも堀之内I式を中心とする時期)
ピット; 阿玉台式から堀之内式段階(大半は加曽利EIV式から後期初頭の時期)
炉跡; 堀之内I式段階(住居跡であった可能性が高い)

2. 配石は、使用された礫とその配し方より大まかに二種に分けられる。ひとつはケルン状に積み石する配し方、ひとつは平面的に敷き詰める配し方である。これらは決して単独に設置されることはなく、2～5基集合して一つの配石ユニットを形成するらしい。更に配石の下にピットを有する場合とそうでない場合がある。このことは配石の機能を一概に特定できない事を示すものと考えられる。また使用礫の中に破損した石皿・石棒等が含まれる。これらは被熱し赤化した様子がうかがえる。また中にはタール状付着物の見られるものがある。一部の配石には装飾品（垂飾）が出土している。
3. 土器埋設遺構は、堀之内Ⅰ式新段階の深鉢形土器を使用する例が多い。中でも最新は堀之内Ⅱ式段階に該当する深鉢形土器を使用した例である。埋設された土器は底部を残すものと口縁部から胴部にかけて輪切りにしたものの双方ある。埋設の仕方には正置・逆位・横転などうかがえる。また埋設土器内部に河原石が落ち込んでいる例、炭化物を多量に混入する例がある。これは土器埋設遺構の役割の一端を示すと考えられるが今のところ不明と言わざるを得ない。1号・2号土器埋設遺構と2号配石との重複関係から配石は土器埋設遺構よりも古い時期に構築されていたものと判断した。
4. ピットは最も長期的に営続した遺構であり、古くは阿玉台式段階にまでさかのぼることができる。新しくは古宿第3段階おそらく堀之内式期まで構築されていたものと考えられた。古い段階のピットは断面が袋状ないし円筒状であるものが多く、深さ80cm以上と割合深い。新しい段階のピットは大きさ形態ともに様々であるが、平面形は楕円形に近いものが多く、深さも30～40cmと浅い。また新しい段階のピットの大半はその覆土からして人為的に埋め戻されたと判断できた。ピットの時期については、それぞれの検出層位と覆土中より出土した土器の型式幅とその量的な構成から判断した（第3章参照）。

(3) 各遺構の変遷について

先述した各段階に応じて検出した遺構の変遷を考えてみる。但し、極めて小範囲の調査面積から想定したことであるから実際は今後の調査に負うところが大きい。

1. 古宿第1段階

調査地区においてはピットのみ構築された。ピットは袋状あるいは円筒状を呈するものが多く、覆土埋積状況からみて自然に埋没したものと判断された。従ってこれらは貯蔵形態の一種であった蓋然性が高い。しかし、他の多くの例のように重複激しく度重なる作り替えといった状況はうかがえない。つまり調査地区一帯は当段階では遺跡の中心から離れた位置に当たると考えられる。一方、調査地区南半のグリッドに当段階の土器出土が集中する傾向にあった。今回調査地区は遺跡の北東縁に当たるから、古宿第1段

階の遺構などの広がりや古宿遺跡全体の南部分に集中すると想定することもあながち的外れではあるまい。また、調査地区からは阿玉台式から加曾利E I式までの多くの土器破片が出土した。中には完形に近いものも含まれる。調査地区は、集落外縁部の種々の器物廃棄場として機能していたと考えることも可能である。

2. 古宿第2段階

各種遺構のうちピットの幾つかが構築された。しかし、各グリッドより出土する土器破片は少量でしかもほとんど小片であった。前段階より更に遺跡中心部より離れた位置に当たると考えられる。従って、当段階ではどのような機能を有した場であったのか想定することは困難である。またこの段階の遺跡の範囲を予測することも不可能である。

3. 古宿第3段階

出土した土器の量、この段階に属する遺構数からいっても、遺跡の中心的な時期に当たる。この段階に属する遺構は、ピット・配石・土器埋設遺構の三種である。今回調査地区は遺跡の中で特別な場の一部に相当するものと見られる。調査地区最南端に住居跡に属すると見られる炉跡が一基検出された。時期的には堀之内I式に相当する。つまり、当段階にあたる訳である。このことは調査地区を中心に周囲に住居跡群が取り囲むような遺跡全体の姿を想定させる。翻って、調査地区は当時の集落の中で配石以下三種の遺構が繰り返し構築されていた特殊な機能を持ったゾーンであったと理解できる訳である。後述するようにこれらの遺構は広い意味での祭祀的（埋葬に伴う祭祀も含めて）な機能を有していたと考えられる。調査地区はそれらの占用地区であった訳である。

上述の三種の遺構について、三者とも各々の出現時期あるいは営まれた時期が異なっている。これを要約すると次のとおりである。

ピット	加曾利E IV式から堀之内I式段階
配石	加曾利E IV式から称名寺II式段階
土器埋設遺構	称名寺II式から堀之内II式段階

それぞれの営まれた時期は異なっていたとはいえ、ある時期には三者とも共存していたと指摘することができる。また同じ区域にある時期間断なく繰り返し構築され続けた事は注目すべきことと考える。これらの意味については後述する所である。

(4) 出土遺物について

土器について

調査では阿玉台式から加曾利B式までの土器が出土しているが、ここではその中でも特に出土量の多かった（第2表参照）堀之内I式段階の土器について再記してみる。但し今回考察を加えた土器群は、堀之内I式全体の様相を云々できる程のものではないことを断

っておく。更に、県内出土の当段階の土器も多少検討に加えている（詳細は第5章第1節10を参照）。

1. 古宿遺跡出土の堀之内Ⅰ式土器は、大方統一されている該式土器三段階区分のうち、大半第三段階に含まれる（特に大形完形に近い土器）。但し、包含層出土の破片資料の中では一応全段階に該当するものが含まれている。
2. 甕形・深鉢形土器二種の器形が窺えるが、各々二種類合わせて四種類の形態分類が可能である。それぞれに地文縄文のみなどの寡飾の土器、沈線や磨消縄文を多用し様々のモチーフで器面を飾る土器の双方ある。しかし、各形態に各々が備わっており、文様の有無を以て粗製・精製の判断は困難である。また朝顔乃至ラッパ状に器体の開く深鉢土器（第53図7）はその文様の様相からみて堀之内Ⅰ式でも新しい段階に出現すると考えられる。
3. 堀之内Ⅰ式土器の文様は、その単位文の明確なもの（モチーフが独立的に器面に配置される段階）から各单位文間の連結沈線文、集合沈線の段階へと変遷する。本県域大半の土器についてもそれで理解することが可能である。
4. 土器群の系統性について凡ね二つの系統を看取できる。称名寺式の流れを汲む一群、南東北の網取式的な様相のうかがえるものの二系統である。但し、これは各々プロパーの土器群が存在するとは言い難く、大まかに二つの系統の影響を受けつつ或いは各々融合し合いながら本県域の堀之内Ⅰ式土器が展開していったと考えるべきである。

石器について

今回の調査では、各種の石器が総数228点出土した。出土遺構や調査地区の性格上、これらの帰属する時期は確証できないが、これらをもとに古宿遺跡に居住していた人々の生業の一端をうかがうことは可能であろう。

1. 狩猟具としての石鏃等に比べ、網漁具として蓋然性の高い切目石錘の出土量が多い。これは古宿遺跡人の主な生業として河川漁が重要な位置を占めていたことの証佐と言えよう。また、遺跡の立地からみて東に広がる鬼怒川沖積地内にその漁場があったことは否めない。
2. 打製石斧はかなりの量出土したが、他の同時期遺跡に比べ必ずしも多いとは言えない。打製石斧は土掘り具であると共に根茎類の採取に有効なものであるが、出土量の少なさは遺跡の特性を意味するのか或いは出土した場の性格に由来するのかは今のところ不明である。
3. 磨石・石皿類の出土は他を圧して最も多い。堅果類・根茎類を食料として大いに活用したであろう当時あっては当然といえよう。中に携帯用的な小形のセットが散見できた。調味料などの調合用の道具と予想し得る。

4. 1号配石中に打ち割られた石棒とともに、人為的に破壊されたとみられる石皿が出土した。中には被熱し多量のタール状付着物の窺えるものがある。配石の性格上考慮すべき出土例であろう。石皿を用いての祭祀の存在を予想させ得る資料といえようか。

(5) まとめ

配石の性格について、墓跡か或いはマジカルな祭祀の場かといった区分けがそれ程の意味を有しないことは既に指摘されたところである。古宿遺跡の当該遺構についても、配石下ピットの有無や配石とそれ程の時間を置かないで近在に設置された土器埋設遺構の存在など、墓跡・祭祀跡の両側面を持っていたことは疑えない。更に古宿第3段階に属するピット群のいくつかは配石や土器埋設遺構と同時存在していた可能性を指摘できる。つまり配石そのものの機能を論ずるよりも、ここでは今回調査地一帯（どの程度の範囲であったかは不明であるが）が墓域、祭祀の場として機能していた場であったと指摘する方が重要である。また、埋葬に関する諸儀礼も大きな意味で祭祀の一環と考えれば、調査地一帯は遺跡にかつて居住した人々の諸祭式の集中部であったといえよう。

一方、配石以下三種の遺構がある一定時期同時存在し、同じく祭祀的な意味合いを持って構築されたとするなら、同時存在時の各々の役割分担について考慮する必要があるか。このことについて或る想定をさせるのが配石とその他の遺構の分布の状況である。

今回の調査地区は遺跡の東端近く長さ南北約100 mにわたって実施された。更に村道下がその調査範囲であったため、最大幅6~7 mと極細長い調査地区であったわけである。しかし遺跡の一端を南北に切るように村道が走っていたため、遺跡内の遺構の広がりがある程度予想することは可能であると考えられる。

調査の結果、配石以下三種の遺構について次のような分布がうかがえる（第3図参照）。調査地区の中央にピット群が数多く集中する。しかもピットは二基ずつの切合いが多く、形能的には楕円形を呈する傾向にある。土器埋設遺構はピット群の南半に散在する傾向にある。配石はピットや土器埋設遺構を取囲むように周囲に構築されている。これらの分布の意味するところは次のようになろうか。

中央のピット群はいわゆる土壇墓であったろう。同時か或いはやゝ遅れて構築される土器埋設遺構も埋葬用の施設と想定できよう。土壇墓と土器埋設遺構の差は或いは埋葬される人間の年令的な差か、或いは埋葬法の差かはここで述べる根拠を持たない。ピットに二基ずつの切合いがうかがえるのは各々埋葬遺骸の近縁性を示しているのかもしれない。また、ピット・土器埋設遺構とも単に素掘り・土器を埋込んだだけというわけではなく、上面に多少の河原石を散見するなど標識的なものの設置をうかがわせる出土例がある（第4章の記述参照）。一方これらを取り囲むように構築された配石はいわゆる祭祀跡と理解でき

る。しかし、祭祀とはいえ埋葬と全く関係しないとはいえない。なぜなら先述したように、土壌を有する配石が存在するからである。

配石は各々無関係に存在するわけではなく、いくつかの配石が集って大きなユニットを形成することは前に述べたとおりである(第4章第1節)。この有り方は配石を用いての祭祀(埋葬)の有り方と深い係りを持つと思われる。つまり、配石ユニット内の各配石相互には何等かの有機的なつながりを考えなければならない。祭祀には幾つかの種類が想定できるが、大きく二つのレベルに分けることができよう。ひとつは村全体に係るものひとつは家族単位で行なわれるものである。村全体の祭祀は村を構成する各戸を離れて或る特定地区にて行なわれたであろうことは容易に見当がつく。一方家族単位の(個別的な)祭祀は単位集団毎に各々の場を有していたと思われる。今回の配石ユニットはまさにそのような場であったことを想定するのである。それでは、配石下に掘削されたピットは何を意味するのだろうか。家族単位でとり行なわれる祭祀の場に埋葬されるということつまりその人物は家族にとって重要な位置を占めていた者であったことを意味しまいか。言い替えればそれに家祖的な意味合いを含めることも可能であろうか。調査地区一帯は個別祭祀(埋葬儀礼も含んで)の集中部であった。しかもこれは居住地区から離れた特定地区への集中である。しかも埋葬と深い係りのある特定地区である。

以上、配石以下三種の遺構が、今回調査地区ではある一定時期同時存在していたと仮定し記述したわけである。しかし前述のとおり、各遺構の採用時期には異なりがある(第6章(2)参章)。これは、調査地区周辺における採用遺構の変遷、翻って場の機能の変遷を示す可能性も否めない。しかし古宿第3段階という時期を通じて、調査地区周辺が特定の機能を持っていた区域であることは否定できない。

県内において、配石・土器埋設遺構がいくつかのまとまりとして検出された例に大田原平林真子遺跡・氏家町勝山遺跡・佐野市北の内遺跡をあげることができる。前二者については本書付編に取上げられているのでここでは詳細な説明は省く。このうち真子遺跡例については報文中では敷石住居跡と判断しており、本遺跡例とは多少性格を異にする。敷石住居跡は一般住居の範疇で祭祀性の極度に発達した住居跡と想定する考えがある。対して本遺跡の配石は住居外で営まれた祭祀(埋葬に関する色彩の濃い)遺構である。真子遺跡の敷石住居は調査によれば中期終末から後期初頭という時期幅でとらえているようである。後期初頭の段階にまで把えられるとすれば、本遺跡の配石と時期的に併行する。とすれば屋内・屋外の差は何に起因するか興味深いところである。但し、筆者は真子遺跡例は中期終末に位置づけられると考えている。

佐野市北の内遺跡では、中期終末から後期初頭のピット・土器埋設遺構の集中地区を検

出している。このうちピットは加曾利EⅣ式から称名寺Ⅰ式段階までのものが大半であった。対して土器埋設遺構は称名寺Ⅱ式を中心とする時期にあたる。堀之内Ⅰ式段階の遺構はピット1基のみの検出で詳細は不明である。ピットは、骨片を含んだ両耳壺（加曾利EⅣ式）を出土したり、称名寺Ⅰ式深鉢の大きな破片を覆うように伏せた例があり、幾つかのものについては最終的に墓壙として利用されたことは否めない。しかもそのようなピットは特定地区に集中する傾向にあった。墓壙として利用されたであろうピットの出現時期、土器埋設遺構の出現の時期は本遺跡例と酷似する。

古宿遺跡については、近々その中央部に県道新設工事が予定されている。この工事は遺跡の中心を貫通するように計画されている。当然発掘調査を実施することになるだろうが、その結果今までの本書記載内容の正否が明らかにされるだろう。それよりも、遺跡破壊の無念さと引換えに、本県縄文時代研究に大きな足跡となろうことを期待する次第である。

第7章 終 言

古宿遺跡の発掘調査は昭和53年3月に実施された。爾来、本報告書刊行まで七年余りの年月を数える。当時発掘調査を担当した面々は、或いは教職に或いは文化財行政官にと各々の進むべき道をたどっている。本報告書刊行に至るまでの長い歳月を思う時、一面感慨無量なる気持ちにとらわれるのは禁じ得ない事実である。同時にそれ程な長期間を割いたにも拘らず本書刊行の遅滞は筆者等の怠慢と非力さを思わせ甚だ気恥しい。いずれにしても、やっときぎつけた本書の刊行に一種の安堵感を覚える次第である。

今回の発掘調査面積は遺跡全体に比べて極小範囲であったことは前に記したとおりである。しかし面積の割に検出した遺構遺物の量はかなりの数に上った。本書の執筆内容において、遺構の記載については発掘当時の筆者等の観察力の低さから必ずしも十分なものとは言えない。例えば配石等に関する認識の甘さはその属性を十分に捉えたとは言いがたい。

また、調査地区の性格から各遺構の所属時期を確証することは困難であった。しかしながら調査当時の記録類日誌等を繰り出来るだけ細密に記した積もりである。遺物については検出量がかかなりの数に上ったとしても手に余るほどの膨大な量では無かった。従って遺物についての記載に先立って、各分類基準が総量のなかでどれほどの割合を占めるか出来る限り明らかにしよう努めた。これが遺跡全体の中でどれだけ敷衍性を持つか証拠だてるものはないが遺跡の特性の一端を占めるのには違いなかろうと思う。

古宿遺跡は縄文時代中期から後期初頭にわたる大規模な集落跡の一つである。そして今回調査した地区はその一画特殊な機能を有した場所であった。その性格については本文中で詳細に触れたところである。いずれにしても古宿遺跡にかつて居住した人々の埋葬とそれに係わる祭りの行われた場所、つまり生と死の交錯する極めて精神性の高い場であったといえる。言い替えれば古宿人の精神文化の発露をそこに窺え得る場所と言えようか。遺跡はいまでこそ杉のうっそうたる場所であり、往時のよすがをとどめるものは散乱する土器片以外には窺えない。しかし今遺跡に立つ時、北遠方に秀峯高原の山容を望み、東に鬼怒川の流れとその兩岸に広がる沃野を臨む時、古宿人の往時の営為を思い浮かべるのは筆者一人では有るまい。

最後に、本書刊行に至るまでの多くの方々の励ましと御厚意に対し心から謝意を表する次第であります。

安孫子 昭二他 ; 1970『神明貝塚』庄和町文化財調査報告第2集 埼玉
市川市立考古博物館編 ; 1983「シンポジウム堀之内式土器の記録」千葉
武蔵野公園泥炭層遺跡調査会編 ; 1984『武蔵野公園低湿地遺跡』東京
齊藤 弘道 ; 1978「堀之内式土器研究の歩み」『茨城県歴史館年報』第4号 茨城
宮崎 朝雄他 ; 1980『ト伝 川口ジャンクション埋蔵文化財調査報告』埼玉
山本 暉久 ; 1980「縄文時代中期後半期における屋外祭祀の展開」『信濃』
渡辺 誠編 ; 1975『桑飼下遺跡発掘調査報告書』京都
渡辺 誠編 ; 1980『形原遺跡発掘調査報告書』蒲郡
渡辺 誠 ; 1975『縄文時代の植物食』東京
渡辺 誠 ; 1973『縄文時代の漁業』東京

第27表 古宿遺跡出土土器観察表

遺物番号	出土地	法量 (cm)	器形の特徴	文様などの特徴	備考
第27図1	BⅧa-3	口径 25.0 器高 37.5 底径 9.5 器厚 1~1.4	<ul style="list-style-type: none"> ・把手及び口頸部内弯気味に開く。 (把手は2本ずつ2対) ・底部より頸部まで直線的に開く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部鱗状の突起と断面半円形の隆帯による区画。 ・胴部中位で上下2段に分けられる。断面半円形隆帯による区画。 ・隆帯・鱗状の突起上には幅mmの刻み。隆帯に浴って半截竹管による沈線。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口頸部及び胴部の一部欠損
第27図2	包含層	口径 17.7 器高 (19.0) 底径 — 器厚 0.8	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆるやかな波状口縁(波頂部に刻み, 4単位) ・口頸部は内弯気味に開く。 ・底部より頸部までは直線的に開く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口唇突起下に断面半円形の粘土紐を逆三角形に貼付。 	<ul style="list-style-type: none"> ・底部欠損。他の部位は1/2破片。
第27図3	2号ピット	口径 38.3 器高 (31.4) 底径 — 器厚 1~1.3	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆるやかな波状口縁(4単位)。 ・口頸部は胴くびれ部より少内弯気味に開く。 ・胴部下半にやゝふくらみをみせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口唇部無文, 口唇下に微隆起線をもつ。 ・地文縄文を微隆起線によって区画微隆起線は磨き(無文化)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・径の1/4破片
第27図4	3号ピット	口径 36.3 器高 (24.7) 底径 — 器厚 1.1~1.5	<ul style="list-style-type: none"> ・平口縁 ・口頸部は胴くびれ部より少内弯気味に開く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口唇部無文, 口唇下に微隆起線をもつ。 ・地文縄文に貫入するような帯状の無文帯。無文帯は微隆起線で区画される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・径の1/2破片
第28図1	5号土器埋設遺構	口径 — 器高 — 底径 — 器厚 0.8	<ul style="list-style-type: none"> ・底部より直線的に開く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・二本単位の沈線によるモチーフ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・胴下半部1周
第28図2	6号土器埋設遺構	口径 33.8 器高 (33.0) 底径 — 器厚 1.4~1.7	<ul style="list-style-type: none"> ・平口縁。 ・口唇内屈。 ・口縁部は短く外反する。 ・胴部は中位で最大に膨らむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口唇部外側に1条の沈線が廻る。 ・地文縄文上に二本単位の沈線によるモチーフ(斜位の入組文「J」の字文, 蛇行文など)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・径の1/3破片

遺物番号	出土地	法量 (cm)	器形の特徴	文様などの特徴	備考
第28図3	1号土器埋設遺構	口径 44.8 器高 (35.5) 底径 — 器厚 1.3~1.7	<ul style="list-style-type: none"> ・波状口縁。(3単位,各単位に大小1個ずつの突起)。 ・口縁部は大きく外反する。 ・胴部はやゝ肩張となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口唇部外側に1条の沈線が廻る。 ・口唇突起下には太い沈線による偏平な渦文と楕円文。 ・口縁部は波頂下に半截竹管による渦文(1つのみ沈線による渦文。)渦文の両側は刺突ある隆帯で区切られる。渦文間は縦位の沈線文。 ・胴部は6単位の弧状沈線文と縦長の渦文(半截竹管5個,沈線1個)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・底部欠損
第28図4	2号土器埋設遺構	口径 25.0 器高 (16.3) 底径 — 器厚 0.9~1.2	<ul style="list-style-type: none"> ・波状口縁(3単位,各単位に大小1個ずつの突起)。 ・胴部は底部にスムーズに移行する(器形はNo.14の深鉢に似る。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・口唇部外側に1条の沈線が廻る。沈線端には刺突。 ・口唇突起上には円形刺突と刻み。 ・地文縄文上に縦位の弧状沈線とその間に渦文をもつ沈線文(6単位)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・胴部以下欠損
第28図5	5号土器埋設遺構	口径 36.0 器高 (25.4) 底径 — 器厚 1.2~1.5	<ul style="list-style-type: none"> ・口唇上に3個の突起(それぞれ大小1個ずつ)。 ・口縁部は短く外反する。 ・胴部の膨らみは少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地文縄文のみ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・底部欠損
第29図1	5号土器埋設遺構の周辺	口径 37.0 器高 (34.5) 底径 — 器厚 1~1.3	<ul style="list-style-type: none"> ・波状口縁(3単位,各単位に2個ずつの突起)。 ・口縁部は大きく外反する。 ・胴部はやゝ肩張りとなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口唇部外側に1条の沈線が廻る。 ・口唇突起下に刻みをもつ隆帯が垂下。 ・口縁は斜方向の沈線文。 ・胴部は弧状線文とその間の状文。突起に対応して円弧文。 	<ul style="list-style-type: none"> ・胴部中位以下欠損

遺物 番号	出土地	法量 (cm)	器形の特徴	文様などの特徴	備考
第 29 図 2	5号土器 理設遺構 の周辺	口径 31.2 器高 (20.5) 底径 — 器厚 1.2~1.3	<ul style="list-style-type: none"> 口唇上に3個の突起をもつ。 口縁部はやゝ内弯気味に外傾する。 胴部以下底部まで直線的にすばまる。 	<ul style="list-style-type: none"> 口唇外側に1条の沈線が廻る。 口唇突起下に3本の縦位の沈線。 胴部以下は地文縄文上に沈線で曲線的なモチーフを描く(三角区画の原形?) 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁$\frac{1}{3}$破片
第 29 図 3	4号土器 理設遺構	口径 — 器高 (17.5) 底径 11.5 器厚 1.0~1.1	<ul style="list-style-type: none"> 胴部中位に膨らみをみせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 3本単位の沈線によるモチーフ(縦位の楕円文か)と沈線間に充填縄文 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部以上欠損
第 29 図 4	3号土器 理設遺構	口径 — 器高 (20.0) 底径 8.5 器厚 1.1~1.2	<ul style="list-style-type: none"> 胴部中位に膨らみをみせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 三角形を主なモチーフとする区画文と沈線間の充填縄文。 胴部下半には文様なし。 	<ul style="list-style-type: none"> 口頸部以上欠損
第 29 図 5	4号土器 理設遺構	口径 25.0 器高 37.0 底径 10.5 器厚 0.9~1.3	<ul style="list-style-type: none"> 口縁はやゝ内弯して開く。 胴部以下底部までスムーズにすばまる。 底部はやゝ外側に張出す。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部から胴部中位までLR原体の縄文(横転し)。 	<ul style="list-style-type: none"> 完形
第 29 図 6	7号土器 理設遺構	口径 24.8 器高 31.3 底径 8.6 器厚 0.8~1.5	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部はやゝ内弯して開く。 胴部は中部で少々くびれ下半にてやゝふくらみをみせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 口唇部は無文(撫で)。 胴部中位までRL原体の縄文(横転し)。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部欠損